猟闇師　～ 魄繋ぎ ～

雷紋寺　音弥

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
猟闇師　～　魄繋ぎ　～

【Ｎコード】
Ｎ６１７３Ｏ

【作者名】
雷紋寺　音弥

【あらすじ】
東北地方の閑静な田舎町、火乃澤町に住む少女、天倉癒月。
夏の終わりごろから自分が人を殺してしまうという悪夢を見続けていた癒月だったが、夢の中で殺されていた人間が、現実でも殺されていたことを知り驚愕する。
呪いか、正夢か、それとも悪鬼の仕業なのか。
女性ばかりを狙った連続猟奇殺人事件と、癒月の見る悪夢の関係。
そして、闇の裏で牙を研ぐ恐るべき黒幕の正体とは！？
猟闇師シリーズ第五弾。

闇を用いて闇を喰らう、最強の敵が登場！！

～　逢魔ヶ刻　　正夢　～（前書き）

我は汝に、私と同じ姿をした人間を泥から作り出すように言っただろうか。
我は汝に、暗闇から救い出すようそそのかしただろうか。

メアリー・シェリー著　『フランケンシュタイン』より

〜 逢魔ヶ刻　正夢 〜

暗い、光の届かない世界を、天倉癒月（あまくらゆづき）は走り続けていた。

自分はなぜ、こんなところを走っているのだろう。それ以前に、この場所はどこで、自分はいったい何者なのだろう。

疑問は次から次へと湧いてきたが、その答えを自分の中に見つけることはできなかった。自分の正体、目的、その全てを知るよりも先に、身体の方が動いている。まるで、自分の身体が自分のものではないかのように、彼女の足は勝手に走り続けることを止めなかった。

ざく、ざく、という、何を踏みつけるような音が耳に響く。踏んでいるのは、木の葉だろうか。しかし、彼女の目にそれは映らない。

足を前に出すたびに、自分の腕に何かが触れた。それは草の葉か、それとも何か得体の知れない別の物なのだろうか。腕に物が触れた感覚はあるのに、それが何なのかは分からない。

走れども、走れども、目の前に広がるのは闇ばかり。右も左も分からないまま、癒月はひたすらに走り続ける。

どれほど走ったのだろうか。気がつくと、目の前には自分と同じくらいの年齢の少女が立っていた。その目は何かに怯え、竦んだ足が小刻みに震えている。許しを乞うような言葉を口にしているようだが、何を言っているのか、はっきりと聞き取れない。

自分は、この少女を追って来たのだ。なぜだか知らないが、そう

思えた。永遠に闇の中を彷徨うものだと思っていたが、ここにきて、ようやく人間に出会えた。

では、自分の中に渦巻く、この妙な不安感はなんなのだろう。目的の少女に出会えたというのに、今すぐ彼女の前から立ち去らねばならないという衝動に駆られる。まるで、二人が出会うのは罪であるかのように、自分はこの少女の前にいてはいけない気がしてならない。

――――逃げて！！

自分でも、なぜそんなことを口走ったのかは分からなかった。ただ、そう言わねばならないと思ったからだ。だが、それでも少女は震えたまま、その場を立ち去ろうとはしない。

次の瞬間、自分の手が大きく上に振りかぶられ、それが少女の頭に振り降ろされた。ゴスッ、という鈍い音がして、少女の身体が大きく後ろに倒れる。

気がつくと、少女は既に死んでいた。自分の手に残る、生々しい感触。いつのまにか、その手には血の付いたハンマーが握られている。

目の前の少女を、自分が殺した。なぜ、そんなことをせねばならなかったのか。なぜ、止めることができなかったのか。なにもかもが分からないまま、癒月は茫然とその場に立ちつくす。

ここにいるのは自分ではない。この身体は、自分の物であって自

分の物でない。

矛盾した考えではあるが、今の癒月にはそう思えた。思えば、闇の中を走り続けていた時から、自分の意思で身体を動かせた試しがない。

頭から血を流し、大きく白目を剥いて倒れている少女。これ以上、もう見ていたくはない。一刻も早く、この場から立ち去ってしまいたい。

しかし、そんな癒月の考えとは反対に、闇の中の自分は、少女にゆっくりと近づいて行った。ハンマーを投げ捨て、その手を少女の頬にそっと伸ばす。

今しがた亡くなったばかりだというのに、少女の身体は妙に冷たかった。闇の中の自分は、そのまま少女の皮膚をそっと摘まみ上げる。

べりべりと、何かの剥げるような音がして、少女の皮膚が無残にも剥ぎ取られた。思ったよりも血は出なかったが、その向こう側から顔を出した筋肉を見ただけで、思わず卒倒しそうになる。

――――もう止めて！！　どうして……どうして、こんなことをするの！？

そう、口では叫んでいるつもりだったが、やはり声が出ない。自分の意思とは反対に、少女の皮を剥いでゆく自分がいる。

見ているだけで、気が狂いそうだった。目を閉じることも、声を上げることもできず、目の前で行われる惨劇を見せつけられるという状況。胃の中の物を吐き戻したい衝動に駆られるが、それさえも敵わない。

やがて、少女の顔の皮を剥ぎ終わると、闇の中の自分が満足そうに笑った。そして、剥いだ皮の中から形の良い一枚を選ぶと、それをべったりと自分の頬に貼り付けた。

むせ返るような血の匂い。死体の皮膚が持つ生々しい感触。それらが実にリアルに伝わって、癒月は今度こそ悲鳴を上げた。

※　※　※　※　※　※　※

「きゃぁぁぁぁっ！！」

悲鳴と共に、癒月は勢いよく飛び起きた。

気がつくと、そこは自分の部屋だった。思わず自分の頬に触れてみたが、当然のことながら死体の皮などついていなかった。

安堵のため息をつき、ほっと肩を撫で下ろす癒月。随分と眠っていた気がするが、それにしては疲れが取れた気がしない。きっと、あの妙な夢のせいだ。

殺人鬼となった自分が、顔も知らない少女を殺害して死体を切り刻む。最近になってから、癒月は頻繁にその夢を見るようになった。特にホラー映画や心霊番組の類を見た記憶もないというのに、まっ

たく気味悪いことこの上ない。

眠たい目を擦りながら、癒月は枕元にある目覚まし時計を手に取った。その途端、癒月の顔が先ほどの夢の内容とは別の意味で、みるみる青ざめてゆく。

「いけない！　今日、まだ金曜日じゃない！！」

時計の針は、朝の七時を少し過ぎたところを指している。癒月の家から学校までは、歩いて三十分ほどの距離だ。急げば遅刻する心配はないが、そうのんびりもしていられない。

慌ててベッドから飛び出すと、癒月はパジャマを脱ぎ棄ててクローゼットの中にある制服を引っ張り出した。タンスを開けて一番上にあった下着も引っ張り出し、手慣れた様子で身につける。上下で色もデザインもちぐはぐな組み合わせになったが、知ったことか。

シャツのボタンを留め、ブレザーを羽織ながら、癒月は家の階段を駆け降りた。そのままリビングに飛び込むと、なにやら香ばしい匂いが漂ってくる。

「おや、癒月。ようやく起きたのかい？」

見ると、そこにはコーヒーを入れている父の姿があった。テーブルの上には焼けたトーストも置かれている。どうやら、一足先に起きた父が、朝食の用意をしてくれていたようだった。

「もう、お父さんったら！　どうして、起こしてくれなかったのよ！？」

「ごめん、ごめん。癒月があんまりよく寝ているようだったから、起こすのが可哀想になってね。でも、代わりに朝ごはんの準備はしておいたから、それで勘弁してくれよ」

口ではそう言いながらも、癒月の父はなんら悪びれた様子もなく笑っていた。どうにも怒りのやり場がないが、これもいつものことである。

気にしていても始まらないため、癒月はさっさと洗面台で顔を洗うことにした。早朝から、父と下らない痴話喧嘩をしても何の得もない。それに、癒月にとって家族と呼べる存在は、今は父くらいしかいないのだから。

癒月の父、天倉啓輔（あまくらけいすけ）は、今でも現役で活躍する優れた医者だ。本業は外科医だが、場合によっては内科もやる。こと最近は、年寄りの患者が増えたために、内科医として仕事をすることが多かった。父曰く、「腹痛の患者に薬を飲ませるくらいであれば、自分にもできる」とのことである。

年齢問わず、常に患者のことを第一に思い、仕事一筋で生きて来た父。だが、それ故に、母親との関係は上手くゆかなかった。仕事ばかりで家庭を顧みない父に愛想を尽かし、癒月がまだ幼い頃、彼女の母は家を出て行った。自分以外には兄弟もいなかったため、以来、癒月は父と一緒に二人暮らしを続けている。

一通り髪を梳かし終えたところで、癒月は小さな溜息をついた。

先ほどは勢いに任せて怒鳴ってしまったが、癒月にとって、父はたった一人の家族である。妙な夢のせいで疲れていたとはいえ、朝から八つ当たりをするのはさすがに酷かったのではないか。

気まずい空気のまま、癒月は再びリビングに戻った。父は機嫌を損ねているかと思ったが、その顔を見る限りでは、特に心配はないようだった。

「どうした、癒月。私の顔に、何かついているかい？」

「ううん、別に。それと……さっきはごめんなさい」

「なんだ、そんなことか。私は特に、気にはしていないよ」

父の口から直接告げられて、癒月は改めて安心した。仕事に対しては厳格だが、癒月に対しては優しい顔しか見せることはない。

「それよりも、癒月も早く食べた方がいいんじゃないか？　今日は、まだ学校があるんだろう？」

「うん。それじゃ、いただきます」

トーストをかじると、バターの味に混ざって、少しだけ焦げた匂いが口に広がった。父の焼いたトーストは、どうやら少し焼き過ぎだったらしい。

焦げたパンを流し込もうと、癒月は近くにあったコーヒーカップを手に取った。そのまま中身を口にしたが、先のパンよりも強い苦みが舌を襲い、あやうく吹き出しそうになった。

「うっ……。苦っ……！！」

「おいおい。それは、まだ砂糖もミルクも入れていないやつだぞ」

「そ、それを早く言ってよ……。私がブラック苦手なの、お父さんだって知ってるでしょ……」

口元を押さえて、なんとかコーヒーを飲み込んだ。自分で言うのもなんだが、癒月は大の付くほどの甘党だ。

コーヒーは嫌いではなかったが、それでもミルクと砂糖をしっかり入れなければ口に合わない。ましてや、ブラックのコーヒーなど癒月にとっては毒物と同じである。

「はぁ……。寝坊はするし、コーヒーは苦いし……。今日は、朝からついてないなぁ……」

父親から渡されたコーヒーミルクを注ぎ、癒月はカップの中身をスプーンでかきまわした。スティックシュガーは、既に三本は入れている。このくらい使わなければ、彼女にとってコーヒーは飲み物としての役割を果たしてくれない。

項垂れたまま、コーヒーカップを口につける。ミルクの香りと砂糖の甘さが口に広がった。

やはり、朝のコーヒーはこうでなくてはならない。焦げ目の強いトーストにも、側にあったブルーベリーのジャムを塗りたくる。塊を山のように盛っているのを見て父が目を丸くしていたが、癒月は別に気にしない。

甘い物は、女子にとっては精神の栄養素だ。太るだの何だのと言って、あれこれと我慢する方が身体に悪い。

ふと、テレビに目をやると、そこでは朝のニュースがやっていた。画面の向こう側では、相変わらず政治家達が互いに責任のなすり合いをやっている。報道陣に囲まれている時はのらりくらりとした返事で曖昧にかわすくせに、いざ国会で相手に意見を言う時は、ここぞとばかりに叩きまくる。

まったくもって、情けないと癒月は思った。これならば、自分のクラスのホームルームの方が、まだ紳士的に話し合いをしているような気がする。高校生の学級活動よりも程度が低く見える国会というのは、一国の議会の在り方としてはどうなのだろうか。

「朝っぱらから、相変わらずくっだらないわねぇ……。もうちょっと、マシなニュースやってないのかしら」

手元にあったリモコンを取り、癒月はうんざりした様子でチャンネルを変えた。他の局でもニュースをやっていたが、先の政治家の話とは違い、今度は何やら強盗や傷害、殺人などといった事件を扱っているようだった。

≪では、次のニュースです。昨晩、N県火乃澤町の山中で、女性のものと思しき遺体が発見されました≫

「やだ！　火乃澤町って言ったら、この町じゃない……」

チャンネルを変えるなり飛び込んできたアナウンサーの声に、癒月は思わず反応して言った。死体が発見されるニュースなどは別に珍しい物でもないが、その発見現場が自分の住んでいる町となれば、話は別だ。

死体が見つかる話など、どこか遠くの町で起こっている現実味の

ない話だと思っていた。それが、自分の町で起きたというだけで、こうも不気味なリアリティを持って迫って来るのだから不思議である。

≪遺体は今月の初めより行方不明になっていた県内の女子高生、佐藤美奈子さんのものと思われ、警察の調べでは、死後二週間ほどが経過しているとのことです≫

「女子高生って……。まさか、うちの高校の生徒じゃないわよね……」

火乃澤町には、癒月の通う県立の火乃澤高校以外にも、いくつかの高校がある。この情報だけでは自分の高校の生徒が被害に遭ったとは言い難いが、それでも気味悪いことには変わりない。

同年代の少女が、自分と同じ町で死んだのだ。これで平然とした顔をしていられる方が、よっぽどどうかしていると癒月は思った。

≪美奈子さんは、今月の初めから行方不明になっており、家族からは捜索願が出されていました。発見された時、美奈子さんの頭部に激しい損傷が見受けられたため、警察では美奈子さんが、何らかの事件に巻き込まれた可能性があると見て、捜査を続けています≫

画面の向こう側では、アナウンサーが淡々とした口調で事件の詳細を語っている。人が死んだというのに、そこには追悼の意思のようなものは感じられない。まあ、実際に他人の訃報の記事を読むたびに感情的になっていては、とてもではないが、アナウンサーなどやっていられないのかもしれないが。

画面が切り替わり、遺体の発見現場の様子から一転して、最後は

被害者の名前と顔写真が映し出された。年齢を見ると、まだ十六歳。癒月と同じ歳であり、恐らく学年も一緒だろう。

少女の顔は、火乃澤町の人間にしては少々派手な印象を受けた。都会派と言えば聞こえはいいのだろうが、要するに遊び人の顔である。もっとも、癒月の学年にも同じような恰好をした人間が全くいないわけではないため、あまり違和感は感じない。

いつもであれば、「可哀想……」の一言で終わってしまうであろうニュース。しかし、今日に限って、癒月にとってそのニュースは、極めて特別なものだった。

「う、嘘……」

画面に映し出された少女の顔写真を見た瞬間、コーヒーカップを持つ癒月の手が小刻みに震えた。慌ててカップをテーブルに置かなければ、辺りに中身を撒き散らしていたかもしれない。

画面の向こう側で、生前に友人に見せていたであろう笑顔を振りまいている一人の少女。その少女の顔に、癒月ははっきりと覚えがあった。

朝方、自分がうなされることになった、あの悪夢。殺人者となって少女を追い詰め、最後はその少女を殺して皮を剥ぐ。思い出すだけでもおぞましく、今しがた胃に入れた朝食を吐き戻しそうになる。

自分の目の前で、頭部にハンマーを振り下ろされて絶命した少女。糸の切れた人形のように倒れ、最後は顔の皮を無残にも剥ぎ取られる。その少女の顔こそ、テレビ画面に映っている被害者、佐藤美奈子のものに他ならなかったのである。

>
i
1
3
3
9
3
—
1
2
4
5
<

～ 逢魔ヶ刻　正夢 ～（後書き）

本作品は一部に暴力的な表現を含みますが、これは作中の暴力行為その他を推奨するものではありません。

また、一部の人間が差別的な考え方に囚われて非道な行いを働いたり、それらの人間が法ではなく、個人の意思や超常的な存在によって裁かれる描写が存在します。

これらの描写に対して政治的道徳観、及び宗教観から不快な思いをされる可能性がある方は、これより先の内容を読むことを控えるようお勧めいたします。

〜 壱ノ刻　夜祭 〜

十月の異称は神無月という。年に一度、日本全国の神社に祭られる八百万の神が、出雲大社に集まって話し合いをするとされている月だ。そのため、十月の間は諸国の神社で社が空になり、故に神のいない月、神無月と呼ばれるようになったという。

ちなみに、出雲では十月の異称を神在月としている。年に一度、大勢の神が集まる月なのだから、この呼び方は正しいものと言えよう。

とにもかくにも、十月は神のいない月。実家が神社である九条照瑠（くじょうあきる）にとっても、それは当り前の考え方だった。大抵の場合、秋祭りなどが九月に行われるのも、翌月は神が社にいないからである。

先月の秋祭りの際は忙しい思いをしたが、今月は参拝客も少なかった。もうじき十月も終わろうとしている今、改めて今月のことを振り返ってみる。

思えば、神社の境内を掃除する以外、特に家の仕事がなかった。家の周りがいつも以上に静かだったというのは、決して気のせいではない。

十月は、九月に比べて静かな月。本来であれば、そう考えるのが普通である。が、現代においては、必ずしもその考えは当てはまらないこともある。

家の仕事は少なかったが、十月は別の意味で祭事が多かった。照瑠の学校でも当然のように文化祭はあったし、今では外国の祭りが

日本の文化に溶け込んで、新たな祭事を生み出している。

ハロウィン。本来はケルト人のサウィン祭と呼ばれるものが原型だったが、アメリカに渡ってから今のようなスタイルになったらしい。要するに、仮装して街を練り歩き、近所の家に菓子をねだるというものだ。ちなみに、カボチャのランタンを使うのもアメリカ式で、本来はカブだったらしい。

その日、照瑠は友人の嶋本亜衣（しまもとあい）に連れられて、町の公民館を訪れていた。いつもであれば老人会の寄合くらいにしか使われない場所だが、今日に限って公民館のホールは賑やかだった。

「それにしても、まったく凄い熱気ね……。子ども会のパーティーって言われてたから、甘く見てたわ……」

額の汗を拭きながら、照瑠がぼやく。その恰好は、家の仕事を手伝う際にまとう巫女の衣装そのままである。

「まあ、小学生はいつの時代も元気だからね。今日のハロウィンパーティーも、照瑠達が手伝ってくれなかったら、いくら私でも参ってたよ」

「手伝うっていうよりも、そっちが強引に参加させたんじゃない。それに、私は亜衣が青年ボランティアの会に所属していたなんて、初耳だったんだけど……」

「まあ、そこは『人脈の亜衣ちゃん』ですから。それに、私はまだ高校生だから、正式な会員じゃないよ。あくまで、大学生のお兄さんやお姉さんのお手伝いって感じ」

「その手伝いを、更に他の人間に手伝ってもらっているようじゃ、まだまだ威張れないわよ、亜衣……」

目の前で得意そうに胸を張る亜衣に、照瑠はあくまで冷静に返した。

お調子者で変わり者。おまけに都市伝説を主とする雑多な知識と趣味、それに幅広い人脈を持つ、火乃澤高校随一の変人女子高生。それが、照瑠の友人である嶋本亜衣（しまもとあい）である。その背丈は未だ小学生ほどしかなく、辺りでパーティーのゲームに興じている子供たちの中に混ざれば、瞬く間に見分けがつかなくなってしまうほどだ。

今回の青年ボランティアによる子ども会のパーティーも、亜衣が照瑠を強引に誘ったものだ。時にその押しの強さに辟易することもあるが、気がつけば、なぜか仕方なくつき合ってしまう自分がいる。亜衣曰く、これも仁徳の成せる技ということらしい。

「おい……。それよりも、嶋本。俺はいったい、いつまでこんな恰好をしていればいいんだ……」

気がつくと、照瑠と亜衣の後ろには、彼女たちよりも一回り背の高い少年が立っていた。その髪は白金色で、瞳は赤く肌は白い。吸血鬼のような格好をしていたが、洋服以外は決して仮装によるものではない。赤い瞳も色の抜けた髪の毛も、全て彼の自前である。

犬崎紅（けんざきこう）。今年の六月に、照瑠の学校に転入して来た謎の少年である。亜衣とは別の意味で変人の烙印を押されている彼であるが、照瑠はそんな彼の正体を知っている。

紅が火乃澤町にやって来たのは、そもそも現代に蘇った古の怪物

を追ってのことだった。彼はこの現代において、闇の世界の住人と戦うための術を持った、数少ない人間の一人なのである。

自分の追ってきた怪物を倒した後、彼はこの町に留まった。理由はなぜだか知らない。紅に聞いても、それだけはいつも適当にはぐらかされてしまう。そして、照瑠や亜衣との奇妙な交流関係を続けながら、今に至るというわけだ。

「あっ、犬崎君！　お菓子を配る準備、もうできた？」

紅の顔にはあからさまな苛立ちが見えていたにも関わらず、亜衣は何ら気にしていない様子だ。あの無愛想な紅を相手に、あくまで自分のペースで話を続けられるのは、やはりさすがと言うべきなのだろうか。

「菓子の準備なら、向こうの部屋で加藤と長瀬がやっている。俺は、ああいった作業はどうにも性に合わないんでな。適当に手伝って、後は抜けて来た」

「もう、それじゃあ駄目じゃん！　せっかく呼んだんだから、ちゃんと手伝ってよ！！」

「呼んだというよりも、お前が強引に連れて来たんだろうが。俺はもともと、こういった人混みは好きじゃない」

「まあまあ……。そこは、今度の月曜日に購買のパンを好きなだけ奢るから……それで勘弁してよ」

まったく悪びれた様子もなく、亜衣は紅の前で手を合わせて言った。対する紅は、既に諦めているのか、何も言わずに亜衣から目を

そらした。

購買のパンを奢ることを餌に、あの犬崎紅を買収する。そんな餌で釣られる紅もどうかとは思うが、照瑠はそれ以上に、亜衣のたくましさに感心した。

相手がどんな人間であれ、自分の持つ流れに巻き込んで事を運んでしまうバイタリティ。決して全てを真似したいとは思わないが、その積極性とポジティブな思考だけは、照瑠も認めざるを得ない。

「ところで、照瑠。巫女さんの衣装もいいけど、やっぱりそれだけじゃ、ちょっと寂しくない？」

紅に無視され、亜衣の話の矛先が再び照瑠に向いた。

「寂しいって……そう言われても、ねえ……。巫女の服なんかに、これ以上の飾りは必要ないわよ」

「いや、分かってませんなぁ、照瑠殿。ハロウィンと言えば、怪物。日本の怪物と言えば、それは妖怪」

「いったい、何が言いたいの……」

話し始めて数秒と絶たず、亜衣の口調が解説モードに入った。その様子を見て、早くも身構える照瑠。亜衣がこの話し方になった場合、その口から出るものは、大概がろくでもない内容の話ばかりだからだ。

「とりあえず、照瑠はもっと、妖怪チックな恰好をした方がいいと思うんだ。人外の存在の魅力っていうか……なんか、そんな感じの

ものが欲しいんだよね」

「人外って……。それじゃあ、私に河童とか天狗の恰好をしろって言うの！？」

「いや、そんなんじゃなくて、もっと見た目が可愛いやつだよ。例えば……これなんかどう？」

そう言って、亜衣は自分の被っている魔女の帽子を頭から外した。そして、帽子の中に手を突っ込むと、その中から何やら黄色い獣の尻尾のような物を取り出して見せる。

「はい、これ。とりあえず、狐の耳と尻尾だよ。これをつければ、照瑠の魅力も一気にグレードアップ間違いなし！！」

「いや、グレードアップって言われても……。それ以前に、その耳と尻尾、どうやって帽子にしまってたのよ……」

「それは、聞かないお約束ってことで……。まあ、こんなこともあろうかと、最初から仕込んでおいたんだけどね。巫女といえば狐耳。狐耳といえば巫女。これ、常識でしょ」

まったくもって、無茶苦茶な理論である。巫女の服だけならまだしも、高校生にもなって、狐の耳だの尻尾だのをつけてはしゃぎ回るのは勘弁願いたい。

「ごめん、亜衣。せっかく出してもらって悪いけど……やっぱり、私にはちょっと無理かな」

「むぅぅ……。相変わらず、肝心なところでノリが悪いなぁ……。

狐耳の巫女の尻尾でモフモフしたいっていうのは、健全な婦女子と青少年に共通する夢なんだよ！！」

「いや……。むしろ、かなり特異な人種の趣味に限られると思うんだけど……」

右手に尻尾、左手に狐耳を持って熱弁を振るう亜衣に、照瑠は呆れた顔をして答えた。

そもそも、亜衣の話にある婦女子と青少年の価値観は、世間一般のそれとかなりずれている。どちらかと言えば、不健全な腐女子と性少年に共通する趣味と言った方が正しいのではないだろうか。

「とにかく、その耳と尻尾をつけるつもり、私にはないからね。いつまでも外に出してないで、さっさと仕舞いなさいよ」

「はぁ……。このモフモフ感を楽しめないなんて、照瑠は分かってないなぁ……。犬崎君も、そう思うよね？」

照瑠に耳と尻尾を受け取ってもらえず、亜衣が紅に同意を求めた。が、残念ながら、その答えが紅から返ってくることはない。

会場に用意されたパイプ椅子に座り、紅は腕を組んだまま豪快に眠っていた。恐らくは照瑠と亜衣が話し込んでいる間に眠ったのだろうが、その動きにまったく気づかなかった。亜衣とは別の意味で、紅も随分とたくましい人間だと照瑠は思う。

そういえば、紅は学校の授業中も、よく居眠りをしていた。なんでも、朝から昼にかけては力が出ないらしく、夜になるまで目と脳を休ませておきたいとのことである。先天的なアルビノである紅が

紫外線に弱いのは分かるが、だからと言って授業中に居眠りをしてよいというわけではない。

赤い瞳と白い肌。その上、紫外線に弱く、昼間は居眠りばかり。今の紅の服装も相俟って、まるで本当の吸血鬼のように思えてならない。まあ、実際に吸血鬼以上に恐ろしい存在を自分の影に宿しているため、紅の存在が妖怪じみていることを否定はできないのだが。

「まったく……。照瑠も犬崎君も、パーティーの時くらいは少し羽目を外したっていいのに……」

狐耳と尻尾を帽子に仕舞いながら、亜衣がぶつぶつと文句を言っている。気合を入れて容姿してきただけに、受け取ってもらえなかったのが不満なようだ。

小道具を仕舞った帽子を頭に乗せ、亜衣の意識が一瞬だけそこに集中する。ああ見えて、いつもは隙のない亜衣だったが、この時ばかりは無防備になる。そんな彼女の隙をつき、軽快な少年の声が響き渡った。

「お菓子くれないと、悪戯するぞぉ！！」

パーティーの参加者と思しき小学生の一人が、突然、亜衣のスカートをまくり上げた。これには、さすがの亜衣もたまらない。慌てて両手で前を押さえると、目の前にいる小学生を睨みつけて叫ぶ。

「ちょっと、なにすんのさ……って、お前、長瀬君ところのクソガキか！？」

「うるせえ、ロリババア！　俺とそんなに身長が変わんない奴に、

クソガキなんて言われたくないね！！」

「いきなり女の子のスカートをめくるようなやつ、クソガキ以外のなんだってのさ！　長瀬君の弟だからって、場合によっては容赦しないよ！！」

「だから、クソガキじゃねえって言ってんだろ！　俺には長瀬晶（ながせあきら）っていう、立派な名前があるんだからな！！」

ああ言えばこう言う。典型的な悪ガキの代表である。なんとかして年長者の威厳を見せつけようとする亜衣だが、ここは完全に晶のペースだ。自分のテンポで場の空気を支配する亜衣にしては、珍しいことである。

「ま、確かに兄ちゃんと同じ歳の女からすれば、俺はガキかもしんないな。だけど……そうやってムキになって油断すると、また酷い目に合うぜ」

鼻の下を指でこすりながら、どこか余裕の表情を浮かべる晶。そんな晶の態度に我慢がならなかったのか、亜衣も更に前に出ようと足を踏み出す。が、その足はすぐに動きを止め、同時に亜衣の無様な悲鳴が辺りに響くこととなった。

「ひゃぁぁぁぁっ！！」

見ると、亜衣の胸元を、小さな二つの手がつかんでいた。すかさず手を振り払い、後ろを向く亜衣。そこにいたのは、先の晶と同じくらいの背丈の小学生。子供にしては整った顔立ちをしているが、その目は晶と同じく悪ガキのそれだ。

「へっ……。俺に後ろを取られるようじゃ、まだまだ甘いぜ、亜衣姉ちゃん」

亜衣の胸を後ろからつかんだ少年が、挑発するようにして笑っていた。ほとんどセクハラに等しい行為をしていながら、全く悪びれた様子がない。

「おのれぇ……。よくも、可憐な乙女の胸を弄んでくれたなぁ……。この恨み、晴らさでおくものかぁ……」

亜衣の頭に見る間に血が昇り、その顔が真っ赤に染まって行く。いつもは飄々としている分、亜衣がこのような姿を晒すのは珍しい。

だが、そんな怒りのボルテージを上げる亜衣を他所に、二人の悪ガキ達は言いたい放題に感想を述べていた。

「可憐な乙女の胸って……。ほとんど詰め物のくせに、よく言うよ……」

「詰め物？　それって、偽物ってことか、藤宮？」

「ああ、そうだぜ。後ろからつかんでみたけど、綿みたいにパフパフでスカスカ。俺たちのクラスの女子の方が、まだ胸があると思うぜ」

正に、火に油を注ぐ一言。神をも恐れぬ行為とはこのことだ。もはや、完全に我慢の限界を越えた亜衣が、拳を振り上げて少年たちに襲いかかる。

「お前達、もう許さんぞ！　その身体、八つ裂きにして黒魔術の実

験材料にしてくれる！！」

「うわぁ、助けてくれぇ！　ロリババアの魔女に殺されるぅ！！」

口では物騒なことを言いながらも、どこか楽しそうに会場を逃げ回る少年たち。そして、それを追う魔女の恰好をした亜衣。互いの身長が同じために、遠くから見ると、小学生同士が鬼ごっこをして遊んでいるようにしか見えない。

「まったく、なにやってんだか……。これじゃあ、どっちが保護者だかわかりゃしない……」

逃げ回る小学生を追いかける亜衣を見て、照瑠が心底呆れた顔をして呟いた。

確かに、亜衣の怒りも分からないではない。が、小学生の男子二人に、完全に遊ばれているようでは意味がない。こうなると、もはや微笑ましいを通り越して馬鹿馬鹿しくなってくる。

「おい……。あれ、放っておいていいのか？」

いつの間にか、照瑠の後ろでは紅が目を覚ましていた。ということは、先ほどのあれは、狸寝入りだったということか。

起きていたのであれば、騒ぎが大きくなる前に止めてくれればよかったのに。そう思った照瑠だったが、あえて口にすることはしなかった。

そんなことを紅に言ったところで、適当に流されるのがオチだ。紅が無愛想で口が悪いことは、照瑠も十分に承知している。

青年ボランティア主催のパーティーそっちのけで追いかけっこをする、亜衣と悪ガキ二人組。永遠に続くかと思われたそれは、程なくしてあっけなく終わりを告げた。

先ほどの悪ガキ二人の首元をつかみ、亜衣と同じく魔女の恰好をした少女がこちらへやってくる。年齢は、照瑠と同じくらいだろうか。少なくとも、青年ボランティアの会に所属している大学生には見えない。

「やれやれ……。ようやく捕まえたわ」

二人の悪ガキを照瑠の下に連行し、その少女が言った。後ろでは、満身創痍の亜衣が、肩で息をしながら立っている。目は血走り、顔は汗に濡れ、おまけに鼻の穴も大きく開いている。はっきり言って、お世辞にも可愛いと言えるものではない。プリクラシールを撮る際に、変顔として作る分には問題ないのだろうが。

「ほら、あなた達。早く、嶋本さんに謝りなさい」

落ち着いた中にも、どこか厳しさを感じさせる口調だった。もはや逃げられないと観念したのか、少年達も亜衣に頭を下げて謝罪の言葉を述べる。顔ではどこか不満そうにしていたが、それでも謝っただけマシというものか。

「なんだ、お前達。また怒られてんのか？」

ふと、後ろを見ると、そこには菓子袋を持った少年と少女が立っていた。少年の方は狼男の仮装、少女の方は、亜衣と同じく魔女の仮装をしている。

「あっ、長瀬君。それに詩織も……。お菓子の準備、終わったの？」

「ああ、一応はな。仕分けも済んでるから、いつでも配れるぜ」

菓子袋を豪快にテーブルの上に置き、得意そうに指を立てる少年。茶色く染まった髪がいかにも遊び人といった印象を与えるが、不思議と軽薄そうな感じはしない。

長瀬浩二（ながせこうじ）。照瑠の友人である加藤詩織（かとうしおり）の彼氏である。その馴れ初めは、犬崎紅が怪物を追ってやってきた事件に巻き込まれたことだ。

女遊びが激しそうな浩二と、照瑠と同じ文芸部に所属する、真面目を絵に描いたような詩織。一見して水と油の中に思えるが、なぜか二人の関係は上手くいっていた。

まあ、浩二は詩織に合わせて真面目に授業に出るようになったし、部活にも精を出している。まだ一年であるにも関わらず、ここ最近の試合には常にレギュラーで出場しているようだ。

詩織も浩二のことを考え、以前よりもファッションに気を使うようになった。メガネもコンタクトレンズに変え、髪も少し染めた。互いに両極端な性格と見られがちな二人だったが、意外と柔軟な思考の持ち主だったのかもしれない。

「それにしても……」

叱られて不満そうにしている晶に向かい、浩二が口を開いた。その名字からも分かる通り、浩二は晶の兄だ。

「お前、小六にもなって、まだスカートめくりなんかやってんのか？　いいかげん、セクハラ遊びからは卒業しろよ」

「うっせえ！　スカートめくりは男のロマンだ！　兄ちゃんには、それが分かんないだけだろ！？」

「ロマンって……。そんなんだから、『パンチラハンター長瀬』なんて、シケたあだ名をもらうんだろうが……」

小六にもなって、未だに女子のスカートをめくる。そんな弟の所業に、浩二も呆れ果てていた。

こんな遊びが許されるのも、せいぜい小学生の時までだ。中学に上がれば、間違いなく生活指導担当に説教された上、場合によっては親が呼び出される。同じ男として弟の気持ちが分からないでもないが、少しは大人になってもらいたい。

ちなみに、浩二の言っていた『パンチラハンター長瀬』とは、実際に晶が学校で呼ばれているあだ名である。彼の筆頭に、火乃澤小学校には合わせて四人の悪ガキがおり、その全員がクラスの女子から目の敵にされている。

例えば、晶と一緒に亜衣から逃げ回っていた少年、藤宮清（ふじみやきよし）。その上品そうな名前と、名に恥じぬ整った顔を持ちながら、彼のあだ名は『パイタッチャー藤宮』である。顔は良くても頭の中身はエロい妄想で溢れているため、当然のことながらまったく女子にモテない。

この二人に、今はこの場にいない『浣腸マスター山本』と『縦笛リッカー横田』を加えることで、火乃澤小学校変態四天王が勢揃いする。

晶と清の顔を見比べながら、浩二はつくづく、この場に残る四天王の二人がいなくてよかったと思った。なにしろ、二人いるだけでもこの騒ぎなのだ。こんな連中を、時には四人もまとめて相手にせねばならない、小学校の先生の苦労が思いやられる。我が弟のことながら、まったく恥ずかしい限りだ。

「とにかく……お前達、もういいかげんに、エロい悪戯からは卒業しろ。ガキの間はまだいいが、その内、マジで警察に捕まるぞ」

「へっ、よく言うぜ。そんなこと言って、兄ちゃんだって俺達と同じくらいか……それ以上にエロいことしてるくせにさ」

「なんだ、そりゃ？　言っておくが、ベッドの下のエロ本の類は、詩織とつき合うことになってから全部捨てちまったからな。そんな昔のことを引き合いに出したって、無意味なんだよ」

憎まれ口を叩くことを止めない弟の額を、浩二は軽く指で小突いた。これぞ年長者の余裕というもの。この辺りで黙らせておかないと、悪ガキ二人が再び調子に乗り出さないとも限らない。

だが、そんな浩二の余裕を他所に、晶も引き下がる様子は見せなかった。その口元をにやりと歪めると、畳み込むようにして浩二にまくし立てる。

「悪いけど、俺が知ってるのは、そんな昔の話じゃないぜ。この間、兄ちゃんの部屋をこっそり覗いた時に、見ちゃったんだよ」

「はぁっ！？　お前……なに、勝手に人の部屋覗いてんだよ！！」

「ドアが少し開いてたんだから、仕方ないだろ。そこで俺、兄ちゃんがやってること、全部見ちゃったもんね」

形勢逆転。部屋を覗かれていたことに動揺する浩二を他所に、晶はさらに容赦なく秘密を暴露する。この辺り、悪ガキとしての才能は、兄よりも弟の方が上なのかもしれない。

「俺が部屋を覗いた時、兄ちゃん、詩織姉ちゃんとチューしてただろ！　それも、詩織姉ちゃんのおっぱいに手を回しながら！！」

「な、なんだってぇぇぇぇっ！！」

叫んだのは、照瑠や亜衣ではなく清だった。

「なあ、晶……。それ、本当に本当の話なのか……」

「嘘ついてどうすんだよ。チューしてる間、兄ちゃん、ずっと詩織姉ちゃんのおっぱい揉んでたんだぜ。なんか二人とも、目がすっげえエロかった」

「う、うらやましい……。俺もロリバアアの偽物の胸なんかじゃなくて、詩織姉ちゃんみたいな、立派なボインにタッチしてえ……」

周りの人間そっちのけで、とんでもない会話を続ける悪ガキ二人組。照瑠や亜衣を初め、その場にいる女子全員が、完全に硬直している。その隣では浩二が額に青筋を立てて晶と清をにらみつけ、紅だけが、一人呆れた顔で額に手をやっていた。

「おい、お前ら……。いくらなんでも、ちょっと調子に乗り過ぎってやつじゃねえか……？」

口元をヒクヒクと震わせながら、浩二が晶と清の頭をつかんだ。部活でバスケットボールをやっているだけあって、その握力は決して弱くない。悪ガキ二人の頭をボールに見立て、ぎりぎりと指を食い込ませてゆく。

「い、痛てて！　兄ちゃん、ギブ、ギブ！！」

「ぼ、暴力反対！　これは児童虐待だぁ！！」

「やかましい、この変態趣味のクソガキども……。お前ら、今からちょっと、便所につき合えや……」

頭をわしづかみにされたまま、二人の悪ガキが浩二に引きずられてゆく。照瑠も亜衣も、それを止めようとはしない。可哀想だが、あれは自業自得というものだ。それに、浩二も口ではああ言っているが、本当に怪我をするような暴力を振るうことはないだろう。

ふと、照瑠が横を見ると、詩織が唇を噛み締めて俯いているのが分かった。何やら気まずい雰囲気だったが放っておくわけにもいかず、照瑠は恐る恐る話しかけてみる。

「ねえ、詩織……。さっきの話だけど……まさか、あなた……」

「ご、ごめんね、九条さん。お願いだから、それ以上は聞かないで……」

詩織の顔が、一気に耳まで赤くなった。これがアニメならば、頭から湯気を出して卒倒しかねんばかりの勢いである。

両手を胸の前で合わせたまま、なにやら落ち着かない様子でその場を去る詩織。この反応からして、先ほどの晶の話は事実なのだろう。

「おお、熱い熱い。でも、らぶらぶなのもいいけど、ちゃんと避妊はするんだぞ～、お二人さ～ん」

去り行く詩織に手を振りながら、どさくさに紛れてとんでもないことを言う亜衣。そして、後に残されたのは、袋詰めにされた菓子の山。

単なるお菓子配りで終わるはずの手伝いが、結局は大騒動になってしまった。やはり、亜衣と関わる以上、こういう展開は最早お約束なのだろうか。

浩二と詩織の二人が消え、照瑠は仕事の負担が増えたことに思わず溜息をついた。仕方なく、側にいた紅に大袋の一つを強引に手渡す。紅が子供相手に愛想笑いできるとは思えないが、人出が足りない以上、贅沢は言っていられない。

「それじゃあ、悪いけど配るの手伝って。お菓子をもらいに来た子に、順番に配るだけだから」

「配るだけでいいなら構わない。だが、ガキのご機嫌とりなんぞ、俺にはできないからな」

「頼むから、睨みつけて泣かせたりしないでね……。とにかく、無事にお菓子が配り終われば、それでいいから……」

「了解した。まあ、その程度なら任せておけ」

口では簡単に言っている紅だったが、照瑠はその言葉を聞いても不安だった。

都市伝説オタクの亜衣。犬神使いの紅。そして、エロガキの弟を持つ浩二。どうして自分の周りには、こうも妙な人間ばかり集まるのだろうか。

唯一まともなのは詩織だが、彼女は既にこの場にいない。顔を赤くして去って行った詩織のことが、もう懐かしく思えてくる。

気がつくと、目の前では青年ボランティアの会員達が、仮装した子供たちを辺りに集めていた。袋詰めにされた菓子の入った大袋を抱え、照瑠も列の先頭に立つ。

たかが十数分の間に起きたことだというのに、なんだか物凄く体力を消耗したような気がした。亜衣を筆頭に、妙な人間が自分の周りにいる限り、騒動からは逃げられないということか。

何も知らない子供たちに菓子を配りながら、照瑠はぼんやりと、そんなことを考えていた。

※　※　※　※　※　※　※　※

休日といえど、事件があれば出勤する。それは警察という職業に就いた者の宿命とでも言うべきだろう。

その日は日曜日であるにも関わらず、工藤健吾（くどうけんご）は先輩の岡田肇（おかだはじめ）か

ら呼び出しをくらった。理由は簡単。休日であることなど関係なしに、緊急出動を要する事件が起きたということだろう。

刑事という仕事に就いている以上、急な呼び出しや休日返上もやむを得ない。そう、頭では理解していても、やはり休みを潰されたという不満はどこかに残る。

公務員は、土日祝日が必ず休みの九時五時勤務。そんな神話は、警察官には通用しない。工藤は署内では比較的階級の高い刑事だったが、だからと言って自由に休みが貰えるわけでもない。

工藤を乗せたパトカーが、現場である山の中へと到着した。県道の脇には黄色いテープが張られ、関係者以外の立ち入りを拒んでいるのが車内からも分かる。

車を降りると、そこには既に岡田の姿があった。警部の階級にありながら、デスクワークよりも現場に足を運ぶことを基本とする。そんな岡田は、正に捜査のベテランを絵に描いたような刑事である。

「すいません、岡田さん。遅れました！！」

パトカーの助手席から飛び降りるようにして、工藤は岡田のところに駆け込んだ。その途中、自分で自分の足を踏んで、思わず転びそうになる。こういった辺り、自分はまだまだ小説に出て来るハードボイルドな刑事には程遠いと思ってしまう。

「おう、工藤か。すまなかったな、休みを返上させちまって」

「それは仕方ないですけど……いったい、何が起きたんですか？」

「この前の木曜に続いて、また女の子のホトケさんが見つかったんだよ。もっとも、今度はもう少し古いやつだがな」

岡田の顔が、苦々しい表情に変わる。

先日の木曜日、山中で発見された女子高生の変死体。顔の皮を剥がされた上で遺棄されたと思しきことから、火乃澤署の捜査本部では、猟奇殺人事件の線も疑っていた。

そして、遺体発見から三日後の今日、再び新たな遺体が山中から発見された。遺体は今度も女性のもので、殺されてから随分と日が経っているようだった。少なくとも、死後二カ月は軽く経過していると思われる。

黄色いテープをくぐり、岡田は工藤を遺体の発見現場に案内した。そこは県道から少し外れた林の中で、辺りを熊笹が隙間なく覆っている。こんな場所に遺棄されれば、今まで見つからなかったのも当然だ。

「ここが、ホトケさんが見つかった場所だ。この前の事件のことで、うちの署の連中がこの辺の山を捜査していたからな。その途中で見つけたんだ」

「なるほど。それじゃあ、遺体が見つかったのは、偶然なんですね？」

「ああ。この間の女子高生……名前は、佐藤美奈子とか言ったか？そいつを殺した凶器なんかが捨てられているんじゃないかってことで、山ん中を探していたら見つけたんだとよ」

殺人事件の凶器を探す過程で、別の変死体を見つけてしまう。まったくもって、奇妙な話である。しかも、死んでいたのは以前に発見されたものと同じ、女性の遺体。それも、同じ山で発見されたとなれば、二つの事件の関連性を疑わないのは嘘になる。

「ところで、岡田さん。そのホトケさん、前の事件と何か関係があるんですかね？」

「いや、まだ分からんが……まあ、そう考えるのが妥当だろうな。遺体にも、明らかに不自然な損傷があったしな」

「不自然って……例えば、どんな様子だったんですか？」

「そうだな……。とりあえず、目ん玉が無くて、腹の中身も丸出しだった。この前のホトケさんと同じように、身体の皮もなくなってる部分があったぜ。まあ、お前も自分の目で見りゃ分かるだろ」

「い、いや……。僕は遠慮させていただきます……」

岡田の話にあった死体の姿を思い浮かべ、工藤は思わずハンカチで口元を覆った。昼食に食べた、駅前の定食屋のカツカレーを早くも吐き戻しそうだ。

必要以上に死体に乱暴を働き、その姿を見るも無残なものに変えてしまう異常な殺人事件。猟奇殺人というと、工藤はどうしても、今年の六月にあった事件を思い出さずにはいられない。

あの日、犬崎紅に出会うまで、自分は神だの霊だのといった存在を信じてはいなかった。いや、正しくは、信じないようにしていたと言った方がよい。

刑事という仕事に就いているものの、工藤は妖怪や幽霊といった向こう側の世界の存在に免疫がなかった。変死体など未だに見慣れるものではないし、一人でホラー映画を見るのも気が引ける。凶悪犯相手であればいくらでも銃を構えて立ち向かってゆけるのに、これがお化けの類となると、てんで頼りなくなってしまう。

刑事であるのに幽霊が怖い。知らない者が聞いたならば、なんと情けない男かと思われるかもしれない。が、霊的な存在が引き起こした事件に関わった工藤からすれば、向こう側の世界の住人達など、できるだけ相手にしたくないというのが本音だった。

犬崎紅が、この火乃澤町に来るきっかけともなった『八ツ頭事件』。降霊術の才能を持った女子高生が、その力に溺れて恐るべき悪霊を呼び出してしまった『ジョーカー様事件』。そして、因習に囚われた骨肉の争いが恐るべき鬼を現代に蘇らせた、『君島邸事件』。どれも、事件の裏には思い出すのも恐ろしい、人ならざる者の存在があったのは記憶に新しい。

この数カ月の間に、既に三件もの奇妙な事件が火乃澤町で起きている。こうも奇妙な偶然が続くと、さすがに工藤も向こう側の世界の存在を信じざるを得ない。

今回の殺人事件に、霊的な存在が関わっているのか否か。それは、今の工藤には分からない。ましてや、今日になって見つかった遺体と先日の遺体の関連性でさえ、現時点では不明のままだ。

「岡田さん……。今回の事件も、やっぱり妙な連中が関わっているんですかね……」

「妙な連中だと？　どういう意味だ、工藤」

工藤の言葉に、岡田が訝しげな表情になって言った。

「いや、ですから……。今回も、幽霊とか鬼みたいな、妖怪の類が関係しているのかって思いまして……」

「幽霊ねぇ……。そんなもん、今の時点で気にしても仕方ないだろうが。捜査に思い込みは禁物だってのを、いったい何時になったら覚えるんだ、お前は」

工藤の言いたいことは、岡田にも分かる。だが、ここは敢えて心を鬼にし、岡田は工藤の意見を突っぱねた。

工藤と共に事件に関わって来た岡田も、向こう側の世界の存在に対して否定的なわけではない。実際に目の前で怪物が暴れる様を見せつけられれば、信じない方が嘘になる。

しかし、だからと言って、全てを幽霊や妖怪の仕業にしてしまうほど、岡田は短絡的な男ではなかった。

捜査に思い込みは禁物である。かつて、自分の上司から言われ続けてきた言葉だ。今回の事件が人間によるものなのか、それとも怪物よるものなのか。それは、これから自分の足で調べて考えることだ。ここで余計な想像を膨らませたところで、捜査にはこれっぽっちの役にも立たない。

もっとも、岡田も願わくば、今回の事件が人によるものであって欲しいと思っていた。ハロウィンの日に発見された遺体が、狼男や吸血鬼の類に殺害されたものであっては洒落にならない。それこそ、

B級ホラー映画の世界でしか通用しない、悪い冗談だ。

とにかく、今はあまりにも情報が少なすぎる。遺体の検案は他の人間に任せるとして、一通りの捜査が終わったら、一度署に戻った方がいいだろう。

そう、岡田と工藤が思った矢先、何やら県道の方で大きな声がした。辺りを封鎖している、鑑識課の人間の声だ。どうやら、現場で何か騒ぎがあったらしい。

今しがた歩いてきた道を引き返し、岡田と工藤は黄色いテープをくぐって県道に戻った。見ると、そこでは鑑識の男の一人が、私服姿の男ともめていた。

「だから、困りますよ。これ以上は、一般の方の立ち入りは禁止です」

「いやあ、そこをなんとかならんもんですかね。現場を見られないって言うんなら、せめて死体だけでも……」

「だから、駄目だと言っているじゃないですか！　これ以上しつこいようですと、公務執行妨害で逮捕しますよ！！」

鑑識の男は強い口調で言っていたが、もう一人の男はまるで気にしていないようだった。できるものならやってみろ。そう言わんばかりの、不敵な態度を続けている。

「おい、どうした」

見るに見かねて、岡田が間に割って入った。

鑑識の男とは違い、岡田は前科何犯もある凶悪犯を相手にした経験を持つ男だ。知らない者が見たら、どちらが犯罪者か分からないような強面である。今まで鑑識の言葉を飄々とした態度で流していた男も、さすがにこれは一歩引いた。

「なんだ、お前は。ここは、一般人の立ち入りは禁止しているはずだぞ」

岡田が男を睨みつける。首から大きなカメラを提げているところを見ると、相手は報道関係者か。

「いや、これはすいませんでした。ですが、こいつも生業なんでねえ。私としても、特ダネが目の前に転がっているのに、そう易々と引き下がるわけにはいかないんですわ」

男が頭をかきながら、口だけの謝罪を述べる。なるべく岡田を刺激せず、隙あれば取材の許可を貰おうと考えているのが見え見えだった。

「お前、報道関係者か。テレビだか週刊誌だか知らんが……今は、まだマスコミに発表する段階じゃない」

「おや、そうですか。だったら、なおのこと好都合ですね。今、この現場には、私の他に同業者がいないってことですから」

そう言って、男は胸元から一枚の名刺を取り出し、岡田に手渡す。岡田は乱暴にそれを受け取ると、眉間に皺を寄らせながら目を通した。

「榛原直人(はいばらなおと)……。仕事は、フリーのカメラマンか。すると、どこぞの出版社に所属しているわけじゃあないんだな？」

「いや、お恥ずかしい。まったくもって、その通りなんですよ。まあ、その分、特ダネを独り占めできるっていう利点もありますがね」

「なにが特ダネを独り占めだ。そもそも、今日の事件は、まだマスコミの連中に発表していないんだぞ。いったい、どこから嗅ぎつけてきやがった」

「残念ですが、そいつは企業秘密ってやつです。まあ、蛇の道は蛇って言いますからね。事件を追っかけるための鼻は、刑事さん達と比べても遜色ないってことですよ」

凄む岡田を前に、一定の距離を保ちつつも、決して隙を見せない榛原。一瞬、チンピラ紛いのパパラッチかと思ってしまったが、かなりのやり手である。少なくとも、三流芸人のスクープ写真や裸のお姉ちゃんを撮影して、小遣いを稼いでいるような人種ではない。

「とにかく……今は、まだ捜査の最中だ。これ以上、余計なことを嗅ぎ回ると、本当に公務執行妨害でブタ箱に放り込むぞ」

「おお、怖い怖い。まあ、今日のところは、私もこの辺で退散することにしますよ。ベテラン刑事さんの顔を立てるってことでね」

わざとらしく肩をすくめ、榛原は岡田の前から去って行った。最後の最後まで、その言葉の一つ一つがいちいち鼻につく。

自分の利益のためであれば、社会道徳も倫理も関係ない。岡田は榛原から、そんな考えを持った人種と同じ匂いを感じていた。実際

に目の前で何かをしでかしたわけではないが、榛原の思考は犯罪者のそれと紙一重である。

「やれやれ……。ようやく行ってくれましたか……」

鑑識の男が、うんざりした様子で帽子のつばをつまみ、それを被り直した。

事件はまだ、死体を見つけたばかりの段階だ。これから先、他にも重要な証拠が見つかるかもしれない現場を、どこの馬の骨とも分からない男に荒らされてはたまらない。

「ったく……。これだから、報道関係者ってやつは好きになれねえ。こっちがネタをバラす前から、事件の匂いを嗅ぎつけて集まって来やがるんだからな。あいつら、前世はハゲタカか何かじゃねえのか？」

「いや……。でも、その表現は、ある意味で正解ですよ、岡田さん……」

先ほどの鑑識の男が岡田に向かって言った。単なる皮肉のつもりだったが、男には、何やら思い当たる節があるようだった。

「あの、榛原ってカメラマンですけどね。俺達の間では、ちょっとばかり有名人なんですよ」

「有名人？　どうせ、悪い方の噂で有名なんだろうが」

「ええ、まあ、そうですね……。あの人、事故とか殺人事件が起きると、どこからともなく現れるんです。それこそ、死体の匂いを嗅

ぎつけて集まる獣みたいに……」

「へっ、本当のハゲタカってわけか」

「いや、ハゲタカというよりは、ハイエナですね。業界でも、榛原直人じゃなくて、ハイエナオトって呼ばれているみたいですから」

「ハイエナねぇ……。そう言われてみりゃあ、確かにそんな顔してやがったなぁ……」

ひょろりと高いだけの背丈に、狐のような細面。直毛であるにも関わらず不揃いなまま放置された髪に、メガネの奥でずる賢そうに光る瞳。榛原がハイエナのような顔をしているというのも、あながち間違いではない。

「でも、いったい奴は、どこから事件のことを嗅ぎつけて来るんでしょうかね？　僕だって、今日の昼に岡田さんから連絡受けて、初めて事件が起きたのを知ったってのに……」

先ほどから二人の話を聞いていた工藤が、不思議そうな顔をして言った。それには岡田も答えあぐねていたが、鑑識の男が代わりに答えた。

「それがですね……。あいつの鼻は、本当に死体の匂いを嗅ぎわけることができるって噂なんですよ、工藤さん」

「死体の匂い？　そんなもの、どうやって嗅ぎ分けるんだ？」

「さあ、それは私にも分かりません。ただ、奴が事故や殺人の現場に現れるのは、単に特ダネ写真を撮るためだけじゃないみたいです

よ。どうも、本人の趣味が強く影響しているらしくて……」

「趣味だって？　あいつ、単なるカメラマンじゃないのか？」

「ええ。噂によると……彼は、自他共に認める重度の死体愛好家（ネクロフィリア）みたいなんですよ。仕事で使う写真とは別に、自宅には今まで撮った死体の写真が大量にアルバムに収められているって話です」

露骨に嫌悪感を露わにした表情で、鑑識の男が吐き捨てるように言った。

死体愛好家のカメラマン。それ故に、事故や殺人の現場に必ず現れる。お世辞にも、良い趣味をしているとは言えない部類の人間だ。変死体の写真を集めるなど、ほとんどサイコ紛いの異常犯罪者と同義ではないか。

「なるほど。人を食った野郎だとは思っていたが……もしかすると、別の意味で、本当に人を食っていやがるかもしれんな」

「や、やめて下さいよ、岡田さん。それこそ、本当にホラー映画の世界じゃないですか！！」

「冗談だ、工藤。だが、単なる変態にしちゃあ、何かと動きがいい。この現場をどうやって嗅ぎつけやがったのか……その辺含め、奴の身辺も調査した方がよさそうだな」

鑑識の男の話など、単なる噂話に過ぎない。しかし、こうも都合よく現場に姿を見せたことを考えると、榛原の存在を全く無視してしまうわけにもいかない。

捜査に思い込みは禁物である。それは、思い込みで犯人を決めてはいけないということと同時に、怪しい者は全て疑えということでもある。

刑事として、勘だけに頼った捜査はしたくない。そんな方法で犯人を捕えられるなど、テレビドラマの中の話でしかない。

山中で相次いで発見された変死体。そして、まるで死体が見つかることを予見していたかのようにして現れたカメラマン。いかにも怪しい組み合わせではあるが、岡田はあくまで現実的に、今回の事件の捜査に当たることを心得ていた。

※　※　※　※　※　※　※

入相の鐘が鳴り、夕刻の空が朱に染まる。

夕暮れ時の公民館では、青年ボランティア達によるパーティーの後片付けが進められていた。参加していた小学生たちは既に帰宅し、今は会場に残された飾り付けを外したり、椅子やテーブルを仕舞ったりする作業が残るばかりだ。

会場に置かれたパイプ椅子を折り畳みながら、照瑠はふと、今日の出来事を振り返った。

あの騒ぎの後、詩織と浩二が戻って来たのは、子ども達に菓子を配り終えた後だった。さすがに片付けは手伝ってくれているが、はっきり言って、肝心な時に役に立ってくれなかった。

亜衣も残って片付けを手伝っているが、その低い身長が災いし、高い場所に取り付けられた装飾を外すような仕事はまったく出来ない。仕方なく、照瑠と同様に椅子を運んだり、その辺に落ちているゴミを拾ったりしているのが精一杯である。

紅に関しては言わずもがな。菓子を配り終えたが最後、さっさと先に帰ってしまった。もとから期待などしていなかったが、こうも愛想なく帰られたのでは、やはりどこか納得のいかないものがある。

なんだかんだで、結局は自分が一番働いている気がするのは気のせいか。畳んだパイプ椅子を専用の台車に乗せ、それを倉庫に向かって押して行く。

「うっ……。見た目より、結構重たいわね、これ……」

台車の上に乗せられた椅子は、優に十五は超えている。抱えて運ぶよりは楽なのだが、それでも力を入れなければ、思うように動いてくれない。

せめて、後一人くらいは手伝ってくれる人間がいないものか。照瑠がそんなことを考えた時、ふっと台車が軽くなった。

不思議に思って前を見ると、そこには先ほど照瑠たちと一緒に菓子を配っていた少女が立っていた。晶と清の引き起こした騒動を静め、悪ガキ二人を照瑠達の前に引っ張り出していたのも彼女だ。

「ねえ、大丈夫？　これ、一人で運ぶのは、ちょっと大変だよ」

「そうね。できれば、前の方を持っていてくれると助かるんだけど……」

「こっちは、もとからそのつもり。無理して怪我するのも馬鹿らしいし、一緒に運ぼうよ」

少女が照瑠に笑いながら言う。照瑠にとっては、まさに渡りに船だ。

一人ではバランスを取ることさえ難しかった台車も、二人で運べば苦労はしない。思わぬ協力者の登場で、後片付けは比較的早く終えることができた。ゴミ拾い以外で亜衣があまり役に立っていなかったような気がするが、きっと気のせいだ。

程なくして片付けが終わり、公民館は再び元の静けさを取り戻した。つい先ほどまでは子ども達の熱気で賑わっていたが、今はその名残さえ感じられない。

青年ボランティアの人から渡された差し入れのジュースを口にしながら、照瑠は備え付けのソファーに腰を下ろした。仕事をした後だからなのか、いつもは飲まないような缶ジュースでも、妙に美味しく感じられる。

「ふう……。ようやく終わったかな……」

照瑠の隣では、台車を押すのを手伝ってくれた少女が、やはり缶ジュースを口にしながら呟いた。こうして見ると、本当にどこにでもいそうな、至って普通の女の子である。

青年ボランティアの会を手伝っているところを見ると、大学生なのだろうか。だが、それにしては、どこかまだ幼い部分も残っているような気がする。

色々と気になることはあったが、照瑠はとりあえず、隣に座っている少女に話しかけてみることにした。ここで会えたのも何かの縁。人と人との縁は大切にしろと、家でも父によく言われていた。

「あの……さっきは、ありがとう。台車運ぶの、手伝ってくれて」

「えっ……！？　ああ、あれね。あんなの、別に大したことじゃないわよ。お互いに協力した方が、仕事も早く終わるじゃない」

「まあね。それよりも……あなたも、ここの青年ボランティアの人なの？」

「ううん、違うよ。私はただ、見習いみたいな感じで手伝っているだけ。今日みたいなイベントの日に、裏方でちょっと仕事するだけよ」

「へえ……。亜衣みたいな物好きが言うと道楽に聞こえるけど、やっぱり、自分からボランティアに参加できる人、ちょっと尊敬するなぁ……」

今日の騒動のことを思い出しながら、照瑠は何気なく亜衣の名前を口にした。だが、単なる独り言のつもりだったそれを、目の前の少女は聞き逃さなかった。

「ねえ。亜衣って……もしかして、嶋本さんのこと？」

「えっ！？　あなた、亜衣のこと知ってるの？」

「学校が同じだから、当然知ってるわよ。クラスは違うけど、学年

も一緒だしね」

「それじゃあ、あなたも火乃澤高校の生徒なの？」

「そうよ。クラスはE組だけど……そういうあなたは？」

「私は、亜衣と同じC組よ。それにしても……あの子、やっぱり色んな場所で、色んな人に迷惑かけてるのね……」

同じクラスの友人として、亜衣のことを考えると頭が痛かった。彼女の交友関係には目を見張るものがあるが、その代償として、他人を様々な騒動に巻き込むことも少なくない。

半ば強引に参加させられたパーティーの手伝いで、同じ学校の生徒に出会う。面白いこともあるものだと思ったが、亜衣が強引に頼み込んでパーティーに参加したことを考えると、素直に喜べない。

「ホント、亜衣が馬鹿なことばっかり言ってゴメンね。友達として、代わりに謝っておくわ……」

他人の主催したパーティーに無理やりに参加し、手伝いという名目の下、学校の友人まで巻き込んで大騒ぎを引き起こす亜衣。自分が謝るのも妙な感じがしたが、ここで謝っておかないのは、なんだか物凄く申し訳ない気がした。

「別に、そんなこと気にしてないから。それに、嶋本さんが皆を呼んでくれなかったら、今日のパーティーだってもっと大騒ぎになっていたと思うし……。その点、あの娘には感謝してるわよ」

「そっか……。でも、あんまり煽てない方が、調子に乗らせなくて

いいと思うけど……」

「それ、言えてるわね。感謝してるのは事実だけど、私も気をつけよっと」

本人がその場にいないのをいいことに、互いに亜衣について思っていることを言い合った。気がつくと、二人して同時に笑っている。今日、出会ったばかりだというのに、どうにも気が合う部分があるようだ。

亜衣のことは、照瑠も決して嫌いなわけではない。だが、こういった会話のできる相手も、時には大切であると照瑠は思う。

「ふぅ……。それじゃあ、そろそろ帰ろっか。いつまでも話し込んでると、公民館が閉まる時間になっちゃうし」

「そうね。そう言えば、あなた名前は？」

「名前？　私、天倉癒月っていうの。そっちは？」

「九条照瑠よ。よろしくね、天倉さん」

「別に、名前で呼んでくれても構わないわよ。亜衣とも名前で呼び合ってるし、あまり他人行儀なの、私は好きじゃないから」

「だったら、私のことも照瑠でいいわよ。詩織とかは名字で呼ぶけど、あの娘はもともと、変に真面目なところがあるし……」

そう、照瑠が言った時、公民館の中に何やら哀愁の漂うメロディが流れ始めた。どうやら、今日はこの辺りでお開きにしないと、本

当に閉め出されてしまいかねない。

「やばっ！　そろそろ出ないと、係の人に怒られるかも……」

「仕方ないわね。それじゃあ、今日はこの辺で帰るとしますか」

「うん。照瑠も、また明日、学校でね」

互いに荷物をまとめ、いそいそとした様子で公民館を出る二人。扉を出たところで軽く手を振り、それぞれ反対の方向に去って行く。

亜衣の頼みで無理やりに参加させられたハロウィンパーティーだったが、終わってみれば、それなりに面白かったと思う。なによりも、自分と気の合いそうな友人ができたことは、照瑠にとって大きな収穫だった。

明日からは、またいつもの如く学校が始まる。翌日のことを考えると休日の夕方は憂鬱になりがちなものだが、今日の照瑠に限っては、その考えは当てはまらなかった。

～ 弐ノ刻　嗜好 ～

N大学付属病院。

その日、芹沢初美（せりざわはつみ）は珍しく疲れた顔をして実習部屋を後にした。無理もない。昨晩、ほぼ徹夜で遺体の検案書を作成したあげく、今日は午前中から研修医相手に実習だ。大学付属病院勤務の法医学者の仕事は、決して楽なものではない。

それにしても、昨日の遺体は本当に酷かった。死亡してから既に二カ月ほど経っているというのは間違いないが、その損傷具合が物凄い。腹を裂かれて内臓の一部が失われ、全身の皮膚もあちこち剥げていた。眼球は二つともなく、初めて見た時は野生動物に食われたのではないかと思ったほどだ。

「さて……。そろそろ、岡田さん達が来る頃ね。昨日の検案書、早く取りに行かないと……」

壁にかかっている時計を見て、もうそんな時間になったのかと思ってしまう。午前中を解剖実習で使ってしまったため、いつもよりも時間の経つのが早く感じられてならない。

自分の机が置かれた部屋に戻り、その中から昨晩に仕上げた検案書を引っ張り出す。再び部屋の外に出て病院の待合室まで行くと、そこには既に岡田と工藤の姿があった。

「よう、初美ちゃん。今日は、実習だったんだってな」

「ごめんなさい、岡田さん。待たせちゃったかしら」

「いや、俺も今しがた到着したばかりだ。それよりも、昨日頼んでおいた検案書、仕上がってるか？」

「問題ないわ。あちこち損傷してて、ちょっとまとめるのに手間取ったけど……」

そう言って、初美は自分の口に手をやりながら欠伸を飲み込んだ。いつもは凛々しく引き締まった顔が、この時だけは緩む。仕事のできる女が見せる一瞬の隙は、ともすればその女性に可愛らしい印象を与えるものだ。

「ところで……亡くなった女性、短大生だったのね」

こちらを見ている岡田と工藤の目が気になったのか、初美はすぐにいつもの顔に戻って話を続けた。後ろで工藤が何故か少しがっかりした表情を浮かべていたが、岡田は気にしない。

「ああ、そうだ。鑑識の連中が見つけた遺留品から身元が割れた。県内の短大に通っている短大生で、八月の半ば辺りから行方不明になってやがった」

「なるほど。それが変死体で見つかるなんて、穏やかじゃないわね」

「まあな。遺体の損傷が激しいんで、変態野郎による殺人の線でも捜査を進めているんだが……初美ちゃんは、どう思う？」

「そうね……。監察医の立場から言わせてもらうなら……これは、何らかのフェティシズムに囚われた人間の犯行である可能性が高いわね」

「フェティシズム？」

岡田と工藤が、互いに示し合わせたように顔を見合わせた。

二人とも、刑事としては決して無能な方ではないのだが、医学用語にはさっぱり弱い。こと精神医学における用語に至っては、殆ど知らないことの方が多い。アメリカのＦＢＩが使っているようなプロファイルなどは、仮に作ったところで、彼らの役には立たないことの方が多いかもしれない。

「二人とも、相変わらずね。もう少し、簡単に説明しようかしら？」

「ああ、すまんが頼む」

岡田が頭の後ろを書きながら言う。前科何犯もの凶悪犯を黙らせてきたベテラン刑事も、こうなっては肩なしだ。

「フェティシズムって言うのは、性的倒錯癖のことよ。人体の一部とか、服装とか、あとは匂いとか声とか……とにかく、そういった類の物に、異様な執着を示すことね。なんとかフェチ、なんて言うのは、あなた達も聞いたことぐらいあるんじゃない？」

「ああ、それなら僕にも分かりますよ。巨乳フェチとかメイドフェチとか、そういうやつですね」

咄嗟に思いついたような顔で、しかし得意気に工藤が言った。が、そんな工藤の頭を、岡田がすかさず警察手帳で叩く。

「痛っ！　ちょっと、何するんですか、岡田さん！？」

「馬鹿野郎！　初美ちゃんだって、立派な女なんだぞ！　いくら医者相手だからって、言うに事欠いて巨乳フェチとはなんだ！　セクハラで訴えられても、俺は知らんぞ！！」

「あ……」

岡田に突っ込まれ、初めて自分の失言に気づく工藤。口を手で押さえて何かを隠そうとするも、もう遅い。

自分の言った言葉を改めて思い出し、工藤は途端に恥ずかしさが込み上げて来るのを感じた。勢いに任せて言ってしまったが、初美に変な目で見られたりしていないだろうか。

「ありがとう、岡田さん。でも、別に気にしてないわよ。フェティシズムに関する誤った知識が氾濫していることは、私も十分に知っているから」

工藤の心配を他所に、あくまでさらりと流すような口調で初美は話す。さすがは百戦錬磨の監察医。日頃から、死体を相手に格闘しているだけはある。目の前で巨乳がどうのという話をされたくらいでは、まったく動じない。

「フェチって言うのはね、本来の精神医学用語としては、単に深いこだわりっていうだけの意味なのよ。でも、俗語のフェチが性的嗜好の意味で使われているから、フェチと言えば、性的なフェティシズムに限定されるみたいに思われているけどね」

「へえ、そうなんですか。それじゃあ、今回の事件の犯人は、必ずしも性犯罪者じゃないってことですか？」

「いいえ、その辺が難しいところなんだけど……。そもそも、犯罪に走るようなフェティシストは、その殆どが性的倒錯者である可能性が高いわ。それこそ、目的の物を手に入れるためなら、殺人も平然と行うような人間よ」

「要するに、ただの変態ってことですよね。でも、それだったら、下着泥棒なんかと変わりないんじゃ……」

「まあ、根本的には同じようなものね。ただ、その嗜好が人体のパーツや死体その物になると、話は変わってくるわよ。ちなみに、さっき工藤君が言っていた巨乳フェチだけど、女性の胸はもともと性欲の対象だから、厳密には巨乳好きな人の全員を巨乳フェチとは言わないわ。胸の大きい女性相手にしか性行為ができないとか、女性の胸だけを切り取って鑑賞したいって言うくらいなら、話は別だけどね」

「それじゃあ、さっきのメイドフェチってやつも、誤用ってことなんですか？」

「狭義の意味ではね。可愛い顔をした女の子がメイド服を着ることで、その子がより可愛く見えるっていうだけならば、それは単なるメイド好きよ。そういった人は、どんなにメイド好きでも、中身が自分の好みと反していれば何も感じないの。あくまで洋服の中身が好きなわけであって、対象の中心は衣服ではなく女性そのものよ」

「そんなもんっすかねぇ……。それでも僕には、理解できない世界ですけど……」

「だから、線引きが難しいって言ったでしょ。今の例と比べるよう

な形で説明するとしたら……使用済みのメイド服を自分で着て興奮したり、メイド服そのものに性的な魅力を感じてしまったりする人が、本物のフェティシストってことになるわね。これだったら、工藤君にも分かるかしら？」

「なるほど……。確かにそれなら、なんとなく分かったような気がします」

傍から聞いていたらとんでもない話をしているようだが、そこはさすがの初美である。性に関する話をしているのに、まったく厭らしさを感じさせない。淡々とした口調とさばさばした性格が、そう見せるのだろうか。

「なんか、小難しい話になってきたなぁ。それで、初美ちゃんは、どうして今回の事件が変態野郎による犯行だって思ったんだ？」

話が横道にそれていることを感じ、岡田が横やりを入れた。精神医学は専門外だったが、それでも医師の端くれとして、初美も少々知識をひけらかし過ぎたと反省する。

口元に拳を添えてわざとらしく咳払いをすると、初美は気を取り直して口を開いた。ここからが、監察医としての真骨頂。検案書を渡すだけでも良いのだが、岡田に尋ねられた質問に答えないというのも、なんだか責任を放棄しているような気がしてしまう。

「えっと……。それで、私が今回の犯人をフェティシストだと思った理由なんだけど……。それは、身体の失われていた部分の状態に、ちょっとした特徴があったからよ」

「特徴？　何か、変態の犯行って証拠でも残ってたのか？」

「そうね。ところで岡田さん。あなた、解剖の経験はあるかしら？」

口元に悪戯っぽい笑みを浮かべながら、初美が岡田に向かって聞き返した。相手の真意が分からず、岡田も訝しげな顔をしながら答える他にない。

「解剖ねぇ……。まあ、小学生の時にフナの腹を開けたくらいだが……」

「高校の時はどう？　豚か牛の目玉を解剖したりしなかった？」

「そういやあ、そんな実験をしたこともあったな。だが、それと今回の事件と、何か関係があんのか？」

「まあ、ちょっとね。岡田さん、解剖をした時のこと、詳しく覚えているかしら。特に、目玉を切る前にやらなくちゃいけないことなんだけど……」

初美が相変わらず思わせぶりな口調で尋ねて来る。岡田も記憶を総動員して思い出そうとするが、なにしろ、三十年以上前の話だ。そう簡単に聞かれても、すぐには思い出せそうにない。

「そう言えば、目玉の周りの肉を先に取り除かなきゃいけないんじゃないっすか？　僕も、高校の授業でやったのを思い出しました」

岡田に代わり、今度は工藤が答えた。そう言われると、今まで靄のかかっていたような記憶が急に鮮明になってくる。

目玉の解剖をする前に行うこと。それは、眼球の周りについてい

る筋肉を取り除くことだ。筋張っていて切り取り難いのだが、これを取り除かないと、上手く目玉にメスを入れられないと注意を受けた記憶がある。

「なんだ、二人とも習ってるんじゃない。それなら、話は早いわね」

「そうは言われてもなぁ……。俺には、話の方向がさっぱり見えねえぜ」

「今度は横道にそれてないから大丈夫よ。それで、目玉の話なんだけど……解剖の時に肉片がついた眼球を渡されたことから分かると思うけど、あれって、そう簡単に外れるようなものじゃないのよね」

「そりゃ、そうだろう。義眼じゃあるまいし、後ろから頭を叩かれたくらいですっぽ抜けちまったら困るってもんだ」

「まるで漫画みたいな例えね。でも、確かに岡田さんの言う通りよ。私達に限らず、生物の目玉は、見た目よりもしっかりと身体にくっついているの。表からじゃ見えないけど、裏では視神経や目の周りの筋肉がしっかりと押さえつけていて、よほど強い衝撃が加わらない限りは眼球が飛び出すようなことはないわ」

「だったら、昨日の死体はどうだったんだ。まさか、綺麗にすっぽりと抜けちまってたって言うんじゃ……」

「ご名答。さすがは岡田さんね」

適当に答えたつもりだったが、岡田の答えは奇しくも初美の言いたいことを先に当てていた。これには、言った本人もびっくりである。

「昨日の遺体の短大生だけど……目玉が綺麗に無くなってたのよね。獣につつかれたわけでもないし、それこそ、最初から抉り取られたみたいにね」

「なら、その目ん玉を抉り取ったのが、今回の犯人か？」

「その可能性は高いわ。だから、私は犯人が、一種のフェティシズムの持ち主じゃないかって言ったのよ。人体のパーツに異常な執着を持つ人間なら、殺害した相手の一部を持ち去ったとしても不思議じゃないもの」

「なるほど、そういうことか。ようやく俺にも、話が見えて来たぜ」

点と点が、線ではっきりと繋がった気がした。初美の言いたいことが分かり、今度は岡田も納得した様子で頷く。

女性を殺害し、その目玉だけを取り除くという異常な殺害方法。他にも皮膚や内臓が荒らされていたことが気になったが、それが人の手によるものなのかどうかは、さすがの初美にも分からなかったのだろう。

とにかく、後はもらった検案書に目を通せば話は早いはずだ。捜査本部では対人関係のトラブルという方向からも捜査を続けているが、初美の意見を考慮した場合、異常者による犯行という線も考えられる。

「それじゃあ、とりあえず、この検案書は頂いていくぜ。初美ちゃんの言ってたことも、捜査の参考にはさせてもらうよ」

「ありがとう。でも、私だって、まだ確信に至っているわけじゃないわ。それを調べるのが、岡田さんと工藤君の仕事でしょ？」

「そいつは、こっちだって百も承知だ。まあ、また何かあったら連絡するぜ」

「願わくば、検死解剖の仕事以外の話でお願いしたいわね。今の仕事が解決したら、久しぶりに一杯やりましょうか」

「そいつはいい。場所は、また例の焼き肉屋でいいか？」

「ええ、もちろん。私はいつだって、準備ＯＫよ」

先ほどまで、性的倒錯者や死体について話をしていたとは思えない発言である。法医学者という仕事に就いているとはいえ、やはり初美は精神的にタフだ。

受け取った検案書を片手に、岡田はそんなことを考えながら病院を後にした。工藤もそれに続く。

（しっかしなぁ……。これが変態の仕業となると、犯人を見つけるのがますます難しくなるな……）

初美の話を思い出しながら、岡田は難しい顔をして考え込んだ。

性的な嗜好など、人の表の顔からは一見して分からないものである。見た目は品行方正な好青年に見えても、裏では変態的な性欲を持て余している者がいるかもしれない。それだけに、初美の推理が正しければ、犯人の特定がますます困難になる。

（まあ、悩んでいても仕方ねえか。俺自身が、妙な思い込みを持って捜査をするわけにもいかねえからな）

かつて、若い頃に世話になった上司の言葉を思い出し、岡田は迷いを振り切るようにしてパトカーに乗った。どちらにせよ、今は情報が少なすぎる。犯人の目星をつけるにしても、まずは自分の足で証拠を集め、そこから推理を組み立てて行く他にない。

回転灯を光らせながら、サイレンを鳴らしてパトカーが走り出す。もうじき午後になろうとしていたが、その日は妙に空が曇っており、車の中にいるにも関わらず肌寒く感じた。

※　※　※　※　※　※　※

図書室というところは、昼間の学校の中でも比較的静かな場所である。試験前にでもなれば話は変わるが、それ以外の日は比較的閑散としている。

入口前のカウンターで、九条照瑠はお気に入りの本のページをめくりながら暇を持て余していた。彼女の仕事は図書委員。故に、本の貸し借りに関する手続きを任されているのだが、こうも人がいないと退屈の極みである。

文化祭は、つい先日に終わってしまったばかり。定期試験までは、もう少し日がある。どうにも中途半端な時期ということも相俟って、妙な眠気が照瑠を襲う。

「ふぅ……。今日は、なんだか集中できないなぁ……」

本のページを意味もなくめくって弄びながら、照瑠はぼんやりと呟いた。文芸部に所属している彼女ではあるが、それでも集中力が続かない時もある。いくら好きな本とはいえ、気乗りしないまま読んでも面白くない。

昼休みは、後どれくらい残っているのだろう。ふと、そんなことを考えて、照瑠が壁にかかった時計に目をやった時だった。

「あっ、照瑠じゃない」

突然名前を呼ばれ、照瑠はハッとした顔をして声のする方を向いた。見ると、そこには昨日のパーティーで出会った少女、天倉癒月が立っている。その手に数冊の本を抱えているところからして、貸出の希望だろうか。

「癒月？　こんなところで会うなんて、奇遇ね」

「そういう照瑠こそ、図書委員だったなんて初耳よ。この学校、広いようで意外と狭いのかもね」

「それ、言えてるかも……」

昨日に続き、こんなところでも意見が合う。癒月といると、妙な親近感が湧いてくる。こんな些細なことで楽しい気分になれるのだから、人間というのは不思議なものだ。

「ところで照瑠。この本、ちょっと借りたいんだけど……手続きしてくれない？」

「いいわよ。それじゃあ、ここのカードに日付と名前を書いて、そこの箱に入れておいて」

本の裏表紙に備え付けられた貸出カードを抜き出して、照瑠はボールペンと一緒に癒月に渡した。どんな本を読んでいるのか気になり、そのタイトルに少しだけ目を通してみる。

癒月の借りようとしている本は、照瑠の読んでいるような文学作品ではなかった。かといって、勉強に使うような参考書でもない。

「へえ……。『夢見る頭脳』、『リラックスの勧め』、それに『楽しい夢を見る方法』かぁ……。癒月、こんな本に興味があったの？」

「ちょっとね。最近、変な夢を見るようになって、あんまり良く眠れていないから……」

「そうなんだ。それじゃあ、ストレスも溜まるわよね」

「まあね。実は、今日も四限の英語、ちょっと寝ちゃったんだ。授業中に寝るのはよくないって、頭では分かってるつもりなんだけどね」

「それなら大丈夫よ。私の知り合いで、朝から昼までずーっと爆睡してるようなのもいるくらいだから。四限でちょっと寝過ごしたくらい、かわいいものよ」

授業中に寝過ごすという話を聞いて、照瑠は紅のことを思い出しながら答えた。

そういえば、今日も紅は朝から机に突っ伏して爆睡していたよう

な気がする。それでいて、試験では決して赤点を取らないのだから不思議なものだ。いったい紅は、どうやって勉強をこなしているのだろうか。

だが、それ以上に照瑠が気になったのが、癒月の借りようとしている本の内容だった。

癒月の話では、彼女は最近悪夢に苦しめられているという。それがどんなものかは知らないが、眠るべき時に眠れないというのは、やはり辛いことだろう。

照瑠とて、安眠を妨害されればストレスは溜まる。連日、悪夢にうなされるようでは、気分も萎える。

「ねえ、癒月。あなた、今日は学校が終わったら、ちょっと時間ある？」

「えっ！？　別に、特に用事はないけど……。なんで？」

「癒月がよかったらでいいんだけど、今日、一緒に帰らない？　睡眠不足でストレス溜まってるみたいだし、たまには女の子だけで、羽目を外してみるのもいいかなって」

「羽目を外すかぁ……。まあ、照瑠のことだから、変な間違いはないよね。いいよ。授業が終わったら、一緒に帰ろう」

「ええ。それじゃあ、六限が終わったら、私がE組の教室に行くわ」

「うん、よろしく！！」

三冊の本を借り受けて、癒月は照瑠に告げながら図書室を去った。何気ない日常の光景ではあったが、照瑠は新しく知り合った友人と一緒に遊びに行けることが、純粋に楽しみだった。

※　※　※　※　※　※　※

五限と六限の授業が終わるまでは、思ったよりも短く感じた。いつもは終了時間を気にしながら時計とにらめっこをしているが、予定があれば話は別だ。先々のことを考えて時を過ごしていると、それだけで時間の流れが速く感じる時もあるから不思議である。

ホームルームを終えた照瑠は、約束通り、E組の教室に急ぐことにした。今日は部活もないので、詩織にも一緒につき合うことにしてもらう。亜衣は面倒事を引き起こしそうなので、今日は黙って置いてきた。まあ、いつも騒がしい亜衣がいないというのも、たまには静かでいいかもしれない。

教室の中に入ると、癒月の姿はすぐに見つけることができた。向こうもこちらに気づいたのか、鞄に荷物をまとめて駆け寄って来る。

「ごめん、照瑠。もしかして、待たせた？」

「大丈夫よ。私も、さっきホームルームが終わったばかりだから」

「そっか。ところで……今日、帰りにどこか寄ったりするの？」

「うん。詩織も一緒に三人で、私の行きつけのお店に行こうかなって思って」

照瑠の行きつけの店と言えば、駅前の甘味屋である。女子高生が集まる場所としては、いささか古臭い印象を受ける店であるが、その辺のファミレスやファーストフード店などよりも、格別に美味しい物が揃っている。それも、どれもひじょうに良心的な価格で食べられるのだ。

疲れた時は、甘い物が一番。ストレス解消にも最適だし、何よりも甘い物を食べていると、それだけで幸せな気分になれる。女の子にしか分からない、一種の特権のようなものである。

癒月が夜も眠れずにストレスを溜めているのは、今日の昼休みにも聞いた。ならば、これで少しでも元気が出てくれればいい。そう考えてのことだ。

「それじゃあ、早く行こう。私の家、お店とは反対方向だから、あまり遅くなるとお父さんに怒られちゃうし」

善は急げ。この場合、正しい使い方なのかは分からないが、とりあえずそんな言葉を思い出しながら、照瑠はE組の教室を出ようとする。

だが、彼女が教室を出ようと振り向こうとした矢先、その腰回りに突然何かが絡みついてきた。思わず下に目をやると、そこには見覚えのある小さな手が見える。

「あ〜き〜る〜……。ず〜る〜い〜ぞ〜」

未だ声変わりしていないのではないかと思われるハスキーボイスを、強引に低音にしたような気持ちの悪い声。そして、こちらの腰

をがっちりと捕まえ、腹を撫でまわす二つの手。

間違いない。自分にこんなことをするのは、火乃澤高校広しと言えど一人しか思い浮かばない。

「亜衣……。これ、いったい何のつもり……？」

「あ～ま～い～も～の～……。わ～た～し～も～た～べ～た～い～……」

「ちょっ……気持ち悪いわね！　どさくさに紛れて、変なとこ触らないでよ！！」

「つ～れ～て～け～……。わ～た～し～も～つ～れ～て～け～……」

「わかった、わかったから！　お願いだから、これ以上身体を撫で回さないで！！」

後ろから腰に張り付いて離れない亜衣を、照瑠は強引に引き剥がす。今日はあえて亜衣に告げずに教室を出たというのに、なんという勘の良さだろう。

セクハラ紛いの行為を続ける亜衣からなんとか逃れ、照瑠はやれやれと言った表情で溜息をついた。

先日、ハロウィンパーティーの会場でスカートを捲られた際には激昂していたのに、他人に対して亜衣は容赦がない。もしかすると、あの日の騒動も、実はそれなりに楽しんでいたのではないかと勘ぐってしまう。

兎にも角にも、これで照瑠の目論みは崩れ、結局いつものメンバーで甘味屋へ行くことになってしまった。本当は詩織に癒月を紹介して一緒に話をしたかったのだが、こうなってはどうしようもない。

「仕方ないわね、亜衣。あなたも一緒に来て構わないけど、今日は下らない都市伝説の話は禁止だからね。それと、下品なネタもお断りよ」

「大丈夫、大丈夫。私だって、いつもそんな話ばっかりで盛り上がってるわけじゃないよ。たまには女同士、恋バナの一つでもしないとね。それこそ、加藤さんには個人的に尋ねたいことが色々と……」

亜衣の口が、にやりと意地悪そうな笑みの形に歪んだ。その意味に気づき、照瑠はすかさず亜衣の両頬をつまんで左右に引っ張った。

「い、いひゃいよ、あきる！　なにひゅるのさ！！」

「下ネタは禁止だって、さっき言ったばっかりでしょうが……。どうせ、詩織と長瀬君のことについて、際どい質問するつもりだったんでしょ……」

「うぅ……。な、なぜひょれをぉぉぉっ！！」

「あなたの考えくらい、こっちだってお見通しよ。伊達に友達やってるわけじゃないんだからね！！」

亜衣の頬を摘まんだまま、照瑠がその身体をずるずると引っ張って行く。その後ろから、詩織と癒月が笑いながら着いてくる。

新しく癒月を加えているものの、なんだかんだで、いつものメン

バーで過ごすいつもの風景だった。

※　※　※　※　※　※　※　※

照瑠達が駅前の甘味屋に着いた頃には、もう太陽は西の空に沈みかけていた。二月ほど前であれば、まだ十分に明るい時刻なのだろうが、冬の夕暮れ時はそうもいかない。

足早に店に入り、照瑠は一番奥にある席を確保する。奥まった一角にあるその場所は、他の客のことを殆ど気にせず話ができる、お気に入りの場所だった。

「それじゃあ、とりあえず何か頼もうか。皆は、いつものやつでいいよね」

「ちょっと、亜衣。なんで、あなたが仕切ってるの……？」

「まあまあ、細かいことは言いっこなし。天倉さんは初心者だし、私達と一緒の物でいいよね？」

甘味屋で何かを食べるのに、初心者も上級者もあるものか。思わず突っ込みたくなった照瑠だったが、癒月は亜衣の言葉に黙って頷いていた。

「ねえ、癒月。亜衣の言ってることなんて、半分はホラかハッタリなんだからね。自分が食べたい物が決まってるなら、それを頼んでもいいんだよ」

「ううん、いいの。私、こういうお店って、あんまり入ったことないから。だから、よく分からなくて……」

「そっか。まあ、女子高生が入り浸るには、確かにちょっと下町臭い場所かもしれないわね」

「そんなことないよ。私も甘い物は好きだしね。どっちかって言うと、洋菓子専門なんだけど」

「洋菓子ってことは、ケーキとかクッキーとか？　この辺に、そんなお洒落な店ってあったかしら？」

「実は、穴場を知ってるの。昔っからある、ちょっとダンディなマスターが経営している喫茶店なんだけど……」

話が止め処なく進んで行く。なんということのない話なのだが、それでもやはり楽しい。亜衣と一緒にいることが多いためか、いつも妙な話ばかり聞かされて、感覚が狂っていたのかもしれないが。

程なくして四人の前に店員が現れ、注文を聞いてきた。亜衣が四人分のクリーム餡蜜を頼み、再び話に花を咲かせる。

神社の巫女も文学少女も、そして都市伝説オタクも関係なしに、それぞれが一人の女の子として楽しめる時間。癒月の存在が一種の潤滑油となり、いつも以上に気分が乗っている自分がいる。

だが、そうやっていつまでも雑談をしているわけにもいかないということは、照瑠自身が何よりも知っていた。

今日、癒月をここに読んだ理由は他でもない。悪夢にうなされて

眠れないという、彼女の悩みを聞くためだ。四人で話したところでどうにかなる問題ではないのかもしれないが、何もしないよりはマシだろう。

「ねえ、癒月。ところで……今日、図書室で話してた、夢のことなんだけど……」

「夢？　ああ、あの悪夢の話ね」

「うん。癒月、眠れないって言ってたじゃない。どんな夢を見ていたのか、ちょっと気になっちゃって……」

「どんな夢、か……。あんまり、楽しい夢じゃないよ」

「それは、こっちだって分かってるわ。でも、少しでも力になれるかもしれないって思って……」

「ありがとう。それじゃあ、餡蜜が来る前に話すね。あんまり気持ちのいい夢じゃないから」

そう言って、癒月は照瑠達に最近になって見るようになった夢の話をし始めた。

暗闇の中、どことも知れぬ場所を歩いてゆく自分。やがて見知らぬ少女に出会うが、自分の意思に反して身体が動き、その少女を殺してしまう。そして、最後には少女の死体に乱暴をし、見るも無残な姿に変えてしまう。

できるだけ短く話したつもりだったが、目の前で話を聞いている照瑠達の目に、先ほどの楽しげ色はなかった。

「はぁ……。なんだか、聞いているだけで気が滅入りそうな夢ね」

夢の中で、猟奇的な方法で人を殺す。それも、自分の意思とは関係なしに、自分の身体が他人を殺すのである。

はっきり言って、これはかなり性質の悪い夢だと思った。もしも自分が癒月と同じ立場なら、やはり安眠できなくなるに違いない。

「でも、自分が人を殺す夢か……。そんな夢、私は見たことないけど……詩織はどう？」

「私だって、そんなのないわよ。ただ、昔読んだ夢占いの本に、人殺しの夢は希望の夢だって書いてあったと思う」

「人殺しが希望！？　それ、本当なの……？」

「うん。夢の中で殺している人は、自分自身の弱い心や変えたい部分を表しているんだって。だから、それを夢の中で殺すことは、自分自身が大きく変わろうとして、前向きになっている証拠だって書いてあったわ」

「前向きになっている証拠ねぇ……。そういう意味だったら、少しは救いがあるってことかしら？」

亜衣が話す都市伝説ならいざ知らず、夢占いとはいえ、詩織が過去に読んだ本の話であれば、少しは信憑性もある。気休めにしかならないかもしれないが、それでも癒月が元気になってくれればいい。

そう思って言ってみたものの、照瑠の言葉を聞いてもなお、癒月

はどこか沈んだ様子のままだった。

「あのね、照瑠。実は、私の夢の話……続きがあるの」

「続き？」

「この前の金曜日なんだけどね。テレビのニュースで、女子高生が殺されたって事件がやってたじゃない。あの、山の中で死体が見つかったっていう……」

「ああ、あれね。しかも、発見されたのが、この火乃澤町なんでしょ？　ホント、気持ち悪いわよね……」

「その、殺された女子高生なんだけど……。その人、私の夢の中に出て来たんだ……」

「えっ！？」

一瞬、癒月が何を言っているのか分からなかった。殺された女子高生が、夢の中に現れる。それはいったい、どういう意味の話なのだろうか。

「朝、テレビで見るまでは、そんなこと分からなかったの。でも、テレビで見て、はっきりと分かったのよ。自分が夢の中で殺したのは、この女の子だって」

「それって、もしかして正夢ってやつ！？」

話がだんだんオカルト染みたものになってきた。すかさず亜衣が身を乗り出して聞くが、調度その時、店員がクリーム餡蜜をテーブ

ルに運んできた。

「正夢か……。まあ、悩んでいたって仕方ないじゃない。とりあえず、今は甘い物でも食べて気分転換しよう。正夢であろうとなかろうと、癒月が本当にその子を殺したわけじゃないんだしさ」

「そうね。それじゃ、照瑠のお勧めのお店の味を、初体験ってことで……」

めいめいに、スプーンで餡蜜をすくって口に運ぶ。柔らかい、それでいてしつこくない甘さが口の中いっぱいに広がって行く。

生きててよかった。決して大げさなことではなく、本気でそう思う。案外、人間の生きている意味など、こうして平和な日々を過ごしながら美味しい物を食べることにあるのかもしれない。

束の間の幸せを満喫しつつも、照瑠はふと癒月の方を見た。こういった店に来ないために食べ慣れていないのか、少し食べただけで、癒月のスプーンを持つ手はじっと止まったままだ。

「どうしたの、癒月。もしかして、口に合わなかった?」

「ううん。別に、そんなことはないけど……。ただ、思ったより甘くなかったかなって」

「ええ、本当!?　もしかして、癒月って甘党?」

「うん。コーヒーも、砂糖とミルクをいっぱい入れないと飲めないし……」

そこまで言って、癒月は今朝のことを思い出した。

いつも、コーヒーにはミルクだけでなくスティックシュガーを三本は入れているが、それでも足りずに今日は五本入れた。いくら自分が甘党でも、これは少しおかしい。

やはり、今日は味覚が変になっているのだろう。そういえば、昼食もなんだか味のないパンを食べているようで美味しくなかった。

「ごめん、照瑠。やっぱり、今日は具合が悪いみたい。なんか、味感じないみたいで……」

「大丈夫？　もしかして、熱でもあるんじゃない？」

「たぶんね……。みんなに感染（うつ）すといけないし、今日はもう帰るわ」

頼んだ餡蜜を殆ど残し、癒月はそう言って席を立った。店のカウンターで自分の分の会計だけを済ませると、どこかおぼつかない足取りで外へと出て行く。

折角誘ったのに、結局あまり力になってやることはできなかった。最後の最後で、照瑠はなんだか肩すかしを食らったような気分になった。

「ねえ、九条さん。天倉さん、大丈夫かな……」

「さあ……。でも、季節の変わり目って風邪をひきやすいからね。あんまり酷くならないうちに、治るといいけど……」

連日の悪夢に加え、風邪の追い打ち。一人先に帰ってしまった癒

月が、随分と哀れに思われた。

（しまったなぁ……。癒月の家がどこにあるのか聞いておけば、明日、休んだりした時にお見舞いに行けたのに……）

自分の迂闊さが、今になって恨めしく思える。そう思った矢先、隣から伸びたスプーンが、照瑠の餡蜜をすくい取った。

「ちょっと、亜衣……。これ、私の餡蜜なんだけど……」

「いいじゃん、少しくらい。照瑠がくれないなら、私は癒月が残したのをもらうけど……いいよね？」

「はぁ……。あなたみたいな人は、悪夢も風邪も、一生無縁の世界で生きるんでしょうね、きっと……」

「まあね。無病息災、健康第一。これが私の生き様ですから！！」

ついでにそこに、馬鹿は風邪をひかないという言葉も付け加えたらどうか。そう思った照瑠だったが、あえて口に出すのは止めておいた。

癒月が残した餡蜜を、物凄い勢いで口に放り込んで行く亜衣。食べ過ぎて太るとか、腹を壊すとか、そういったことを一切考えていない。ある意味では最も幸せな人間である。

いつもは呆れてしまう照瑠であったが、今日に限っては、そんな亜衣の元気の一部でも癒月にわけてやりたい気分だった。

〜 参ノ刻　　変異 〜

天倉癒月は夢を見ていた。暗い、先の見えない闇の中を、何かを追い求めるようにして走る自分。その先にある物が何なのかは、既に分かっている。

これは夢だ。いつも見ている、あの悪い夢でしかない。頭ではそう分かっていても、やはりどこか受け入れられない自分がいる。夢の中とはいえ、人を殺すというのは、やはり気持ちの良いものではない。

目の前に、自分よりも少しだけ年上の女性の姿が現れる。彼女とは、夢の中で幾度となく会っているが、その結末はいつも同じだ。

自分の姿を見て逃げ出す女性。それを追いかけ、手にした鈍器で頭を殴りつける自分。

止めようと思っているのに、身体が言うことをきかない。目を背けたくとも、その目を閉じることさえ叶わない。

いつの間にか、自分の手には鋭利な刃物が握られていた。それを女性の顔に添え、そのまま瞼を切開する。手慣れた様子で刃物を動かしている自分の手が、まるで自分の物でないように感じられる。

眼球を抉り出し、視神経を切断し、癒月はそれを摘まみ上げた。未だ血の滴る白い球体を、そのまま自分の目に宛がう。

ずぶずぶと、何かがめり込むような感触がして、抉り出した目玉と自分の目玉が一つになってゆく。生温かい眼球の感触、むせ返る

ような血の匂い、その全てが妙に生々しく癒月の五感を刺激する。

これは現実ではないと、いつも見ている悪夢でしかないと、そう分かっているはずなのに、この気持ち悪さはなんだろう。人を殺し、その身体の一部を切り取り、果ては己の肉体に同化する。一連の行動を否が応にも見せつけられ、頭がおかしくなってしまいそうだ。

やがて、女性の目玉が自分の目玉と完全に一つになったところで、夢の中の癒月はゆっくりと立ち上がった。殺された女性の死体には目もくれず、闇の中を癒月は再び歩き出す。

だんだんと、意識が遠くなってきた。自分の心が、夢の中の自分から離れて行くのが分かる。

これで、悪夢から解放される。これで、この狂った世界から逃げ出せる。そう、安心したものの、今度は突如として酷い頭痛が癒月の頭を襲った。

（……っ！！）

万力で頭を締め付けられているような、頭の芯まで響く痛み。しかし、頭を抑えようにも、自分の意思で腕を動かすことさえできない。いや、それ以前に、今の自分に肉体というものがあるのかさえも定かではない。

身体を動かすことも、声を上げることもできず、癒月は恐ろしいまでの頭の痛みに耐えるしかなかった。その痛みが限界まで高まった時、糸の切れた人形のように、癒月の意識はぶっつりと途切れた。

※　※　※　※　※　※　※

気がつくと、そこは自分の部屋だった。重たい頭を持ち上げながら、癒月はゆっくりと起き上がる。

ふと、先ほどの夢が気になって、自分の目に指を添えてみた。

なんのことはない、いつもの自分の目だ。ベッドから抜け出し、クローゼットを開けて扉についている鏡を見る。

そこにあるのは、いつも通りの自分の顔。瞼を持ち上げたり、目を左右に動かしてみたりしたが、とくに変わったところは見られなかった。

馬鹿らしい。あれは、いつもの悪夢だ。自分の目が死体の目を飲みこんで行くなど、そんなことがあるはずがない。

だが、今しがた見ていた夢の内容を思い出し、ともすれば癒月は不安な気持ちに駆られた。

夢の中で摘まんだ、生々しいまでにリアルな眼球の感触。いや、眼球だけではない。今までに夢の中で殺してきた女達の身体は、どれも本物のように感じられた。馬鹿げた考えだと思いつつも、それが現実だった時のことを考えるとぞっとする。

（気持ち悪い……。まるで、自分の身体が本当の自分の物じゃないみたい……）

身体に付いた穢れを払うようにして、癒月はベッドの上にパジャ

マを脱ぎ棄てた。いつも通り服を着替え、癒月は部屋を出て階段を下りる。携帯電話で時刻を確認すると、まだ六時半を少し過ぎたところだった。

さすがに今日は、遅刻をしないで済みそうだ。いくら悪夢にうなされる日々が続いているとはいえ、怖い夢を見たなどというのは遅刻の理由にならない。

一階に降りると、父も今しがた起きたばかりのようだった。髪は跳ね上がり、メガネの奥にある二つの目は眠たそうにしょぼくれている。これでも近所では名医で通っているのだが、今の恰好は風体の上がらない単なる中年男でしかない。

「ああ、おはよう癒月。今日は、寝坊しなかったみたいだね」

「まあね。それよりも、お父さん。起きたらまず、寝間着から着替えてっていつも言ってるでしょ。もう冬も近いんだし、いつまでも変な格好でいると、風邪ひくよ。医者の不養生って言葉もあるくらいなんだからさ……」

「そうは言っても、私はこの恰好が落ち着くんだよ。それに、風邪のことだったら、まずは自分の心配をしたらどうだ。昨日は、なんだか熱があるような気がするって言っていたじゃないか」

「うん。でも、今朝はもう大丈夫みたい。寝る前に、お父さんからもらった薬が効いたのかな？」

「そうかい。それはよかった。だが……油断していると、またぶり返す可能性もあるからな。今日は、あまり激しい運動はしない方がいいぞ」

「わかってるわよ、そんなの。体育の授業は休むつもりだから、大丈夫」

まったく、父は心配性だと癒月は思う。仕事柄、娘の身体を心配してくれるのは嬉しいが、少々過保護な点は否めない。まあ、唯一の家族が癒月だけなのだから、これは仕方ないことなのかもしれないが。

食パンをトースターにセットし、癒月はテレビのリモコンを取ってスイッチを入れた。別に、見たいテレビがあるわけではないのだが、情報番組を見ながら朝の準備や食事をするのが日課になっている。

画面の向こうでは、相変わらず下らないニュースがアナウンサーの口から語られていた。正直、どこの政党が政権を取って、誰が総理大臣になるかなど、癒月は興味がない。右だの左だのといった思想のことは分からないし、特定の政治家を気に入っているわけでもない。誰でもいいから、暮らしやすい社会を作ってくれというのが本音だ。

もっとも、高校生の癒月にとって、いくら政治のことを考えたところで無意味だった。選挙権もない人間が、何を言ったところで変わるわけでもない。せめて自分が大人になったら、少しはまっとうな判断をして投票に行けるようになっていればよいと思う。

パンの焼ける匂いを横に、癒月は鏡の前で自分の髪を整えた。妙なところからアホ毛が立たないようにピンで留めると、調度パンが焼き上がったところだった。

パンを皿に乗せ、冷蔵庫からジャムやらバターやらを出してテーブルに運ぶ。キッチンでは、パジャマ姿のままの父がコーヒーを入れている。

ここまでであれば、いつもの朝の風景だ。何の変哲もない、天倉家の日常の一幕に過ぎない。

だが、パンにバターを塗ろうとナイフに手を伸ばしたその時、癒月は自分の耳に聞こえて来たテレビの声が、ふと気になった。

≪次のニュースです。一日の日曜日、午後一時頃、N県火乃澤町の山中で、新たに女性の遺体が発見されました≫

いつもならば、適当に聞き流してしまうであろう朝のニュース。朝食時における、単なる背景でしか過ぎないもの。

だが、癒月はなぜか、そのニュースの内容が気になった。朝方に見た、あの人殺しの悪夢が原因なのかもしれない。自分が夢の中で人を殺したことで、殺人というものに対して過敏になっているのだろう。

≪遺体で発見されたのは、同県内の短大に通う学生の安達理恵さん。警察の調べによりますと、理恵さんは二カ月程前から行方不明になっており、両親から捜索願が出されていました≫

そういえば、以前に同じようなニュースをテレビで見たことがある。あれは、確か先週の金曜日のことだったか。あの日は夢で殺した少女とよく似た者の顔がテレビに映し出されており、妙に不安な気持ちになったものだ。

≪現場付近からは先週の木曜にも同様の遺体が発見されたことから、警察では若い女性を狙った連続殺人事件と見て捜査を続けています≫

淡々とした口調で、アナウンサーが事実だけを述べる。相変わらず、そこに個人の感情というものは含まれていない。

「まったく、朝から嫌なニュースだねぇ。もう少し、すがすがしい気分になれるニュースはないのかな」

癒月の父である啓輔が、そんなことを言いながらコーヒーの入ったマグカップを置いた。癒月の目の前では父の入れたコーヒーが湯気を立てていたが、彼女はそれを手にすることなくテレビの画面に食い入っていた。

番組の最後に映し出された女性の顔。それは、死体となって発見された女子大生、安達理恵のもの。そして、癒月が今朝の夢で殺した女性のものとも同じだった。

「やだ……。どうして……」

コーヒーカップを握ろうとした癒月の手が小刻みに震える。ニュースの内容は既に別の物に変わっていたが、癒月には先ほどのアナウンサーの言葉と、画面に映し出された女性の顔が忘れられない。

先週の金曜に続き、今日もまた、夢で見た女性が死体となって発見された。これは何かの偶然なのか。それとも、癒月の知らないところで、人の理解を越えた力でも働いているというのか。

「どうしたんだい、癒月。なんだか、顔色がよくないみたいだぞ？」

父が心配そうに声をかけてきたが、癒月の耳には入らなかった。口に運んだパンの味が、妙に淡白なものに感じられる。

あれは所詮、夢の中の出来事だ。連日、妙な夢を見ているため、殺人事件に対して過剰に反応してしまっているだけだ。

だが、偶然の一致にしては、あまりにも気持ちが悪い話だった。自分が殺したわけでもないというのに、この不快感は何なのだろうか。

口直しにコーヒーでも飲もうと、癒月はコーヒーミルクとスティックシュガーに手を伸ばした。ミルクを入れ、スティックシュガーを三本入れて、甘さを自分の好みに合うように調節する。

「あれっ……？」

コーヒーを口にした瞬間、癒月は妙な違和感に気づいて顔をしかめた。砂糖を三本も入れたというのに、まだ苦い。いや、苦いというよりも、味が薄い。先ほどのパンもそうだったが、味覚が麻痺しているとしか思えない。

（まだ、熱が下がってないのかなぁ……）

味のしないコーヒーを眺めながら、癒月の頭にそんな考えがよぎった。

高熱を出した時には、舌の細胞の感覚が鈍くなるという話を聞いたことがある。実際、風邪をひいて熱を出している時に食べる食事は、どんなに好きなものでも美味しく感じた試しがない。

しかし、今日は父からもらった薬も効いて、熱は下がっているはずだ。ならば、まだ身体の芯に熱が残っているということか。父の言葉を借りるわけではないが、油断をすると、本当にぶり返してしまうかもしれない。

味のしない朝食を適当に済ませ、癒月は足元にある鞄を持って立ち上がった。時刻は七時四十分。そろそろ家を出ないと、学校に間に合わなくなる。

「それじゃあ行ってくるね、お父さん！！」

「ああ。何度も言うが、無理はしたら駄目だぞ、癒月」

「わかってるって！　そんなヘマしないから大丈夫！！」

声だけは元気に、癒月は玄関の戸を開けて外へ出た。空はどんよりと曇っており、今にも雨が降り出しそうな気配である。

これは、傘を持って出た方がよさそうだ。そう思った癒月は一度玄関まで引き返すと、傘立ての中にあるお気に入りの傘を抜いて再び外へ出た。雨が降らなかった場合は荷物になるが、ずぶ濡れになるよりはマシだ。

傘を片手に、家の前に広がる通りへと出る癒月。ふと、塀の上を見ると、一匹の黒猫がこちらを見つめていた。

癒月は決して動物が苦手な方ではない。むしろ好きな方であり、野良猫がいたら、つい手を出して近寄ってしまうようなタイプだ。

だが、その日に限って、癒月にはその黒猫が妙に禍々しい存在に

思えて仕方がなかった。

全身に真っ黒なタールを塗りたくったかのような艶をした毛並みと、首に巻かれた古めかしい首輪。首輪についている鈴は、よく見ると頭蓋骨の形をしていた。

これだけであれば、飼い主の悪趣味な嗜好に振り回されている猫のことを哀れに思っただろう。ところが、その猫は首の鈴などまったく気にすることなく、こちらをじっと見つめている。しっぽは常にゆらゆらと揺れ、まるでそれだけが別の生き物であるかのようだった。

そして、何よりも癒月が気になったのは、その猫の目に他ならなかった。金色に輝く二つの目は、油断なくこちらを睨みつけている。威嚇しているのではなく、まるでそれだけが別の生き物であるかのように、ただじっと癒月を見つめている。

（うわぁ……。気持ち悪いなぁ……）

たかが動物に見られただけなのに、癒月は思わず後ずさった。あの猫の目。あれは、その辺にいる野良猫の目ではない。なんだか人間に見つめられているような、そんな奇妙な錯覚をもたらすのだ。

「……ニャォ」

妙にくぐもった声で鳴き、猫は塀の上からぴょんと飛び下りた。同時に、癒月は自分の肩から一瞬にして力が抜けるのを感じていた。

猫を見ていた時には気づかなかったが、自分はいつの間にか、金縛りにあったようになっていたらしい。額から汗が溢れ、呼吸が荒

くなっているのが自分でも分かる。

まったく、今日は朝から散々だ。変な悪夢にうなされて起きてみれば、テレビでは自分の夢に出てきたのと同じ顔をした女性が殺されたというニュースが流れる。おまけに、家を出たら出たで、気持ちの悪い猫に睨まれて時間を無駄に過ごしてしまった。

このままでは、学校に遅刻してしまう。父は無理するなと言っていたが、少し早足で歩くくらいは問題ないだろう。

「ほんと、今日は厄日なのかな。ついでに雨まで降りださなきゃいいけど……」

曇天の空を不安そうに見上げながら、癒月は小走りに学校へと続く道を駆けて行った。

※　※　※　※　※　※　※　※

タイル張りの廊下を、靴底が叩く規則正しい音が聞こえる。

N大学付属病院。先日、変死体の検死解剖の記録を受け取るために訪れたこの場所を、岡田と工藤の二人は再び訪れていた。

「それにしても……」

病院のソファーに腰掛けながら、工藤が呟いた。

「例の山で、また死体が発見されたんですか」

「ああ、そうだ。今度のやつも、それなりに古いやつでな。もっとも、前のに比べると、死んでから一月ほど経っているかいないかってとこらしいが……」

「どっちにしろ、仕事が増えたってことには変わらないですよ。こう、同じ山から毎日死体が上がったら、いくら僕でも気が滅入ります」

「まったくだな。しかも、今回のホトケさんも、身体のあちこちが損傷していやがった。それこそ、何者かに持っていかれたように、綺麗に切り取られてな」

「うへぇ、やだやだ。こいつはもう、連続猟奇殺人事件ってことで、間違いないですね」

廊下の天井に備え付けてある蛍光灯の明かりを眺めながら、工藤は辟易した口調で言った。

同じ山で、連日上がる謎の変死体。最初に遺体で発見された女性、佐藤美奈子の事件を追う過程で見つかったそれは、明らかに人の手で殺されたと思しきものだった。

最も古い物では、亡くなってから死後二カ月が経過している。こうなると、過去の行方不明事件などとも照らし合わせて考えねばならないから厄介だ。

幸い、遺体の身元は割れていたが、それでも事件の洗い直しというのは面倒なこと極まりない。時間が経過すればするだけ証拠も減り、人の記憶もあいまいになる。その上、本来は別の事件として扱

われていたものを一つにまとめるためには、それだけでも点と点を線で繋ぐような、慎重な推理を要求される。

これ以上の犠牲者を出さないためにも、警察官として、工藤はなんとしてもこの事件を解決せねばならないと思っていた。これが猟奇殺人事件、それも初美が以前に話していた異常なフェティシズムを持った者の犯行であるならば、犯人は必ず同様の犯行を繰り返すはずである。

だが、その一方で、工藤は今回の事件に言いようのない不安も抱いていた。

そもそも、事件の発端からして今回の件は不自然なものが多い。

まず、第一に発見された女子高生の遺体。顔の皮を中心に、身体の各所の皮を剥がされていた、見るも無残な変死体。これだけであれば、行方不明になった女子高生が変質者の毒牙にかかって亡くなったものと考えられただろう。

ところが、遺体の発見された山を捜査するにつれ、同様の変死体が次々に発見された。今日の朝に見つかったものを加えれば、合わせて三件。今まで見つからなかったことも不思議だったが、それ以上に、犯人の目星がつけられないことが不可解だった。

この数日、工藤は岡田と共に、周辺住民への聞き込みを行っていた。どんな些細な情報でも、それが犯人逮捕のきっかけに繋がることもある。初美の意見も参考に、不審者の目撃情報を集めようと奔走したのは記憶に新しい。

猟奇殺人を犯すような者であれば、日頃から住民から気味悪がら

れているような人物かもしれない。そうでなくとも、不審な人物の情報が手に入れば、それで犯人との距離を縮められる。

だが、そんな彼らのことをあざ笑うかのようにして、犯人はいっこうに尻尾を出そうとはしなかった。近隣住民への聞き込みからは不審者や変質者の情報は得られなかったし、近所にそういった嗜好を持っている者がいると言う話も聞かなかった。それどころか、警察署内に残っていた過去のデータからも、ここ最近、不審な人物としてマークされている者の情報は見つからなかった。

まったくもって、不可解極まりない事件である。これだけ多くの遺体が上がっているのだから、犯人の目星くらいつけられても良さそうなものだ。いったい、犯人はどんな人間で、何を目的として殺人を繰り返しているのだろうか。

（まさか……。犯人は人間じゃありませんでした……ってなオチはないだろうな……）

工藤の頭に、ふとそんな考えがよぎる。

女性ばかりを狙った連続猟奇殺人事件。今回の事件が五カ月程前に起こった事件と似通っていることに、工藤はどうしてもそんな考えを抱いてしまうのだ。

今年の六月、あの犬崎紅と知り合うことになった初めての事件。それが、後に岡田や工藤を向こう側の世界の住人と関わらせることとなる、『八ツ頭』事件だった。

古の封印を解かれた怪物が盗掘者の肉体を乗っ取り、自らを完全に復活させるために、次々と若い女性を手にかけて心臓を食らった。

警察の捜査も虚しく犠牲者は増え続け、最終的には犬崎紅の力によって、怪物を完全に消滅させることで事件はようやく解決した。

警察官として、工藤が初めて己の無力さを知った瞬間である。同時に、この世には自分の理解の範疇を越えた存在がいることが明らかとなり、常識の限界、警察の限界というものを見せつけられた事件でもあった。

「あの、岡田さん……」

「なんだ、工藤。情けねえ声出しやがって」

「いえ、何でもありません」

岡田に睨まれ、工藤は頭を小さくして答えた。

やはり、聞けるはずがない。そもそも岡田は、二番目の遺体が発見された現場で、幽霊や妖怪の犯行に対して否定的な見方をしていた。

岡田とて、向こう側の世界に関してまったく信じていないわけではない。それは工藤も知っている。が、同時に岡田は超の付くほどの現実主義者でもある。自分が見た物は信じるが、それ以外の怪しげな話は決して信じない。そんな岡田に可能性だけで話をしても、まともに取り合ってはくれないだろう。

やはり、自分が考え過ぎているのか。証拠さえ揃っていない時点で人知を越えた存在が犯人だと決めつけるのは、時期尚早ということだろうか。

考えれば考えるほど、堂々巡りの泥沼に陥って行く気がした。呪いだの祟りだのといった話を信じず、あくまで現実的な側面しか知らないで生きていた方が、どれほど楽だったことか。

「お待たせ、お二人さん」

気がつくと、そこには初美が立っていた。検死を終え、急いでこちらに来たのだろう。さすがに手術着のままではないが、初美の身体から微かに消毒薬のような匂いがした。

「おう、初美ちゃんか。毎度毎度、すまねえな」

「気にしなくていいわよ、岡田さん。これも私の生業の一つだから」

「そいつは、こっちだって承知だよ。けどな、こう連日で死体を運びこまれたんじゃ、さすがにまいってるんじゃねえかと思ってな」

「まあね。それで、今日の遺体だけど……検案書を出せるのは、夜になりそうなのよね。その前に、私の見立てを一通り話させてもらっても構わないかしら？」

「俺は別に構わねえが……」

初美の言葉に、岡田が横にいる工藤をちらりと見て呟く。これから昼食という時に、この気弱な刑事に解剖の話などしていいものだろうか。

「おい、工藤。お前、昼飯抜くのと飯食ってから吐くのと、どっちがいい？」

「えっ……。それ、どういう意味ですか？」

「だから、飯の前に初美ちゃんの話を聞くのか、それとも食いながら聞くのか、どっちがいいかってことだよ」

「飯食いながらって……勘弁して下さいよ、岡田さん」

まったく、何ということだろう。よりにもよって、食事をしながら解剖の結果について話をしようなど、正気の沙汰ではない。さすが、二人とも、死体を見た後に平気で焼き肉を食べに行けるだけのタフさを持ち合わせているだけある。

「すいませんけど……食事の前でお願いします」

選択肢は既になかった。これから解剖結果についての話を聞き、その後に昼食を食べることを考えると気が滅入る。が、食事をしながら話を聞かされるよりは数倍マシだ。

「ったく、仕方ねえな。それじゃ、説明をお願いするぜ、初美ちゃん。本当だったら、飯の一つでも奢りながら報告を聞きたかったところなんだが……」

「まあ、工藤君が一緒なら、それは無理ね。ご飯を奢ってもらうのは、また今度っていうことで」

岡田の言葉を初美がさらりと流して言った。いよいよ、初美の口から検死の結果が語られるのだ。その話が決して気持ちの良いものではないと分かっているだけに、工藤の手にはいつの間にか力が入っていた。

「それじゃあ、何から話したものかしら。今回の遺体、気になることがいくつかあったんだけど……」

「順番は、そっちの好きに任せるぜ」

「だったら、まずは遺体の状況からね。遺体は二十代前半と思しき女性のもの。指と耳、それに舌が抜かれていて、内臓のいくつかが損傷していたわ」

「指と耳、それに舌か……。今回、目ん玉は無事だったんだよな？」

「そこが、私も気になった点なんだけどね。でも、今回の遺体から持ち去られていたのは、間違いなく指と耳、それに舌よ。内臓に関しては……損傷が激しすぎて、なんとも言えないわね」

「まあ、昨日や一昨日に亡くなったってわけじゃあねえみたいだからな。しっかし、前は目玉で今度は指と耳。一番新しいやつで、顔の皮……。なんか、節操無く遺体の部品を集めてる感じがするな」

「そうね。この前、二人にはフェティシズムについての話をしたけど……どうやら、私の推理が外れていたのかもしれないわね」

視線を軽く床の方に落としながら、初美は少々残念そうな口調で岡田に言った。

犯人が被害者の身体の一部に何らかのフェティシズムを抱いていたのだとすれば、持ち去る部分もまた共通するはずである。しかし、山中で見つかった遺体は、それぞれが身体のどこかを持ち去られてはいたものの、その部位に一貫性が見いだせなかった。

やはり、三つの遺体は別々の犯人によって殺されたものなのか。それとも、犯人の目的は性的嗜好などではなく、他にあるというのだろうか。

「なあ、初美ちゃん。今回の犯人が、変態野郎じゃないとしてだ。それ以外に、何か気になった点はなかったのか？」

「気になった点、ね……。参考になるかどうかは分からないけど、一応、報告だけはしておくわ」

「勿体なんかつけなくていいぜ。どんな小さな情報だって、こっちとしてはありがたい」

「だったら、話は早いわね。今回の遺体だけど、実は、指や耳を失っている以外に、妙な点があったのよ」

「妙な点だと？」

「ええ。遺体の口内から、極めて高濃度の砒素が発見されたの。口の中だったから、雨風にさらされても残ったんでしょうね」

「なら、死因は毒殺か？」

「いいえ。砒素は、直接の死因とは関係ないわ。だからこそ、私にも訳が分からないんだけど……」

損壊した遺体。持ち去られた身体のパーツ。その上、今度は砒素ときたものだ。なんだか安っぽいサスペンスドラマの要素を、無理やりに繋ぎ合わせたような感じさえする。それも、統一感などまるでなく、酷く歪でちぐはぐなものに思える。

「ちなみに、最初に見つかった女子高生の遺体だけど、実は彼女の身体からも砒素が検出されているの。あの時は、別にそこまで意識しなかったけど……これで、最初の遺体と今回の遺体が、同一犯によるものって可能性も出て来るわね」

「同一犯か……。だが、やっぱり俺には分からんな。若い女ばっかり狙っている変態野郎の仕業かと思ったら、適当に身体の一部を持ってったとしか言いようがねえやり口。おまけに、最後は共通点として、砒素が出て来たってもんだ。いったい、こいつはどういう繋がりなんだ？」

「それを調べるのが、岡田さん達の仕事でしょ。残念だけど、私に協力できるのはここまでよ。ベテラン刑事の名推理、久々に見せてもらおうかしら？」

「勘弁してくれ。刑事コロンボじゃあるまいし、そう簡単に犯人を見つけられりゃあ苦労はしねえよ」

謙遜ではなく、それは岡田の本心だった。正直、今回の事件に関しては、犯人の目星が皆目見当もつかない。それこそ、シャーロック・ホームズでもコロンボ刑事でもいいから、あっと驚くような名推理で光陰のように事件を解決してくれないかとさえ思ってしまう。

とにもかくにも、これ以上の収穫は望めそうにない。そう思った岡田が工藤を連れ、初美の前を後にしようとした時だった。

三人の他に人のいない病院の廊下に、拍手の音が聞こえて来た。思わず音のする方を振り向くと、そこには以前、岡田と工藤の前に現れたカメラマンの男が立っていた。

「いやあ、これはこれは、皆さんお揃いで……」

妙にへらへらとした笑みを浮かべながら、その男は三人にゆっくりと近づいてくる。

榛原直人。第二の遺体が発見された現場に、他の報道陣よりも早く駆けつけて取材を迫った男だ。メガネをかけた細面な顔を見ると、鑑識の男が言っていた『ハイエナオト』という名前を否でも思い出す。

「榛原直人か。貴様、どうやってここまで来た……」

「おやおや、私の名前を覚えていただけていたとは。これは光栄ですな、刑事さん」

「とぼけるな。遺体の発見現場だけならいざ知らず、こんな大学病院にまで現れるとはな。貴様の鼻は、本当にハイエナ並みか？」

「そいつは企業秘密ってやつですよ。それよりも……今日はさすがの私も出遅れましてね。現場に直行できなかった分、そちらの監察医の方のお話でも聞かせてもらおうかと思ったんですが……」

榛原が、初美の方を見やる。全身を舐め回すような視線に、初美は一瞬だけ嫌悪感を露わにした表情になって身を引いた。

「てめえ……初美ちゃんのことを、変な目で見てんじゃねえよ。取材とか何とか言って妙なことしやがったら、その場でブタ箱に放り込むぞ！！」

「おお、怖い怖い。しかし……確かに、取材のことを抜きにしても、彼女は美しいですからね。私も被写体として、久々に女性の身体を使ってみたくなってきましたよ」

岡田に怒鳴りつけられても、榛原はまったく意に介していないようだった。そればかりか、首から下げたカメラを構え、初美のことを写そうとする素振りさえ見せる。その、あまりに横暴で人を舐めた態度に、さすがの岡田も堪忍袋の緒が切れた。

「ふざけるな！　この、死体マニアの変態野郎が！　いいか……今度、初美ちゃんの前に現れて妙なことほざいてみろ。迷惑防止条例違反で、貴様を逮捕してやるぞ！！」

「そいつはいけませんね。本当は解剖の終わった遺体の写真でも撮らせてもらいたいところでしたが……まあ、今日のところは退散するとしましょう。それに、立ち聞きとはいえ、なかなか面白い話も聞かせてもらえましたからね」

激高する岡田を他所に、榛原はあくまで飄々とした態度のまま去って行った。まったくもって、不愉快な人間だと岡田は思う。態度、言動、そのどれを取っても、あそこまで人を小馬鹿にしている男はそういない。

「ったく、気持ちの悪い野郎だぜ。いったい、何を食ったらあんな人間になれるってんだ？」

榛原の姿が見えなくなったところで、岡田が忌々しそうな顔をしながら吐き捨てた。その隣では、工藤がぼうっとしたままその場に突っ立っている。

「おい、工藤。用が済んだら、俺達も行くぞ。検案書は初美ちゃんに任せて、仕上がった頃に取りにくればいい」

「は、はぁ……」

「なんだ、その気のない返事は。お前だって刑事なんだから、いつまでも変死体如きの話で萎えてるんじゃねえ」

岡田に背中を叩かれたが、それでも工藤は返事をしなかった。いや、しなかったと言うよりは、出来なかったと言った方が正しい。

先ほどの岡田と榛原のやり取りなど、工藤にとっては二の次だった。それよりも、工藤の頭の中では、初美から聞いた解剖結果のことでいっぱいだった。

一見して統一性のない、持ち去られた遺体の一部。そして、二つの遺体から発見された、砒素の存在。あまりに繋がりのなさそうな物が、一つの事件として奇妙に絡み合ってくる。それらの事柄が意味する物は、いったい何なのだろうか。

先ほどまでは忘れていた、向こう側の世界のの住人達の存在が、再び工藤の頭をよぎった。

彼らに人間の常識は通用しない。その思考、行動、全てが人間の常識を越えたところにある存在だからだ。

彼らが今回の事件の犯人であれば、一見して繋がりの見えない事柄にも答えが出る。なぜなら、彼らに人間の常識など通用しないのだから。非常識なことが、彼らの常識。歯車が壊れ、狂っていることが、彼らの関わっている可能性を示唆するもの。

願わくば、今回の事件は人の手によるものだと思いたい。だが、その一方で、何か恐ろしい怪物が闇の向こう側で牙を研いでいることも否定できない。

こうなれば、やるべきことは一つだった。自分の不安を払い、可能性の一つを潰すためにも、今はあの少年に話を聞いた方がいいだろう。

「なあ、工藤。ところで、お前、昼飯はどうする？　俺は、この先にある定食屋で食って行くつもりだが……」

「えっ……！？　いや、僕は遠慮しときます。なんか、やっぱり食欲が出なくて……」

「相変わらずだな、お前は。まあ、あまり変に考えるな。お前も慣れれば、死体を見た後に焼き肉だって食えるようになるさ」

「努力します……」

昼食に誘う岡田の言葉を適当に流し、工藤は独り病院を出る。別に腹が減っていないわけではなかったが、今からすることを岡田に知られると、何かと面倒なことになる気がしていた。

病院の外に出た岡田は、ポケットから携帯電話を取り出して開く。時刻を見ると、十二時の半ばを少し過ぎたくらいだ。

この時間ならば、多くの学校は昼休み。電話をしても、授業の妨げにはならないはずである。

電話帳に登録しておいた名前から、お目当ての番号を探しだす工藤。今年の七月に起きた『ジョーカー様事件』の際に使って以来だったが、まだ番号は消していなかった。

何度かの呼び出し音の後、相手はすぐに電話に出た。元気いっぱいとしか形容のしようがない声が、電話の向こうから響いてくる。

「どうも～、亜衣ちゃんで～す！　何の御用でございましょうか！？」

「ああ、久しぶりだね、嶋本さん。ちょっと、折り入って君に頼みたいことがあるんだけど……」

「ほうほう。刑事さんが、この私に直々に頼み事とは……。なかなか意味深ですなぁ……」

「まあ、こっちも少しワケアリでね。君の学校にいる犬崎君。彼に会いたいんだけど……連絡とか、取れるかな？」

「犬崎君か……。ううむ、どうだろう……」

電話の向こう側の声が、少しだけ重たくなった。

犬崎紅が無愛想なことは、工藤も今までの事件で知っている。だが、今頼りにできるのは、嶋本亜衣しかいない。情けない話だが、紅と連絡を取る手段など、工藤とて持ち合わせているわけではないのだ。

「とりあえず、私の方から声をかけてみるよ。それで話ができるようだったら、また電話するね」

「ああ、それで構わない。でも、なるべく早く頼むよ。もし、事件の裏で妙な連中が動いているようだったら、彼の力が必要になるかもしれないからさ」

「なるほど。今回も、心霊事件ってわけですな。これは、なかなか面白いことになってきましたぞ……」

亜衣がにやりと笑っているのが、電話越しにも分かった。正直なところ、まだ心霊事件と決まったわけではないのだが、この際余計なことは言わずに黙っておく。亜衣が話を誇張して伝えないかどうかが心配だったが、今は犬崎紅と話ができればそれでよい。

「それじゃあ、とりあえず頼んだよ。できれば、どこかで待ち合わせて、直々に話を聞かせて欲しいって伝えてくれ」

「了解であります、警部殿！　『人脈の亜衣ちゃん』の力、とくとお見せいたしましょう！！」

歯切れのいい声と共に、電話は切れた。自分のことを警部と勘違いしている亜衣に、工藤は思わず苦笑する。

（おいおい……。僕は警部じゃなくて、巡査部長なんだけどな……）

刑事ドラマなどでは、よく若くして警部や警部補の階級に就いている者が登場する。そんなドラマの影響からか、亜衣も自分のことを警部と勘違いしたのだろう。警察組織の仕組みを知らない、女子高生らしいと言えば女子高生らしい間違いが、少々可愛くも思えてくる。

空を見上げると、相変わらず灰色の雲が一面を覆っていた。今にも雨が降り出しそうな天気に顔をしかめながらも、工藤は独り携帯電話を折り畳むと、病院の前を後にした。

※　※　※　※　※　※　※

天倉癒月が目を覚ました時、そこは保健室のベッドの上だった。白い天井に備え付けられた蛍光灯が、こちらを静かに照らしている。

「あら、気がついたのね」

見ると、そこには保険の先生の姿があった。まだ若いが、それ故に女子の悩み相談にも気軽に応じてくれる、人気の高い女性の先生だ。

「あの……。私……」

「まだ、無理しちゃだめよ。あなた、廊下で急に倒れて、ここまで運び込まれたのよ」

「そうだったんですか……」

「ええ。たぶん、貧血だと思うけど……最近、無茶なダイエットとかしてないかしら？」

「それは大丈夫です。今朝も、ちゃんとご飯は食べましたし……」

話をしている内に、だんだんと記憶が戻って来た。そういえば、

三限の美術の時間、美術室に向かう途中から記憶がない。恐らく、そこで貧血を起こし、倒れてしまったのだろう。誰だか知らないが、ここまで運んで来てくれた人には感謝したい。

「天倉さん、最近、身体に負担をかけるようなことしなかった？それとも、夜更かしが過ぎるなんてことはないかしら？」

「それはないです。ただ……」

ここ最近になって見るようになった、あの悪夢のことを思い出した。こんな馬鹿馬鹿しい話を、学校の保険の先生にしてよいものか。一瞬、そう躊躇ったものの、変に隠し事をするのも嫌だった。

「私、最近、変な夢を見るんです。それが原因なのかは分かりませんけど……なんだか、いくら寝ても寝た気がしなくて……」

「変な夢ねえ……。いったい、どんな夢なのかしら？」

「私が、夢の中で人を殺すんです。その、殺した時の感じが、なんだかとってもリアルで……。朝起きても気持ち悪くて、すっきりしないんです……」

「それは辛かったわね。夢であっても、自分が人を殺すなんて……私だって、想像したくもないわ」

馬鹿にされるかと思っていたが、その言葉を聞いて癒月はほっとした。やはり、この先生は生徒のことを第一に考えてくれる。どんな下らない話であれ、些細な悩みであれ、真剣に聞いてくれるのは嬉しい限りだ。

「ねえ、天倉さん。私じゃ頼りないかもしれないけれど、何か悩みがあったら、きちんと話さないと駄目よ。人間、小さなストレスが積み重なると、思ってもいないような嫌な夢を見るものなんだから」

「そうですか……。でも、今のところは大丈夫です」

「わかったわ。それじゃあ、先生はちょっと用があって留守にするけど……直ぐに戻って来るから、勝手に部屋から出たら駄目よ。しばらくは、安静にしていなさい」

「わかりました。もう少しだけ、寝させてもらいます」

「それがいいわ。夢のことなんか気にしないで、たまにはゆっくり休みなさい」

再び枕に頭を乗せた癒月の胸元へ、保険の先生が布団をかけてくれた。そして、癒月の顔を覗きこむ様にして微笑むと、そのまま部屋を出て行った。

誰もいない保健室で、癒月はぼんやりと考える。

自分はやはり、疲れているのだろうか。それこそ、何かストレスになるようなことがあって、あの奇妙な夢を見るようになったのだろうか。

色々と考えてみたが、ストレスの原因になりそうな物は思い浮かばなかった。ここ最近、友人との関係も悪くはなかったし、今月の頭にあった試験の勉強も決して苦になるようなものではなかった。文化祭も普通に楽しめたし、何よりも、自分があの妙な夢を見始めたのは、もっと以前からのことだ。

最初の内は、それこそ五日に一辺くらいの割合だった。しかし、九月の終わりに入った辺りで夢を見る回数も増え、夢の中で殺す相手も一人から二人に増えた。こと十月に入ってからは、連日のように夢を見る。殺す相手も三人に増え、その殺し方も様々だった。

（そう言えば、最初に夢を見たのって、いつ頃からだったんだろう……）

曖昧になっている記憶の糸を辿るようにして、癒月は自分が初めて夢を見た日を思い出す。あれは、確か八月の終わり頃のことだったか。その日は嫌な夢を見たという程度で済ませていたが、思えば、あれが全ての始まりだったのかもしれない。

（八月の終わりか……。もう、二カ月くらい前の話だな……）

そこまで思い出した時、癒月の頭の中に、今朝のニュースで見たアナウンサーの声が響いてきた。

≪遺体で発見されたのは、同県内の短大に通う学生の安達理恵さん。警察の調べによりますと、理恵さんは二カ月程前から行方不明になっており、両親から捜索願が出されていました≫

二カ月。自分が夢を見るようになった時と、女性が殺されたと思しき時の奇妙な一致。なんのことはない、偶然の産物。普段であれば、そう片付けてしまったことだろう。

だが、今日に限っては、そのように考えることの方が無理だった。

あの日、自分が初めて見た人殺しの夢。その夢こそ、今朝に自分

が見た夢と、まったく同じ内容の夢だったことを思い出したのだ。そればかりでなく、ニュースに映し出された短大生の顔。あれは間違いなく、自分が夢で殺した相手の物だった。

二カ月前に殺された短大生と、二カ月前に見始めた奇妙な夢。そして、その夢で自分が殺していた女性の顔が、殺された短大生にそっくりであるという事実。

何がどうなっているのか、癒月にはまったく分からなかった。自分がいったいどうなって、あの夢はいったい何を意味しているのか。

二カ月前。全ての謎を解く鍵は、そこにある。夏休みも終わりになろうかという時に、いったい自分の身に何が起こったのか。

だが、思いだそうとすればするほどに、癒月の記憶は霧がかかったようにぼやけた物になっていった。それでも強引に思いだそうとすると、今度は激しい頭痛が癒月を襲った。

「痛っ……！！」

頭を左右から締めつけられるような痛みに、思わず両手を出して頭を押さえる癒月。頭の内側から頭蓋骨を叩かれているような感じがして、癒月はそのまま枕に顔を埋めて身体を震わせた。

しばらくすると、頭の痛みは徐々に治まってきた。頭痛は一時的なものだったらしく、今しがた苦しんでいたのが嘘のようだ。

枕に埋めた顔を上げ、癒月はゆっくりと仰向けになった。自分は何か、大事なことを忘れているのではないか。思い出さねばならないことを、思いださないようにしているだけではないのか。

頭痛の正体も分からないまま、癒月がそんなことを考えた時だった。

自分の右手に妙な違和感を覚え、癒月は布団から両手を出した。服の袖をまくってみると、そこには大きな痣ができていた。軽く指で押してみると、思った以上の痛みが走って軽く悲鳴を上げた。

「どうしたんだろう、この痣……」

貧血で倒れた時、何かにぶつけたのだろうか。それにしても、この痣は少し大きすぎる。何か硬く大きな物にでもぶつけなければ、こんな痣はできないはずなのだが。

閉ざされた記憶と奇妙な痣。そして、短大生の死と自分の夢に共通する、二カ月という期間。

全ては単なる偶然なのかもしれない。保険の先生が言っていたように、自分は疲れているだけなのかもしれない。そう考えようとはしてみたものの、癒月は自分の周りを覆う奇妙な影の存在に、言い様のない不安を抱いていた。

〜 四ノ刻　反魂 〜

工藤健吾が駅前の甘味屋に到着したのは、その日の太陽が西に沈みかけた頃だった。

嶋本亜衣に犬崎紅と話ができるよう頼んだ後、その返答は直ぐに返って来た。なんでも、かなり渋られたようだが、工藤が何かを奢るという話をネタに釣ったらしい。

亜衣から電話があった時は、思わず「警察に協力はタダだ！！」と言いたくなった。が、相手はたかが高校生。自分から無理難題を頼んでおいて、目くじらを立てるというのも気が引けた。

「あっ、こっちだよ、刑事さん！！」

店に入ると、既に亜衣は席を取って待っていた。隣には、紅が相変わらずの無愛想な表情で、腕を組んだまま座っている。

「やあ、待たせたかい？　なんだか急に呼び出したりしてすまないね」

「そう思うんなら、要件を早く言え。言っておくが、つまらん話なら直ぐに帰らせてもらうぞ」

紅が、下から睨みつけるような視線で工藤を見た。目上の相手であっても容赦のない尊大な口調だが、血のように赤い目で見つめられながら言われると、何も言う気が起こらなくなってしまうから不思議なものだ。

「まあ、そう言わずに、まずは何か頼もうか。嶋本さんも、好きな物を注文していいよ」

紅と対面するような形で腰掛けながら、工藤は亜衣にメニューを手渡した。亜衣はそれを受け取ると、適当なページを開いてしばし悩む。

「うーん……。クリーム餡蜜は、この前、照瑠達と食べたばっかりだしなぁ……。さすがに、こうも連続で食べるのはちょっとね……」

照瑠達とは、昨日の夕方にこの店を訪れたばかりだ。そこで照瑠の餡蜜をつまみ食いし、果ては癒月の残した物まで平らげたことを思い出す。

さすがに、二日連続でクリーム餡蜜はないだろう。いくら甘い物が好きとはいえ、こうも立て続け食べるようとは思わない。

「やっぱり、今日は抹茶と小さな羊羹だけでいいや。刑事さんは？」

「なら、僕もそれで。正直、今日はあんまり食欲が無くてね。重たい物は、あまり食べたくないんだよ」

昼間、初美に聞かされた検死解剖の結果を思い出す。昼食もろくに食べていない工藤であったが、今日は進んで何かを食べたいとは思わない。

そもそも、変死体の話などを目の前でされて、食欲がある方がどうかしているのだ。岡田や初美などのタフさは、まさに異常とも言える。きっと、あれが職業病というものなのだろう。後、五年後か十年後には、自分もああなっていると思うと複雑な心境である。

「それじゃあ、注文取るよ。犬崎君も、私達と同じでいいよね」

亜衣が隣に座る紅に聞いたが、紅は答えなかった。相変わらず、不機嫌そうな顔をして腕を組んでいる。

知らない人間が見れば、なんと不愉快な印象を与える少年だと思うことだろう。だが、亜衣の知る限り、紅が不機嫌そうな顔をしているのはいつものことだ。そうでなければ、後はどこか遠くを見るような、ぼんやりとした目つきで呆けているだけである。

およそ、笑うとか泣くとかいった表情を見せない、感情が欠落しているのではないかと思う犬崎紅。同じ歳の人間として、ここまで自己表現のバリエーションが少ない者も珍しい。

亜衣がそんなことを考えていると、店員が注文を取りに現れた。抹茶と同じ色をしたエプロンが、店の空気と合わさって良い感じだ。

「いらっしゃいませ。ご注文は？」

「えっと……。この、抹茶と羊羹のセットで。数は……」

「二つだ。それと、クリーム餡蜜を一つ頼む」

一瞬、誰が喋っているのか分からなかった。恐る恐る横を見ると、そこには店員を睨みつける紅の姿があった。もっとも、実際には睨みつけているわけではなく、単に目つきが悪いだけなのかもしれないが。

「で、では、確認いたします。抹茶セットがお二つと、クリーム餡

蜜がお一つでよろしいでしょうか？」

店員の言葉に、紅が無言で頷いた。横で見ている亜衣達は、ただ呆気にとられる他にない。

あの、ぶっきらぼうで口が悪く、無愛想を絵に描いたような紅が餡蜜を頼む。普段の彼の様子からは、決して想像できない組み合わせである。

「犬崎君、餡蜜なんて食べるんだ……」

「悪いか、嶋本。俺だって、甘い物は嫌いじゃないぞ」

「で、でも、意外だよね。犬崎君って、そういうの食べる風に見えなかったから……」

「人を見かけで判断するな。昔ながらの甘味は、俺の好物の一つだ」

あくまで淡々とした口調で語る紅だったが、亜衣は未だに自分の聞いた言葉が信じられなかった。

特大の餡蜜を前に、それを美味そうに食べる犬崎紅。考えただけで、あまりのミスマッチに眩暈を起こしそうになる。笑いが込み上げてくるのを通り越して、これはもう衝撃だ。

堅物な校長のズボンを降ろしたら、実はイチゴ柄のパンツを履いていた。もしくは、人形のように可愛らしさを持つ幼女の脇に、もっさりと脇毛が生えていた。それと同レベルの衝撃としか言いようがない。

（犬崎君の好物がクリーム餡蜜だなんて……。これ、新しい都市伝説だよね。きっと、そうに違いないよ……）

闇の世界の住人と戦う犬神使いは、実は餡蜜が好物である。まさか、こんなところで新しい都市伝説のネタが手に入るとは思わなかった。もっとも、今回ばかりは、それを積極的に広めようという気にはならない。一歩間違えれば、冗談抜きで紅の犬神に呪い殺されそうだ。

「あの……。そろそろ、本題に入らせてもらってもいいかな？」

痺れを切らしたように、工藤が口を開いた。本当であれば注文した物が届いてから話してもよかったのだが、亜衣と紅の間に流れる微妙な空気に耐えきれなくなったと言った方がよい。

「犬崎君。君も知っているかもしれないけれど、今、この火乃澤町では連続殺人と思しき事件が起きているんだ」

「そいつはまた、物騒なことだな……」

興味はない。そう言わんばかりの口ぶりだったが、工藤は気にしなかった。

「その、殺人事件の被害者たちなんだけど……どうにも、妙な点が多くてね。もしかしたら、君の言う向こう側の世界の住人が関わっているんじゃないかと思って、ちょっと心配になったんだよ」

工藤の言葉に、今度は紅の瞳が少しだけ反応した。とりあえず、これで話に興味は持ってもらえたようだ。後は、彼がこちらの話を聞いて、どこまでの意見を述べてくれるかだ。

「……向こう側の世界の連中が関わっているかもしれない事件か……。最初に聞いておくが、そっちの勘違いってことはないのか？」

「それは、僕にも分からない。だからこそ、君に聞いているんじゃないか」

「なるほどな。だったら、その殺人事件の手口や殺された被害者の状況ってやつを教えてくれないか？　そうすれば、少しはこちらも話のしようがある」

「そうだね……。まあ、こんなところで話すような、気持ちいい話じゃないんだけど……」

時折、横で話を聞いている亜衣の様子に気を配りながら、工藤は慎重に言葉を選んだ。なにしろ、刑事の自分でさえ、初美の話を聞いた後は食事が進まなかったのだ。猟奇殺人事件の話など、これから甘い物を食べようとしている女子高生の前で話すのは少々気が引ける。

だが、そんな工藤の考えを見越してか、亜衣は至って普通に笑顔を作り、工藤に向かって言った。

「わたしのことなら平気だよ、刑事さん。こう見えても、グロイ話には慣れてるからね。ポップコーン片手に映画館でスプラッター映画見るなんて、私にとっては普通だもん」

「そ、そうかい。だったら、こちらも遠慮なしに言うけど……」

心配しただけ損だった。どうやら亜衣は、ある意味では初美と同

じ人種のようである。こういった類の話に関しては、むしろ男性よりも女性の方が耐性を持っているのではないか。思わず、そんな妙な考えが頭をよぎってしまう。

「それじゃあ、まずは遺体の状況だけど……。実は、殺された後に身体の一部が持ち去られた形跡があったんだ」

「ほうほう。それで……」

「最初は僕達も、変質者の仕業じゃないかって思ったんだけどね。でも、遺体によって持ち去られた場所は目玉だったり指だったり、それぞれで違っていたし……被害者の年齢や容姿もバラバラだったんだ」

「なるほど。それは興味深い……」

「その上、最初に見つかった遺体と今日になって見つかった遺体からは、検死の結果、砒素が発見されたのさ。でも、直接殺害には使われなかったみたいで、犯人を特定するような決め手にはならなかった」

「ふむふむ。毒物反応があったのに、それが直接の死因ではないとは……。いやあ、実に不可解な……」

そこまで言った時、亜衣の頭を紅の手が軽く叩いた。話の腰を折られて抗議の視線を向ける亜衣だったが、直ぐにそれは、紅の赤い瞳に睨まれてかき消えた。

「さっきから、いちいちやかましい。少しは落ち着いて話を聞け」

「むぅぅ……。ちょっとくらい、話に入ったっていいじゃんか」

「勘違いするな、嶋本。お前の役目は、俺をここまで連れて来ることだ。それから先は、俺の仕事。違うか？」

紅から言われた厳しい一言。確かにその通りなのだが、ここまではっきり言わなくてもよいではないか。

だが、隣で憤慨する亜衣のことなど、紅はまったく気にしていないようだった。亜衣のことは放っておいて、工藤に話の続きをするよう催促する。

「それで、あんたの見立てはどうなんだ。何か、幽霊や妖怪が現れた証拠でも見つけたのか？」

「その辺を、君に聞きたいと思っていたんだよ。幽霊や妖怪の話じゃなくても……例えば、呪いとか祟りとか、そっち系の話でもいい。とにかく、今回の事件に関して、何か思い当たるようなことはないかい？」

「身体の一部を持ち去られた遺体と、それに砒素か……。まあ、完全にないとは言えないが……」

工藤の話を聞いた紅は、再び腕を目の前で組んで考え込んだ。いつもは目の前の相手を油断なく見据えている赤い瞳が、今は珍しく閉じられている。

工藤の話から、思い当たらない節が無いわけではない。人体の部品を集め、更には砒素を用いて行う禁じられた術を、紅は以前にも聞いたことがある。

「とりあえず、俺の知っている範疇での話だが……」

今は、あくまで予測の範疇でしか話をすることができない。自分の中で言葉を選びつつも、紅はゆっくりと目を開いて話しだした。

「反魂（はんごん）の術というものを、聞いたことはあるか？」

「反魂の術？　なんだい、それは」

「私、知ってるよ。確か、死んだ人を生き返らせる術じゃなかったっけ？」

目の前で首をかしげている工藤に代わり、亜衣が言った。だが、自信満々に答える亜衣に対し、紅はあくまで冷静な口調で彼女の言葉を否定した。

「いや、少し違うな。反魂の術ってやつは、別に死者を復活させる術じゃない。どちらかと言えば、人が人を造り出す術と言った方が正しいか……」

「人が人を造る？　なんなの、それ……？」

自分の考えを軽く否定され、亜衣も不思議そうな顔をして紅を見た。と、そこへ、先ほどの店員が注文の品を持ってやってくる。

「お待たせしました。抹茶セットがお二つと、クリーム餡蜜でございます」

「ああ。餡蜜は、こっちに置いてくれ」

餡蜜と言えば、女の子の食べ物だと思ったのだろう。亜衣の前にクリーム餡蜜を置いた店員を、紅が軽く睨みつけるようにして言った。

「し、失礼いたしました」

紅の前に餡蜜を置き、残る抹茶セットも出し終わると、店員はそそくさと店の奥に引っ込んで行った。注文を採った時からおかしいとは思っていたのだろうが、まさか、本当に目の前の無愛想な少年が餡蜜を食べるとは思ってもいなかったのだろう。

「食べながら話すので構わないか？」

目の前に置かれた餡蜜を口にしながら、紅が工藤に尋ねた。

「ああ、僕は構わないよ」

「それじゃあ、さっきの続きだ。反魂の術ってやつは、人を生き返らせるための術じゃない。あくまでも、人が新しい肉体に新しい魂を宿すことを目的とした術だ」

「そこんとこ、よくわからないんだけど？」

「話は最後まで聞け、嶋本。反魂の術が初めて登場した文献は、平安時代末期に作られた撰集抄（せんじゅうしょう）という説話集だ。その中に、西行（さいぎょう）という法師が反魂の術を行ったという話がある」

「西行？　なんか、聞いたことない名前だけど……」

「まあ、無理もないだろうな。そもそも、学校で使うような歴史の教科書に出て来る名前じゃない」

口に付いたクリームを指で拭きながら、紅が亜衣に向かって言った。先ほどからあれこれと話してはいるが、それでも目の前の餡蜜は確実に減っている。それだけ食べるペースが速いということなのだろうが、紅がいっこうに表情を変えないため、まったく美味しそうに見えない。

「それで、その西行という法師は、いったいどんな術を使ったんだい？」

「さっきも言っただろう、刑事さん。反魂の術は、人が人を造る術だ。山籠りの修業中、その孤独に耐えかねた西行は、野山に転がっている人骨を集めて人間を造ろうとしたのさ。自分の話し相手としてな」

「それはまた、とんでもない話だね。でも、どうやって？」

「俺も詳しいことは知らないが、撰集抄に載っている話なら知っている。なんでも、拾い集めた人骨を人の形に並べて、砒霜石……これは、砒素を含んだ鉱物なんだが、こいつから作った薬を骨に塗る。そして、イチゴとハコベの葉を揉み合わせた物を骨に乗せ、藤の若葉から作った糸で、骨を繋ぐんだ」

「なんだか、随分と手の込んだ方法だな。本当に、そんなことで人が蘇るのかい？」

どうにも話が呪術めいた物になってきた。僧侶が行った術と聞いて祈祷のようなものを想像していた工藤だったが、これは想像以上

だ。どちらかと言えば、南方の辺りで行われている黒魔術の類に近いような気がする。

一方、そんな工藤のことなどお構いなしに、紅はクリーム餡蜜を口に運びつつも話を続けた。餡蜜は、もう既に半分ほどなくなっている。

「話はまだ終わりじゃないぞ、刑事さん。それに、何度も言っているが、反魂の術は死者を蘇らせる術じゃない」

「だったら、続きを聞かせてくれないか？　できれば、僕にもわかりやすいように……」

「こっちは最初からそのつもりだ。それで……骨を繋ぎ合わせた後なんだが、そいつを今度は水で数回に分けて洗う。その後、サイカチとムクゲの葉を焼いた灰を頭部に塗りつけて、土の上にゴザを敷き、骨をそこにうつ伏せにさせる。最後は風が入らないように骨をゴザでくるみ、沈降を焚きながら、十四日間に渡って反魂の真言を唱えるんだ」

「なるほど。だいたいの方法は分かったよ。それで、その西行っていうお坊さんは、術を成功させたのかい？」

「いや。残念ながら、術は失敗だった。術によって誕生したのは、感情を持たない人形みたいなやつだったらしい。要するに、腐っていないゾンビみたいなものだな」

「なんだ……。思わせぶりに話さないでくれよ……」

先ほどまで紅の口から語られていた、実に細かい反魂の術の詳細。

その話を聞いていた工藤は、てっきり術が成功したものだとばかり思っていた。が、よくよく考えれば、そんな危険な術を紅が容易く人に紹介するはずもないだろう。話の結末には拍子抜けしたが、落ち着いて考えてみれば納得もできる。

「まあ、どちらにせよ、反魂の術なんてやつは人の手に余る代物だって話だ。もとより、その辺に転がっていた名も無き死者の人骨を適当に集めて、新しく人間を造ろうとしたんだからな。人が人の肉体や魂を創造しようなんて、元よりおこがましい行為だってことさ」

「ふむふむ。私が聞いた話とは、随分違っているみたいだね。死者蘇生ってよりは、フランケンシュタインの怪物やゴーレムの作り方に似ているってわけですなぁ……」

紅の隣で、亜衣が独り納得した顔をして頷いている。工藤には死者蘇生とフランケンシュタイン博士が怪物を生み出した技術の違いは分からなかったが、それでも紅が話していたことは少しばかり理解できた。

「ところで犬崎君。今回の事件なんだけど……君は、その反魂の術が関係していると睨んでいるのかい？」

「いや、ちょっと違うな。ここまで話しておいてなんだが……恐らく、今回の事件に反魂の術は無関係だと思う。人体のパーツを集めるところや検出された砒素のことが気になったんだが……やはり、少しばかり話がずれている気がするからな」

「そうか……。それじゃあ、やっぱり事件は、変質者の仕業ってことで間違いないのかなぁ……」

自分の予測が外れたことに少しだけ安心を覚えたが、それでも工藤は首を垂れて項垂れた。

人体の一部を集めていることに加え、遺体から検出された砒素の存在。確かに紅の話と共通する部分はあったが、それでもどこかずれている気がするのもまた事実。

反魂の術に必要なのは人骨であって、目玉や耳などではない。唯一、共通している部分と言えば、砒素を含んだ鉱物の存在くらいか。

「すまないな、刑事さん。だが、人の身体の一部を集めるという話と、それから砒素。この二つから思いつくことは、俺には反魂の術くらいしかなかった」

「いや、こっちこそ、勝手に妙な期待をしていたからね。確かにちょっと異常な事件ではあるけれど……それで、全てが呪いだの祟りだのといったもののせいにするのは、やっぱり気が早かったかな……」

「だが、完全な無駄足ってわけでもなかったはずだ。少なくとも、これで可能性の一つが完全に消えたわけだからな。後は向こう側の世界の連中なんか気にせず、普通に捜査を続ければいい」

「そう言ってくれると、こっちも助かるよ。願わくば、今回は君の力を借りずに事件を解決したいものだしね」

「こっちも健闘を祈らせてもらう。ただ……もし、何か妙なことがあったら、今度からはこっちに連絡しろ。嶋本を使わなくても、直接話が出来るようにしておいた方が便利だろう」

テーブルに備え付けの紙ナプキンを引き抜いて、紅はそこにボールペンで電話番号らしき物を書いた。番号からして、どうやら携帯電話のようだ。文明の利器などとは無縁の生活をしているように見える紅だったが、意外と器用に使いこなしているのかもしれない。

「わかったよ。だったら、僕も自分の連絡先を教えておこう。事件に関して気付いたことがあったら、こっちに連絡してくれ」

抹茶をすすりながら、工藤も紅に自分の名刺を渡して言った。相変わらず、紅は表情一つ変えずに餡蜜を口に放り込んでいる。

せめて、もう少し美味しそうな顔をすれば良いのに。そう思った工藤だったが、口には出さず心の中の声だけに留めておいた。仮に言ったところで、どうせ「悪いか……」の一言で一蹴させるのがオチだからだ。

結局、その日に工藤が知ったのは、妙な儀式についてのやり方くらいのものだった。オカルト好きな人間にとっては興味深い話なのかもしれないが、工藤にとっては単なる雑学程度の物に過ぎない。

餡蜜と、それから抹茶セット二つに対する対価としては、あまりにも釣り合わないような気がした。せめてもの救いは、自分が妙な考えに縛られて誤った捜査をしないで済むということくらいか。

（やっぱり、岡田さんの言う通り、直感や思い込みで捜査をしても駄目だなぁ……。ここは一つ、僕も初心に返って聞き込み捜査からやり直しますか……）

ほろ苦い抹茶をすすりながら、工藤は自分の捜査のやり方を今一度考える必要性を感じていた。

※　※　※　※　※　※　※

その日の夜も、天倉癒月は例の夢を見ていた。

暗闇の中を歩き、見知らぬ少女を追い詰める自分。やがて少女は逃げ場を失い、夢の中で癒月によって殺される。そして、世にもおぞましい解体ショーが繰り広げられ、死体は無残な姿へと変えられる。

二カ月程前は、五日に一辺くらいしか見る事の無かった悪夢。しかし、ここ最近になって、悪夢を見ることは連日の日課のようになってしまった。自分が夢の中で殺す人間の種類も増え、ある時は少女であり、またある時は自分よりも少し年上の女性だった。

夢の中、癒月はいつもと同じように、見知らぬ少女を追い詰めてその頭を殴る。夢であると分かっているのにも関わらず、相手を殴り殺した時の感触はあまりにも生々しい。

仰向けになって倒れた少女の顔を見ると、それは癒月が初めて見る顔だった。金色に近い色に染められ、先端で幾重にも巻かれた髪が特徴的な、いかにも遊んでいそうな少女である。

仰向けになって絶命している少女の髪型は、先月末の金曜にニュースで報じられていた、佐藤美奈子のものに良く似ていた。が、それでもやはり別人のようで、目元や口元などは似ても似つかない。

既に事切れた少女の口を、癒月は強引にこじ開けた。中から舌を

引きずり出し、それを鋭利な刃物で切断する。次いで、少女の腕の皮を剥がし、それも自分の足元に置く。

自分が他人の身体を解体する。例え夢であれ、こんな光景を毎日のように見せつけられれば頭がおかしくなってしまう。

もう見たくない。お願いだから、見せないで欲しい。そんな癒月の願いも虚しく、夢の中の自分は少女の身体の様々な部分を切り取って並べた。そして、その中から最初に切り取った舌を取り出すと、自分の口を広げてそれを自分の舌と重ね合わせる。

血と、肉と、それから得体の知れない何かの混ざったような、異様な匂いが口内に溢れた。あまりの臭気に今まで堪えてきた色々な物が、一気に胃の奥から這い上がってきそうだ。が、これは所詮夢。胃の中の物を吐き戻すことさえ許されず、癒月はただひたすら、この苦痛に耐える他にない。

（も……もう……駄目……）

泣きたくても泣けず、吐きたくても吐けない。その苦痛に耐えかねたのか、癒月は自ら意識を保つことを放棄した。だんだんと目の前が暗くなってきたが、それでこの異常な世界から解放されるのであれば、癒月にとってはむしろ救いだった。

※　※　※　※　※　※　※　※

「うっ……」

気がつくと、そこは見慣れた自分の部屋だった。枕元に転がっている目覚まし時計を見ると、まだ朝の五時である。

今日は祝日で、学校もない。ここぞとばかりに睡眠不足を解消しようと思ったのだが、あの悪夢はそれさえも許してくれなかったようだ。

（眠いなぁ……）

寝癖の目立つ頭をかきながら、癒月はそっと自分のベッドから出た。正直、身体は睡眠を欲していたが、あんな夢を見た後に二度寝ができるほどのタフな神経は持ち合わせていなかった。

まだ薄暗い部屋の中を手さぐりで進み、癒月は一階にある洗面台へと向かった。とりあえず、顔を洗って落ち着こう。二度寝するかどうかは、それから考えればよい話だ。

鏡の前に立って自分の顔を見ると、数日前よりも確実にやつれている感じがした。既に風邪は治っているはずだったが、それにしては顔色が悪い。

やはり、連日の睡眠不足が原因か。このままでは、今に肌が荒れて髪の毛も枝毛だらけになってしまう。過剰なストレスから、額の目立つ場所ににきびができないとも限らない。

「もう……。ホント、嫌になっちゃうわ……」

鏡の中の自分に語りかけるようにして、癒月はそんなことを口走った。蛇口から出る水に触れると、予想以上の冷たさに手が痺れた。

もう片方の、お湯を出す栓を捻り、癒月は水の温度を調節する。ぬるま湯程度の温度になったところで、一気にすくって顔を洗った。

頬を伝わる雫をタオルで拭き取り、癒月は改めて自分の顔を見る。やはり、顔色が悪い。部屋の薄暗さも相俟って、鏡の向こう側にいるのは自分ではなく幽霊ではないかと思ってしまうほどだ。

今日が祝日で本当によかった。こんな顔では、はっきり言って学校に行くのもはばかられる。

夢のことは気になったが、癒月は部屋に戻って二度寝をすることに決めた。少しでも睡眠不足を解消せねば、それこそ本当に死人のような顔になりかねない。

タオルを洗濯籠の中に放り込み、癒月は大きな欠伸をしながら背筋を伸ばした。腕を上に上げると、寝間着の袖がだらしなく下に垂れさがってくる。

ふと、自分の右腕が気になって、癒月は裾をさらにまくりあげてみた。

「あれ……。ここ、確か痣が……」

昨日の昼時、保健室に運び込まれた時に見つけた大きな痣。見るからに痛々しいその痣が、跡形もなく消えていた。

あれほど大きな痣だったのだ。たった半日で、完全に消え去ることなど考えられない。

自分の目の錯覚か、それとも左腕の間違いだったのか。試しに右

腕をくまなく探し、左腕の裾もまくってみたが、やはり保健室で見た痣は見つからなかった。

（どうなってるの……？）

あの時は、確かに腕に痣が存在したはずだ。痣を押した時の感触も、痛みも、はっきりと覚えている。

では、今朝になって、なぜ痣が綺麗に消えてしまったのか。わからない。連日の悪夢といい、悪夢に出て来た女性と同じ顔をした女性が次々に死体として発見されることといい、ここ最近、自分の身の回りで起きていることは分からないことだらけだ。

――――ガタッ！！

突然、何かが倒れるような音がして、癒月は思わず肩を震わせた。音は外から聞こえて来たようで、癒月は恐る恐る、目の前の窓を開けてみる。

格子の隙間から外を覗くと、そこには一匹の猫がいた。昨日、癒月が学校に行こうとした際に見た、あの黒猫だ。首輪には相変わらず悪趣味な髑髏の鈴がついており、金色に光る二つの目は、これまた昨日と変わらずに、癒月の方をじっと見つめている。

「……ニャオ」

妙に低い、唸るような声で鳴きながら、猫は癒月の前から姿を消した。昨日もそうだったが、やはりあの目は好きになれない。猫で

はなく、なんだかもっと禍々しい存在に、心の奥底まで見透かされているような気になるからだ。

「それにしても、あの猫、どこの家の子なんだろう？」

首輪をしているということは、飼い猫であることに間違いはない。だが、あんな気持ちの悪い猫を飼っている人間など、この近所では癒月の知る限り見当たらない。

あの猫は、いったいなんなのだろう。なぜ、自分の家の周りをうろついているのだろう。

下らない、本当に取るに足らないことではあったが、癒月はなぜか、あの猫のことが気になって仕方がなかった。

※　※　※　※　※　※　※　※

祝日とはいえ、警察の仕事が休みになるわけではない。国民の大半が休みを謳歌しているにも関わらず、工藤健吾は今日も仕事のため警察署にやって来ていた。

公務員は定休が取れる羨ましい仕事などと言われるが、警察に関しては当てはまらないと工藤は思う。こと、警察署勤めをしている刑事に関しては、例え休みの日でも事件があれば直ぐに出動命令が下る。仕事の性質上、代わりを立てるわけにも行かず、酷い時には丸ごと一カ月近くも休みがもらえなくなってしまう。

だが、それなら交番勤務が楽かというと、そういうわけでもない。

彼らは休みこそ必ずもらえるものの、当直の日は徹夜覚悟で仕事をせねばならなくなる。当然、翌日は昼間で寝てしまうことが殆どで、これでは休みがあってもなくても同じような物だ。

当直があっても定休をもらえる交番勤務か、それとも通常は定時で帰れる代わりに事件があれば休みが潰れても文句が言えない警察署勤務か。どちらがマシかという問いに対しては、恐らく永久に答えが出ることはないだろう。

署内に入ると、そこには既に到着していた岡田の姿があった。毎度のことながら、岡田の早起きには頭が下がる。なんでも、未だに早朝のランニングを続けているとのことで、腕っ節の強さにも納得が行く。

「おう、工藤。ようやく来たか」

工藤の姿に気づき、岡田が席を立った。思わず「遅いぞ！！」と怒鳴られるかと思ったが、岡田は何やら数枚の書類の束を手に持つと、それを工藤に押し付けた。

「岡田さん。なんですか、これ？」

「なんですかってことはねえだろう。こいつは昨日、俺が集めた情報を俺なりに整理したもんだ。意外と面白い発見があったんでな。今日の捜査会議で使えるよう、簡単にまとめておいたんだよ」

「そうだったんですか。なんか、独りで仕事させたようで、すいません……」

「気にすんな。お前はお前で、情報を集めていたんだろう？　昨日

は珍しく単独行動してたみたいだからな。もっとも、その顔じゃあ、大した収穫はなかったみたいだが……」

「は、はぁ……。まあ、そんなところです」

昨日、初美と別れた後、岡田は岡田で今回の連続殺人事件について調査を進めていたらしい。その一方で、自分と言えば、甘味屋で高校生相手にオカルト話のネタをふっただけだ。

さすがに工藤も自分の行動が恥ずかしく思えてきた。本当のことが知れたら、いくら岡田とて許してはくれないだろう。自分は自分で疑問に思ったことを調べていたつもりだが、傍から見ればサボりにしか映らないことも事実である。

「で、岡田さん。その、面白い発見ってなんですか？」

自分の考えを悟られないように、工藤は話を岡田のまとめた書類の中身へと持っていった。ああ見えて、勘の鋭い岡田のことだ。下手なことを口走れば、それこそ藪蛇となる。

「まあ、まずは順を追って話した方がいいだろうな。お前、今回の事件で最初に見つかった被害者のことは覚えているか？」

「ええと……。確か、県内の高校に通う女子高生でしたよね。名前は……佐藤美奈子とか言いましたっけ？」

「そうだ。その佐藤美奈子なんだが……どうも、学校ではかなりの遊び人で通っていたらしくてな。まだ十八にもならないガキだってのに、エルメスだのヴィトンだの……とにかく、身の丈に不釣り合いなブランド品なんかも、結構持っていたらしいぜ」

「エルメスにヴィトンって……。そんな物、この辺の女子高生が簡単に買えるんですか？」

「だから、俺もそこが妙だと思って調べてみた。そうしたら、案の定出てきやがったんだよ。佐藤美奈子が、援助交際をしていたっていう事実がな」

「援助交際！？　それ、本当なんですか！？」

岡田の口から出た援助交際という言葉に、工藤は目を丸くして驚いた。なにしろ火乃澤町は、未だ下町風情の残る閑静な田舎町なのだ。駅前は比較的賑やかだが、それでも下町であることには変わりない。それこそ、援助交際などという言葉とは無縁の場所だと思っていただけに、岡田の口から告げられた事実は衝撃だった。

「残念だが、どうやら佐藤美奈子が援助交際をしていたっていう話は本当みたいだぜ、工藤。しかも、ただその辺のオヤジとデートして金をもらうだけじゃねえ。場合によっては、一緒にホテルへしけ込むこともあったってよ」

「ホテルにしけ込むって……。マジですか……」

未成年による売春行為。当然のことながら、これは犯罪である。本人は軽い小遣い稼ぎのつもりだったのかもしれないが、その結果、変態の客に捕まって殺されてしまったのであれば、これはあまりにも悲惨だ。

「佐藤美奈子は、以前から使っていた出会い系サイトがあったみたいでな。そのサイトについて調べていたら、他の被害者との共通点

が見つかったんだよ」

「共通点？」

「そうだ。次に発見された被害者の短大生、安達理恵なんだが、こいつも同じ出会い系サイトに登録してやがった。携帯電話からインターネットに接続した履歴を調べたら、あっさり見つかったよ」

「そ、それじゃあ、もしかして第三の被害者も……」

「ああ、お前の考えている通りだ。昨日見つかった被害者の身元を洗っていたら、やっぱり出会い系サイトを使っていた形跡があった。もっとも、今度は携帯電話なんかじゃなくて、自宅のパソコンだったがな」

「でも、どっちにしろ、売春紛いのことをしていたってのは変わりないんですよね」

「そういうことになるな。ちなみに、昨日見つかった遺体は、県内のアパレルショップに務める店員だった。名前は内海杏子。やっぱり、仕事の仲間の間でも、遊び人として有名だったらしいぜ」

書類の束をめくりながら中身に目を通す工藤に向かい、岡田がどこか軽蔑したような口調で話を終えた。

警察官として、非合法の売春を認めるわけにはいかない。買う側が一方的に責められることの多い売春だが、岡田は売る側にも問題があると考えていた。

楽に金が稼げる。欲しい物を買ってもらえる。そんな安易な理由

から、親からもらった身体を簡単に名も知れぬ男に差し出してしまう。あまりに軽率で、あまりに不愉快な行為だ。

夜の街を歩いている若者に聞けば、決まってこう言うだろう。「そんなこと、みんなやってるよ」と。だが、それでも、やはり親からもらった身体を傷つけてまで、金をもらおうという考えは理解できない。

いったい、いつからこの日本は、こうもおかしな国になってしまったのだろうか。清楚な大和撫子など今は化石のような存在であり、街を歩けば金髪で巻き毛のいかにも遊び人といった女が我が物顔で歩いている。

「まあ、とにかくそういうわけで、捜査は振り出しに戻りそうな気配だな。犯人は、出会い系サイトを使って被害者の女性と知り合った可能性もある。頭のイカレタ野郎が通り魔的な犯行を繰り返していたのかと思っていたが……こいつは意外と、知能犯かもしれないぜ」

嘆いていても仕方がない。そう思った岡田は、工藤が一通り書類に目を通したところで、それを再び自分の手元に戻して言った。

「でも、岡田さん。知能犯って言っても……女性達の身体の一部が持ち去られていたことには、どう説明をつけるんですか？」

「その辺は、犯人をとっ捕まえてみなけりゃ分からんだろうな。計画的に犯行を行うだけの頭を持っていても、初美ちゃんの言っていたみたいに、変態性欲を持っている可能性もあるんだからよ」

「変態性欲ねぇ……。持ち去られた部分に共通点がないから、初美

さんの言っていたフェチの話とは結びつかない気がしますけど……」

「そんなことは、まだ今の段階では分かんねえよ。単に犯人の気に入った部分が、ある時は目玉であり、ある時は耳だったって可能性もあるぞ」

「そうですね。しっかし……こうなると、ますます分かんなくなってきましたよ。不審者や変質者の情報はゼロ。近所に性犯罪歴のある者も住んでいない。おまけに、被害者たちの共通点は、出会い系サイトと来たもんだ」

「ああ、確かにそうだ。その上、出会い系サイトで被害者たちと会っていた人間の足取りも、まだ完全につかめちゃいねえ。たぶん、偽名か何かを使っている可能性もあるからな。こいつを探しだすのは、かなり骨が折れそうだぜ」

手の中の書類をまとめ、それを大きめの茶封筒の中に仕舞い込む岡田。その顔には、どこかもどかしさを隠しきれない様子が見て取れる。

犯人まで後一歩というところに迫りながら、最後の一手がまったく決まらない現状。このまま野放しにしておけば、犠牲者は増える一方である。

警察官として、これ以上の凶行が起きるのを待っているわけにはいかなかった。だが、今は何よりも情報が乏しい。それに、岡田と工藤の二人だけでは、できることにも限界がある。

全ては今日、これから始まる捜査会議で決定される。少しでも早く犯人を追いつめるためにも、岡田は自分のまとめた書類が何らか

の形で役立ってくれることを、心の奥で願ってやまなかった。

〜 伍ノ刻　　冥夜 〜

夕方から降りだした雨は、べたついた霙(みぞれ)に変わっていた。フロントガラスに張り付いてくる雪とも雨とも言えない粒を、車のワイパーがせわしなく追い払っている。

「やれやれ……。警察ってやつは、ほとほと無能の集まりだと思ってたが……まさか、本気で俺のことを追っかけてくるとはね」

愛車のセダンを走らせながら、榛原直人は苛立った様子で言った。無理もない。夕食を作るのを面倒だと思い、たまには駅前の店で何かを食べようと車を走らせたところ、間髪いれずに自分の後を一台の車がつけて来たのだから。

自分を追っている車が覆面パトカーであることは、榛原にも当に分かっていた。回転灯を隠していても、榛原には相手が警察かどうかを見極めるための手段がしっかりとある。

「阿呆どもめ。こちとらには、お前達の動きを知るための手段がちゃーんとあるんだぜ」

そう言って、榛原は助手席置いてある不格好な機械に目をやった。一見してガラクタにしか見えない箱だが、これは高性能の無線機である。いや、実際には無線を傍受するための機械と言った方が正しい。

警察や業界の人間が自分のことを何と言っているのか、榛原とて知らないわけではない。誰よりも早く事故や殺人事件の情報を嗅ぎつけ、その被害者の写真を撮るために現れるハイエナ男。死体をこ

よなく愛し、死体写真に囲まれて過ごすことを至福の時とする変質者。

まったくもって馬鹿らしい。自分が事故や殺人の現場を好んで撮影するのは、少しでもインパクトの高い写真を撮るためである。その方が、売る時にも値を釣り上げられるというだけの理由だ。誰が言いだしたのかは知らないが、死体愛好家呼ばわりなど、名誉棄損も甚だしい。

それに、いくら自分が事故や事件のことを嗅ぎつける力があるからといって、なにも嗅覚に頼って現場に向かっているわけではない。死体の匂いを嗅ぎ分けて現場に向かえるなら、それはもう人間ではなくシデムシだ。

榛原直人が業界関係者の誰よりも早く現場に辿りつける理由。それが、彼の車の助手席に置かれた機械だった。数年前、知り合いのマニアに頼んで作成してもらった、ハンドメイドの無線傍受用機械である。

一昔前、警察無線を傍受することは、そう難しいことではなかった。だが、現代においては第二世代のＡＰＲが導入され、その傍受は極めて難しくなっている。更に、当然のことながら、傍受していることが発覚すれば電波法違反などの罪で裁かれることになる。

警察無線など、傍受する者などいるはずがない。仮にいたとしても、名乗り出たら最後、その人間の人生は終わる。発覚しても同じことで、あまりにもリスクが高すぎる。

所詮はマニアの自己満足。そうでなければ、本気で国家を転覆させるようなことを考える組織でない限り、警察無線など傍受はしな

い。

だが、そういった素人を甘く見ている現状が、榛原にとっては返って好都合だった。

フリーの自分がこの業界で食って行くには、少しでも他とは違う写真を撮って出版社に売りつけねばならない。非合法な手段を使っていることは分かっていたが、そうでもしなければ、フリーで食べて行ける人間などほんの一握りだ。

（さあて……。そろそろ遊びは終わりにするぜ、お巡りさんよ）

バックミラーに映る覆面パトカーを睨みつけながら、榛原は心の中で呟いた。車のギアを入れ替え、助手席に置いてある機械はトランクの中に仕舞う。あくまで平静を装いつつ、そのまま車を有料の駐車場に止めた。

車を出ると、自分のことをつけてきた覆面パトカーもまた、駐車場に止まろうとしていた。相手が動きを止めるのを待たず、すかさず榛原は早足で歩きだす。

向こう側も、どうやら榛原の動きに気づいたようだった。なにやら慌てて車のドアを閉める音がするが、もう遅い。車に乗っている状態ならいざ知らず、歩いて尾行をまくことなど、もう何年も前からやっていることだからだ。

機械の入ったトランクを片手に、榛原は入り組んだ路地裏へと向かう。下町ながらの長屋や飲み屋が集まる駅の裏手は、追手をまくには恰好の場所だ。

右へ、左へと歩くにつれ、自分の後ろから聞こえてくる足音が遠のいていった。さらにゆくと、辺りはしんと静まり返り、もう誰の姿も見る事はない。

「ふう……。連中、ようやく諦めてくれたってわけね」

誰に聞かせるともなく、榛原は独り肩をすくめて呟いた。

「さて、と……。警察の連中をまいたのはいいが、これじゃあ当分は駐車場にも戻れねえな。まあ、しばらくは、そこらの店で適当に暇をつぶすとしますか」

ポケットから煙草を取り出し、口に咥えて火をつける。白い煙の塊を吐きだした後、榛原は下町の路地裏へとその姿を消した。

※　※　※　※　※　※　※　※

榛原が行きつけのラーメン屋を出たのは、既に時計の針が夜の九時を回った時だった。

警察の尾行をまいた後、榛原はその辺の喫茶店で適当に時間を潰していた。別に、何をする予定があるわけでもないが、刑事がうろついていると分かっている駐車場へ、わざわざ戻るほど馬鹿ではない。

その後、しばらくは喫茶店でコーヒーを飲んでいたが、やがて空腹を覚えて店を出た。

尾行をまいたとて、しばらくは油断できない。あまり同じ場所に長居するのも得策ではないし、わざわざ喫茶店で夕食を食べようという気にもならなかった。

路地裏を抜け、榛原は行きつけのラーメン屋に入った。別段、行列ができるほど美味いラーメン屋というわけでもないが、昔ながらの味なので安心して食べることができる。

ラーメン屋で簡単に食事を終え、榛原は時間を気にしながら店を出た。そして、火照った身体を冷ますように夜風に当たりながら、S川のほとりを歩いて今に至るというわけである。

「それにしても……」

残る僅かな煙草を箱から引っ張り出して、榛原はそれを口に咥えた。

「警察の連中は、いったい何を勘違いしているんだかな」

ポケットからライターを取り出して、咥えた煙草に火をつける。口から吐き出した白い煙が、夜の風に乗って闇を白く染めた。

自分が警察に尾行された理由。それは、榛原にもなんとなく分かっている。

ここ最近、火乃澤町で起こっている女性を狙った連続殺人事件。その容疑者として、恐らくは自分が警察にマークされたのだろう。

まったくもって、馬鹿馬鹿しい。そう口に出す代わりに、榛原は再び煙草の煙を吐き出した。

確かに自分は、死体愛好家の変態写真家などと噂されている。業界内でハイエナ呼ばわりされているのも知っているし、こと警察関係者に至っては、自分のことを快く思っていない人間の方が多いだろう。

だが、それだけの理由でこちらを犯人扱いするなど、あまりにも幼稚な考えだ。それに、状況証拠だけで犯人を逮捕できないことは、榛原自身もよく知っている。

もっとも、その一方で、榛原は警察という組織のやり口に関しても色々な意味で知り尽くしていた。今日、自分が刑事達の尾行をまいたのも、警察組織の手口を知っているからこその判断である。

警察は、榛原を容疑者として扱っている。しかし、確たる証拠もなければ令状もない状況では、榛原をいきなり逮捕することはできない。任意同行を求めたところで、榛原自身に断られればそれでお終いである。

だからこそ、警察は別件逮捕という手口を好んで使う。スピード違反、飲酒運転、その他なんでも良いので、とにかく容疑者を捕まえてしまえる口実を作る。そして、強引な取り調べを行い、時には暴力を使ってまで自白を強要し、別の事件の容疑者として再逮捕するというやり方だ。

日本の警察の全てが、そんな横暴なやり方を用いて犯人を捕まえているわけではない。それは、榛原とて知っている。が、今日、自分を追いかけて来た刑事達が、自分を別件逮捕しないとも限らない。

無線を傍受する機械を持って車を出たのもそのためだ。さすがに

この機械が見つかれば、榛原も言い逃れはできなくなる。電波法違反で強引に連行され、最後は猟奇殺人事件の犯人に仕立て上げられてしまわないとも限らない。

「しっかし……今日は、これからどうするかねぇ。駐車場に戻ったって、刑事が張り込んでる可能性もあるからなぁ……」

本音を言えば、有料の駐車場にいつまでも愛車を置いておきたくはない。が、このトランクを持った状態でのこのこ帰れば、職務質問をされた際に厳しい状況となる。

残念だが、今日はトランクをどこかに預けてしまうのが得策だろう。一番安全なのは、コンビニに預けてしまうことだ。自宅宛ての宅配便として頼み、翌朝一番の集荷で家まで届けてもらう。見つかると危険な代物は、一時的に手元から離してしまった方が安全だ。

思い立ったが吉日。そんな言葉を思い出し、榛原は踵を返して河の畔から離れようとした。

ところが、そんな榛原の行く手を遮るようにして、彼の前に一台の車が現れた。白塗りの、どこにでもありそうな乗用車である。土手に生えていた背丈の高い草が邪魔をして、向こう側から榛原の姿は見えていないようだった。

（なんだ、あの車は……）

深夜とまではいかない時刻だったが、それでもこんな夜更けに河川敷までやってくる車があるのはおかしい。どこぞのバカップルがドライブでも楽しんでいるのかと思ったが、それしては様子が変だった。

（警察の尾行か？）

警戒を緩めず、榛原は茂みの影に身を隠した。あの時、完全にまいたはずだと思ったが、どこかで姿を見られたのだろうか。

車のドアが開き、中から一人の男が姿を現した。夕方、榛原を尾行していた刑事達とは違うようだ。

男は車のトランクを開け、その中から、なにやら青いシートにくるまれた物を引っ張り出す。それは縦に長く、随分と大きな物だった。

男はトランクから引っ張り出した積荷を、シートにくるんだまま抱え上げた。調度、人が人を抱きかかえるように、両腕に積荷を乗せて土手を下りて来る。

河の側まで来ると、男はやけに辺りを気にしながら、そっと積荷をくるんでいたシートを剥いだ。先ほどからその様子を窺っていた榛原は、シートの中から出て来たものを見て思わず絶句する。

（死体だ……）

直感的に、そう思った。シートの中から現れたのは、女の物と思しき白い二本の足。茂みの向こうからではその程度しか分からなかったが、それでも女が既に死んでいるということだけは、榛原にも容易に想像がついた。

どうやら自分は、とんでもない現場に遭遇してしまったらしい。もしかすると、あの男は巷で騒ぎになっている、例の連続殺人事件

の犯人なのかもしれない。

恐怖心と好奇心が、榛原の心の中でせめぎ合った。

今、自分の目の前にいるのが連続殺人事件の犯人だとすれば、第一に逃げることを考えた方が良い。何しろ自分の知るだけでも、相手は既に三人、この現場に持ち込まれた死体を含めれば四人は殺している凶悪犯なのだから。

だが、その一方で、榛原の中には犯人の顔を是が非でも拝んでやりたいという気持ちもあった。ここで犯人の正体を突き止めれば、それこそ今までにない特ダネとなる。自分にかけられた嫌疑も晴れるだろうし、榛原直人の名も一躍有名になるに違いない。

茂みの向こうから様子を窺っていた榛原は、相手がまだこちらに気づいていないことで俄然強気になっていた。首から下げたカメラを構え、死体を河に投げ捨てようとしている男の姿をファインダーに収める。

榛原の使っているカメラは、当然のことながら彼なりの改造が施してある。シャッター音を抑えることもできるし、フラッシュを使わずともある程度鮮明な像を写し出すこともできる。

要は盗撮などに使われるカメラなのだが、別に榛原には覗きの趣味があるわけではない。ただ、合法と違法のぎりぎりの範囲で取材をすることが多いだけに、こういった類の道具があると何かと便利だった。

茂みの向こうでカメラを構えたまま、榛原はじっとチャンスを待った。まずは死体と男が一緒に写っている写真を数枚撮り、次に男

の顔を写そうと機会を窺う。

ボチャン、という水音がして、死体が男の手によって河に放り込まれた。仕事を終えた男は、やはり辺りを気にしながら、死体をくるんでいたシートを丁寧に畳んで行く。

（よし……。もう少し……もう少しだけ、こっちを向け）

危険なことをしているという意識は、既に榛原の中で薄れつつあった。それよりも、自分が特別なことをしているという高揚感が、榛原の中を駆け巡る。

嫌われ者のカメラマンだった自分が、一瞬にしてヒーローになったような錯覚。そんな感覚に支配され、榛原は自分の後ろから近づいてくる者の存在に気がつかなかった。

――――ガサリ。

突然、後ろで音がした。榛原が、ハッとした様子で我に返る。

振り向くと、そこにいたのは一匹の猫だった。宵闇に溶け込んでしまうような漆黒の体毛を持ち、その顔の中心で、二つの目が金色に輝いている。

（なんだよ、猫か。まったく……脅かすなっての）

相手が人間でなかったことに、ほっと安堵のため息をつく榛原。しかし、いつまでも安心してはいられない。この猫が妙な動きをし

たせいで、自分が殺人犯に見つかってしまったらどうなるか。先ほど忘れていた恐怖心が、再び榛原の中に込み上げて来た。

（しっ、しっ！　あっちへ行きやがれ！！）

片手を振って、榛原は猫を追い払うような仕草を見せる。音を立てて威嚇できれば話は早いが、それでは自分も見つかってしまう。

もどかしいにらみ合いが、しばらく続いた。初めはこちらに興味を持っていた猫も、程なくして榛原の前から姿を消した。

（やれやれ……。とんだ乱入者だったぜ）

猫がいなくなったことで、榛原は再びカメラを構えて男の姿を追う。見ると、男は既に仕事を終えてしまったのか、車に乗って帰ろうとしているところだった。

このままでは、決定的な証拠をつかみ損ねてしまう。せめて、男の乗っている車のナンバーだけでも抑えなければ。

レンズの望遠を最大にし、榛原は発車しようとしている車の後部に狙いを定めた。そのままシャッターに指を伸ばし、躊躇うことなくそれを押す。

カチリ、というシャッターを押した感触が指に伝わり、榛原はそっと首を上げた。が、次の瞬間、首筋に激しい痛みを感じ、その場に仰向けになって倒れ込んでしまった。

「あ……が……」

声を出そうにも、舌が震えて声にならなかった。否、それ以前に、首から下の全身に力が入らない。まるで糸の切れた人形のように、身体が動きを止めてしまった。

自分の身に、いったい何が起きたのか。先ほどの痛みはなんで、自分はなぜ成す術もなく倒れているのか。

混乱した頭のまま、榛原はふと自分を見下ろす視線を感じて目を動かした。

「なっ……」

そこにいたのは、一人の少女だった。髪を左右で団子のようにまとめ、そこから更に、細長い髪が蔦のように伸びている。身につけているのは、中華料理屋などで、たまに店員が制服代わりにしているような中華服。首には赤い首輪が巻かれ、髑髏の形をした鈴がついていた。

およそ感情らしい感情があるとも思えない目で、少女は仰向けになったままの榛原を見つめている。その指には銀色の指輪のようなものがはまっており、そこから左右に鋭い金属性の棒が伸びていた。

棒の先端についた血痕を見て、榛原は初めて自分の首筋をあれで刺されたのだと分かった。だが、分かったところで、今さらどうすることもできない。

このまま自分は、目の前にいる得体の知れない少女に殺されてしまうのか。最高の特ダネを前にして、こんなところで朽ち果ててしまうのか。

（くそっ……。なんなんだ、このガキは……）

いくら心の中で悪態を吐こうと、結果は変わらない。少女は榛原の前でかがみこむと、手にした金属製の棒を縦に構えた。

今度こそ、本当に急所を刺される。そう思った榛原だったが、少女が次に取った行動は、榛原の予想を裏切るものだった。

指から輪を外し、少女は金属の棒を団子のようにしてまとめた髪に刺したのである。調度、簪（かんざし）でも挿すようにして、棒を自分の髪に挿してしまった。

いったい、この少女は何をするつもりなのか。困惑する榛原を他所に、少女は倒れたままの榛原の身体に馬乗りになる。そして、顔と顔とをつけるようにして、そのまま身体を重ねて来た。

「那我就吃了……」

榛原の耳元で、少女が何事か口走った。瞬間、少女の顔が一瞬だけ、獲物を狩る時のそれに変わる。彼女が口にしたのは中国語のようだったが、榛原にはその意味が分からなかった。

それよりも榛原が気になったのは、言葉と共に少女の口から放たれた吐息だった。むっとする、獣の体臭をより強くしたような、なんとも言えぬ不快な臭い。先ほど店で食べたばかりのラーメンを、全て吐きだしてしまいそうな程に強烈なものだ。

思わず口に手をやろうとした榛原だったが、やはり手はおろか、指の一本さえ動かすことはできなかった。あの、金属棒による一突きで、首から下の神経を完全に麻痺させられてしまったとでもいう

のだろうか。

榛原直人がそれらの答えを知ることは、残念ながら永遠に不可能なことだった。少女は榛原の首筋に顔を埋め、その口が裂けんばかりに大きく開く。そして、口の中から覗く二本の鋭い牙を、榛原の首に突き立てた。

「あっ……がぁぁぁっ……」

途端に、今まで不快な臭いに顔をしかめていた榛原が、全身を痙攣させて苦しみ出した。その顔は見る間に深い皺が刻まれ、頭髪が瞬く間に白く変色して抜け落ちて行く。眼球が飛び出し、皮膚は土のような色になり、全身が、まるで空気を抜かれた風船のように徐々にしぼんで行く。

少女が榛原の首筋から口を離した時、そこに残っていたのは既に榛原直人ではなかった。

極度に乾燥し、硬縮してしまった皮膚と筋肉。皮を被った骸骨のように変貌した頭は、最早人間のものではない。全身が茶色い土のような色になり、誰が見ても、完全にミイラ化しているのは明白だった。

朽ち果てた、かつては榛原直人だったものの残骸を見つめ、少女は満足そうな顔をして笑みを浮かべた。月明かりの下、その瞳を妖しい金色に輝かせながら、軽く舌舐めずりをした後に口を指で拭う。

「我吃？了……」

再び、少女が中国語で何事か口走った。恐らくは、食事を終えた

ことを伝える挨拶であるが、それを聞く者はS川の河原には存在しない。

ミイラと化した榛原の首から、少女は彼の持っていたカメラを強引に奪い取った。そのままカメラを握りしめると、大きくふりかぶって川へと投げ込む。

ドボン、という鈍い音がして、榛原のカメラは暗い水底に沈んで行った。次いで、少女は榛原のミイラを抱えると、それもS川の中に放り込む。最後に榛原の持っていたトランクも河に投げ込むと、S川の畔は再び夜の静寂に包まれた。

河原を吹き抜ける風が、少女の脇をすり抜けて髪を揺らす。風の運んできた雲が、先ほどまで河原を照らしていた月の明かりを遮った。

風が吹き、雲が流れ、月が再び姿を現す。だが、そこには既に、先ほどの少女の姿はない。

――――チリン、チリン……。

風に乗り、どこからか鈴の音が聞こえて来た。河原に立つのは少女ではなく、艶やかな毛をした一匹の黒猫。その首に下げられた髑髏の形をした鈴が、風に揺れて物悲しげな音を立てている。

風が河の水面を撫でる様を、黒猫は金色の目でじっと見つめていた。が、やがて景色を眺めているのにも飽きてしまったのか、ふいと踵を返して夜の闇の中へと姿を消した。

※　※　※　※　※　※　※

月曜日、天倉癒月は久しぶりに、学校の図書室を訪れていた。ここに来るのは、実に一週間ぶりと言ったところか。先週、照瑠に本の貸し出しの手続きをしてもらって以来である。

受付のカウンターに向かうと、そこには例の如く照瑠の姿があった。どうやら月曜日は彼女が当番ということになっているらしい。

「あっ、癒月じゃない」

こちらに気づいた照瑠が顔を上げて癒月の名前を呼んだ。

「ごめんね、照瑠。今、忙しかったかな？」

「私は別に平気よ。それよりも、癒月は何か、本のことで用事があるの？」

「うん。先週に借りた本なんだけど……そろそろ返さなくちゃって思ってね。調度、貸出期限も一週間だったし」

癒月の言葉を聞いて、照瑠の頭にも一週間前の記憶が蘇って来た。

あの日、癒月は眠れないといって、やたらに睡眠に関する本を借りていた。気になって尋ねてみたところ、どうやら彼女が悪夢にうなされているらしいということが判明した。そこで、甘味屋に誘って悩みを聞こうとしたのだが、さして力にはなれなかったことを覚

えている。

「先週か……。あの時は、本当にごめんね。なんだか、あまり力になれなくて……」

「別に構わないよ。誘ってくれたことは嬉しかったし、また今度、一緒に甘い物食べに行こう」

「そうね。私もそのうち、癒月が知ってる穴場の喫茶店にも行ってみたいかな」

「うん。それじゃあ、皆の都合が合いそうな時に、また連絡頂戴」

そう、口では笑っていたが、癒月の顔色はどこか優れない様子であった。

やはり、例の悪夢のせいで眠れていないのだろうか。だとすれば、癒月はかれこれ二カ月以上、自分が人を殺す夢にうなされ続けていることになる。

もし、自分が癒月の立場だったらどうだろう。初めは単なる夢と思うだろうが、すぐに夜が来るのを恐れるようになる。寝る度に後味の悪い思いをさせられるなど、考えただけで気が滅入りそうだ。

「ねえ、癒月。あなた、やっぱり……」

どこか顔色の悪い癒月を気づかって、照瑠が何かを言おうとした時だった。

「なるほど。確かに、ここなら静かそうだな……」

図書室の扉が開くと同時に、なにやら聞き覚えのある声がした。思わず声のする方へ顔を向ける照瑠と癒月。その視線の先にいた意外な人物の姿に、照瑠はしばし自分の目を疑った。

「け、犬崎君……？」

「なんだ、九条か。そういえば、お前は図書委員だったな」

「なんだとは失礼ね。それよりも、あなたが図書室に来るなんて珍しいじゃない。何か、借りたい本でもあるのかしら？」

「いや、そういう訳じゃないんだが……。嶋本に、校舎内で一番静かな場所はどこかと尋ねたら、ここを案内されただけだ」

「静かな場所って……。まあ、確かに図書室では私語厳禁ってことになってるけど……」

本を借りに来たのではないのか。ならば、いったい紅は図書室に何をしに現れたのか。紅はあまり感情を表に出さないため、何を考えているのか照瑠にも今一つ分からないことが多い。

「悪いが九条。この部屋のパイプ椅子をいくつか借りるぞ。さすがに長机の上に寝るわけにはいかないだろうからな」

椅子を借りる。そして、紅の口から出た『寝る』という単語。その二つで、照瑠は紅が何をしに来たのかを直ぐに悟った。

「犬崎君……。あなた、もしかして……」

「お前が何を考えているか知らんが、俺は寝床を探しに来ただけだ。さすがにこの季節ともなると、校舎脇にある木の陰は寒いんでな」

「寝床って……あなたねえ。悪いけど、図書室はあなたの仮眠室じゃないのよ！？」

「問題ない。どのみち、今の時期はまだ利用者も少ないはずだ。試験の一週間前にでもならなければ、満席になることはないだろうからな」

「そういう問題じゃないわよ！　ここは本を読むための部屋であって、昼寝のための部屋じゃないってことを言いたいの！！」

先ほどから、まったく話が噛み合っていない。本の返却手続きを待つ癒月を他所に、照瑠は紅に食い下がった。

このまま紅を通したら、この冬の間はずっと図書室を昼寝の場所に使われかねない。図書委員として、それだけは何と言われようと認められないことだ。

だが、そんな照瑠の言葉に耳を貸すことなく、紅は明後日の方向を向いたまま立ち止っていた。その赤い瞳の先にいるのは、照瑠ではなく癒月である。

気のせいか、紅の顔がいつもに比べて険しい。日中、彼がよく見せている、どこか遠くをぼんやりと見つめるような視線ではない。獲物を見定める肉食獣のような、警戒とも敵意とも取れる鋭い目つきだ。

紅があんな目つきをするのは、決まって向こう側の世界の住人と

関わる時だ。それ以外で、あんな目つきの紅を見た試しがない。

ぶっきらぼうで口は悪いが、それでもどこか抜けていて浮世離れしている。そんな紅があの表情を見せる時は、向こう側の世界の住人がこちら側の世界と関わりを持とうとしている時である。

「おい、九条。そこの女、いったい誰だ？」

視線は癒月に向けたまま、紅が照瑠に尋ねた。

「そこの女って……そんな言い方ないでしょ。この娘は天倉癒月。先週のハロウィンパーティーで、一緒に仕事したじゃない」

「そういえば、そんなこともあったな。すっかり忘れていた……」

「忘れていたって……。あなたねぇ……少しは他人に関心を持つってことも、覚えた方がいいと思うわよ」

照瑠が呆れた声で言ったが、紅は何も答えなかった。相変わらず、凄むような目つきはそのままに、癒月のことをじっと見つめている。

「あ、あの……。私に、何か……？」

見つめると言うよりは、睨みつけると言った方が正しい。そんな紅の視線に耐えかねて、癒月が二、三歩後ずさりながら言った。その声に、紅も何かを思い出したようにして視線を逸らす。気がつけば、その瞳からは先ほどの険しさが消え、いつものぼうっと遠くを見ているようなものに戻っていた。

「いや、すまん……。気にしないでくれ」

踵を返し、紅は照瑠と癒月に背を向けたまま歩きだした。

いったい、さっきの態度は何だったのか。呆気に取られている癒月だったが、照瑠は紅の言葉に何かを感じ、彼のことを呼び止める。

「ちょっと、犬崎君！　あなた、寝床を探しに来たんじゃないの！？」

「気が変わった。それに、ちょっと急用を思い出したんでな。寝床の確保は、また今度だ」

最後まで顔を合わさず、紅はそのまま照瑠達の前から立ち去った。

いったい、彼は何をしに来たのだろう。まったくもって、紅のすることは理解に苦しむものばかりだ。亜衣とはまた別の意味で、彼もまた常識という物差しでは測れない妙な空気をまとっている人間である。

「あの……九条さん……」

癒月に呼ばれ、照瑠はハッとなって声のした方を向いた。そういえば、癒月は本を返しに来たのだ。紅の乱入で忘れていたが、手続きがまだ済んでいなかった。

「ごめんね、癒月。本、返しに来てくれたのよね」

「うん。それよりも、さっきの人、なんだったんだろう……」

「知らないわよ、そんなこと。あいつの考えていることなんて、私

には理解できないもの」

貸出カードにサインをし、照瑠は本の裏表紙にそれを戻す。癒月にまだ夢を見ているのかどうかを聞きたいところだったが、なんだかすっかり気分が削がれてしまった。

犬崎紅は、いったい癒月に何を感じ取ったのか。紅のせいで、癒月が何か妙なことに巻き込まれなければよいのだが。

そんなことを考えながら、照瑠は返却手続きの済んだ本を所定の位置に戻す。本の片付けを終えてカウンターに戻って見ると、既に癒月も図書室から姿を消していた。

※　※　※　※　※　※　※

屋上へ続く階段に、規則正しい足音が響く。昼休みであるにも関わらず、そこには生徒の姿はない。

ガラス張りの戸を開けると、ガランとした空間が広がっていた。貯水タンクから伸びる水道管を始め、大小様々なパイプが壁や床を這っている。

昼間とはいえ、冬の屋上は少し肌寒かった。日差しはあるが決して強くはなく、ともすれば冷たい風が吹き抜けて体温を奪って行く。

屋上のフェンスによりかかったまま、犬崎紅は先ほどの図書室で見た少女のことを考えていた。

天倉癒月。確か、照瑠はそう言っていた。先週、嶋本亜衣に強引に誘われる形で手伝わされたハロウィンパーティーで、悪戯好きの悪ガキ二人を捕まえていた少女だ。

あの時は、仮装をしていたから分からなかったのか。最初はそう思ったが、紅はすぐにその考えを打ち消した。

例え仮装をしていても、別に顔の形まで変わるわけではない。制服に着替えたからといって、まったくの別人と間違えることなど考えられない。

自分が癒月を先週に見た少女とは別人だと思った理由。それは一重に彼女の放っていた気が原因だった。

……向こう側の世界に関わる者であれば、生者か死者かに関係なく、相手の放っている気に敏感になる。それは時に肌を通して感じるものであり、時に嗅覚を刺激するような臭いとして伝わることもあるが、とにかく気を感じられることには違いがない。

紅が図書室で見た癒月の気は、驚くほどに弱まっていた。それこそ、一週間前とは別人としか思えないほどに、弱々しいものになっていたのだ。

病気で何日も寝込んだり、激しい疲労に見舞われたりした際にも、人間の気は弱くなる。しかし、癒月の気に関しては、そのどれにも当てはまりそうな物が無かった。なんというか、不自然に不安定なのだ。それこそ、背中を叩けば口から魂が飛び出てしまわんばかりに、肉体と精神のバランスがとれていないように感じられた。

（あの女……いったい、何者だ？）

記憶の糸を手繰りながら、紅は思いつく限りの仮説を立ててみる。最初に思いついたのは、彼女が生霊を飛ばしているのではないかというものだった。

生霊。死んだ人間が化けて出た幽霊とは異なり、生きた人間の強い念が生み出した、分身のような存在である。その殆どは恨みや妬みなどといった負の感情の産物であり、放っておけば本能のままに、恨みの対象を呪い殺してしまうこともある。

反面、生霊は己の魂の一部を分裂させて作られているため、それ飛ばすことは本体の魂の力の低下、即ち気の減退を意味していた。生霊に魅入られた相手が危険な目に遭うことは間違いないが、生霊を生み出してしまった人間もまた、大きなリスクを負うことになる。

では、天倉癒月の気の減退は、果たして生霊のせいなのか。紅の考えは否だった。

生霊は、本人が強い負の感情を抱かねば産まれない。稀に例外もあるが、どちらにせよ、天倉癒月は人に激しい恨みを抱くような人間には見えなかった。本当のことは分からないが、それでも生霊に癒月の衰弱の原因を求めるのは違う気がする。

（生霊ではない、か……。ならば、何らかの霊傷（れいしょう）を受けたか？）

次に思いついたのは、癒月が霊による攻撃を受けたという可能性だった。実態を持たない向こう側の世界の住人は、当然のことながら生きている人間の肉体を傷つけることはできない。念力のような力を用いてその場にある物を凶器に使えば話は別だが、霊に直接人間を殴ったり蹴ったりする力はない。

霊が人間を攻撃する際は、その魂を直接蝕むという方法を用いる。例えば、幽霊の持っている刀で腕を斬られたりすると、その部分の感覚が一時的に失われる。見た目には何の変化もないが、腕の部分を構成していた魂が削られてしまったためだ。

だが、癒月の衰弱の原因が霊傷だとすれば、今頃は学校になど通っていられないはずだった。それこそ、原因不明の発熱や身体の痛みなどを訴えて、病院に担ぎ込まれているはずである。少なくとも、あそこまで気が弱る程の霊傷を受けたなら、まともな人間では普通の生活は送れない。

（霊傷でもない。だとすると……後は、呪いか何かの類か？）

最後に出て来たのは、癒月が何者かによって呪われているのではないかという考えだった。今までの物と比べ、これは一見して正しいように思えてくる。

ところが、またしても紅は自分の考えを、首を横に振って否定した。

まず、天倉癒月が誰かに呪われる理由がない。仮にどこかで誰かの恨みを買っていたとしても、あそこまで気が弱れば、精神の方に何らかの影響を及ぼしているはずだ。

見たところ、癒月は照瑠と普通に話ができていた。狂っているわけでもなく、無理して話をしているわけでもない。呪いを受けた者の末期としては、あまりにも当てはまらないことが多すぎた。

（呪いでもないのか……。いったい、あの女が衰弱している原因は

何なんだ？）

こんなことは初めてだった。今までに経験して来たどんな事例にも、癒月の事例は当てはまらない。

普通であれば、死んでもおかしくない程に気が弱っている癒月。しかし、多少顔色が悪いとはいえ、見たところ普通の学園生活を送っているようにも見える。

こうなれば、残された手段は一つしかなかった。あの時、自分と一緒に癒月を見ていた者。自分の犬神である黒影に、癒月を見て感じたことを聞いてみる他にない。

白昼の屋上で、紅の影が静かに伸びた。床から盛り上がるようにして立ち上がった彼の影は、その脚から離れてどろどろとした黒い塊になる。

目の前で浮遊する粘性の高そうな塊に、紅はそっと手をかざして意識を集中した。

犬神は、当然のことながら人間の言葉を話さない。彼らと対話するには術者が直接彼らの精神に働きかけ、何を見て何を感じたのかを探る必要がある。

時折、何かを伝えるかのようにして、紅の前でゆらめく黒い塊が回転した。上に、下に、まるで透明の球体の中で影が泳いでいるかのように、流動的な動きを繰り返す。

やがて、その動きが止まったところで、紅はゆっくりと目を開いた。黒い塊はどろりと溶けるようにして下へ落ち、紅の影へと姿を

戻して行く。

「なるほど……。あいつの気から感じていたのは、死臭だったか……」

黒影が紅に伝えたイメージ。それは、犬神か死者と対峙した時に見せる顔だった。死してなお現世に留まり、人に害を成す存在。生者の放つ気とはまったく異なる、不快で淀んだ臭いのする魂。

図書室で感じた違和感の正体は、まさにそれだったのだろう。天倉癒月の今の状態を言葉で表すならば、肉体は生きていても魂は死んでいると言ったところか。

本来であれば常世に行かねばならない魂を、無理やりに現世の肉体に縛り付けている。あの不自然さの正体を答えるならば、そう言った方が正しい気がした。

「肉体は生きているが、魂は死んでいるということか……。だが、そんなゾンビのような人間が、果たして本当に存在するのか？」

自分の考えに生まれる矛盾。紅は再び黙り込んで、フェンスによりかかったまま目を閉じる。天倉癒月が妖怪変化の類であるならいざ知らず、ただの人間が生きながらにして死んでいるなど、紅は聞いたことがない。

だが、そこまで考えたところで、紅はふと何かを思い出したように目を開いた。

生きながらにして死んでいる。その言葉に、紅は先週の工藤健吾との会話を思い出したのである。

反魂の術。人骨を集めて新たな人間を創造する、神をも恐れぬ禁断の人体錬成術。が、その術の難易度は極めて高く、出来そこないの人形が生まれるのが関の山でもある。

天倉癒月が反魂の術によって作られた存在であるというのは、あまりにも馬鹿らしい発想である。しかし、死者の魂を持ちながら生き続けるとなると、そこに多少の類似性は感じてしまう。

（反魂の術は、今回の事例には当てはまらないだろうな……。だが……もしも、俺の知らないような禁術に触れているのであれば、話は別だ……）

思い立ったが早いか、紅は懐から自分の携帯電話を取り出していた。何の飾りも余計な機能もない、旧世代の代物だ。電話と簡単なメールくらいしかできないが、それでも使うには不自由しなかった。

携帯に登録しておいた数少ない連絡先から、紅は四国にある実家の電話番号を呼び出した。そのまま発信を押して待つと、程なくして向こうが電話に出た。

≪どなたですかな……≫

「ああ、婆さんか。調度、いてくれて助かった」

≪その声は紅じゃな。どうじゃ、そっちの生活は？≫

「悪いが、今はゆっくりと話している暇はない。それよりも、調べて欲しいことがあるんだが……」

≪調べて欲しいことじゃと？　お主がそんなことを言うとは、珍しいのう≫

電話の向こうでは、祖母がのんびりとした口調で話している。紅としては早く本題に入りたかったが、ここで苛立っても仕方がないことは分かっていた。

「なあ、婆さん。反魂の術に関しては、婆さんも知っているよな」

≪おお、知っているとも。人が人を造り出す、古来より伝わる禁断の術じゃ≫

「その、反魂の術とは少し異なるんだが……何か、似たような禁術の話を聞いたことはないか。例えば、死者を蘇らせるとか、死霊の魂を別の肉体に宿らせるとか……」

≪死者を蘇らせる術かい？　それはまた、随分な御伽話じゃの≫

「こっちは至って真剣だ。別に、今すぐに思いつかなくてもいい。分からないのであれば、できるだけ急いで調べて欲しい」

≪わかったよ。もっとも、そういった類の話は、私よりも臙良（えんりょう）の方が詳しいがね。どちらにせよ、犬崎家に伝わる禁術の書を、一から調べ直すことになりそうじゃな≫

「すまない、婆さん。謝礼に関しては、後でそちらの望む額を払わせてもらう」

≪そんなもの、気にすることはないよ。まあ、それでもお主が支払うというのなら……久しぶりに、越後の笹団子でも食べてみたいか

のう≫

「笹団子だな。そんな物でいいんだったら、話は早い。爺さんの分と合わせて、後でそっちに送っておく」

電話の向こうからは、まだ祖母の声が聞こえていた。が、紅はそれを最後まで聞くことなく、用件だけ済ませて電話を切った。

天倉癒月の正体は何なのか。今すぐに答えが出ないもどかしさに、紅は胸の奥に何かがつかえているような気がしてならなかった。

できることならば、黒影を癒月の影に潜ませて、その動向を探りたい。しかし、相手の正体が分からない内から下手なことをすれば、返って相手を刺激することになるかもしれない。

残念だが、ここは実家にいる祖父母からの報告を待つ他になさそうだ。校内に鳴り響く予鈴の音に、紅は仕方なく屋上を後にした。

〜 六ノ刻　禁術 〜

月曜日、図書室で照瑠と別れた後、天倉癒月は久しぶりに普通の生活を送ることができた。

図書室で本を返して以来、ここ数日は、あの奇妙な夢も見ていない。久方ぶりの安眠は、何物にも代えがたい程に嬉しかった。その分、遅刻ギリギリまで寝過ごしてしまい、朝食も食べずに学校へ走ることになったのも記憶に新しかったのだが。

もう自分は、あの悪夢から解放されたのだろうか。初めの間は、そう思って安心していた。

だが、甘かった。悪夢はいつも、油断した頃合を狙ってやってくる。闇の中から獲物を狙う捕食者のように、こちらの心の隙間を見つけ、ひっそりと忍び寄って来る物なのだ。

その日、癒月は夢を見た。夢の中では相変わらず自分の意思で身体を動かせない。右も左も分からない闇の中を、こちらの意思とは関係なく歩いている。

これは、あの人殺しの夢だ。悪夢は終わってなどいない。何かの気まぐれで、一時的に頭の中から消え去っていただけだ。

今日、自分の目の前で殺されるのは、いったいどこの誰なのだろう。殺人事件の被害者としてニュースで報じられていた女性か、はたまた全く見知らぬ少女なのか。

惨劇を見せつけられることが分かっているだけに、癒月の胸の中

は嫌悪の気持ちで溢れ返りそうだった。自分が人を殺している夢など、何度見ても見慣れる物ではないのだ。

ところが、その日に限って、癒月の目の前には今まで彼女が夢の中で殺して来た人間達は現れなかった。代わりに現れたのは、学生服に身を包んだ見覚えのある少女。虚ろな目でこちらを見つめているそれは、何を隠そう、癒月自身だった。

（これは……私？）

最初、癒月は自分の目の前に鏡でも置かれているのかと思った。が、すぐにそんな物は無いと分かり、目の前に立つ自分自身の姿に戸惑った。

ここは夢の世界。自分が二人いようと、三人いようと不思議ではない。頭ではそう分かっているのに、癒月は目の前にいる自分自身に何故か恐怖とも言えるようなおぞましい感情を抱いていた。

光のない、死んだ魚のような瞳をして、自分自身がこちらを見つめている。動くこともせず、喋ることもせず、もう一人の自分は闇の中に佇んでいる。

一刻も早く、こんな場所からは逃げ出したい。なぜだか知らないが、癒月はそう思って足を動かそうとした。しかし、金縛りにでもあったのか、足どころか爪先さえも動かせない。死人のような青白い顔をした自分がこちらを見つめているのが、辺りを包む不気味な雰囲気を一層強めている。

闇の中、永遠に続くと思われた自分と自分の睨み合い。このままずっと動けないままかと思っていたが、変化は突然に訪れた。

目の前で表情一つ変えずに佇む自分の口から、つうっと一筋の赤い雫が零れた。それが血だということが分かり、癒月はぎょっとして目を丸くする。

口から血を流したもう一人の癒月は、それでもまったく動かなかった。その間にも口からは血が溢れ、首を伝って制服を赤黒く染めて行く。顔や手にはどす黒い斑点が現れて、物凄い腐臭が辺り一面に漂ってきた。

（な、なによ、これ……）

あまりのことに、癒月は思わず口に手を当てて後ろに下がろうとする。が、それでも金縛りは解けず、何もできないまま目の前の光景を見つめるしかない。

既に、もう一人の癒月の肉体は崩壊を始め、人間としての形を保ってはいなかった。指は腐って下に落ち、眼球も外れて足元に転がっている。髪は抜け、皮膚は剥がれ、中からは白い骨が顔を覗かせていた。

グシャッという音がして、もう一人の癒月はその場に倒れ込む。身体を支えている足が、ついに限界を迎えたのだろう。

後に残されたのは、全身が醜く腐敗した見るも無残な腐乱死体。自分が腐り、朽ち果てて行く様を見せつけられ、癒月はたまらず悲鳴を上げた。

「い、いやぁぁぁぁっ！！」

布団を跳ね飛ばして飛び起きると、そこは自分の部屋だった。

「ゆ、夢……」

分かってはいても、つい口にしてしまう。試しに自分の指を見てみたが、当然のことながら腐ってなどいなかった。

それにしても、今日の悪夢はいつにも増して酷い。自分が人を殺すだけでも気が滅入りそうだというのに、今度は自分が腐って死ぬ夢とは。数日前には悪夢から解放されたと思ったのに、これでは地獄に逆戻りである。

「それにしても……今度は自分が死ぬなんてね……」

あまりに酷い夢の内容に、癒月はつい愚痴をこぼすかのようにして言った。が、次の瞬間、自分が今しがた口にした言葉を思い出し、胸元を抱えて震え上がった。

「死ぬ……。私が……死ぬ……？」

今まで、自分が見ていた悪夢が現実になったこと。それを思い出したのだ。顔の皮を剥がれた少女も、目玉をくり抜かれた女性も、最後は遺体となって発見されたことがテレビのニュースで報じられていた。

他人の空似、単なる偶然と言えばそれまでなのかもしれない。が、しかし、癒月には今までのことを全て偶然として割り切ることが、どうしてもできそうになかった。

正夢。今までの悪夢が全て現実で起こること、もしくは起こって

いたことだとすれば、次に死ぬのは自分ということになる。夢のように、身体が腐って死んでしまうのか、それとも誰かに殺されてしまうのか。

わからない、わからない、わからない。ただ、ひたすらに恐ろしく、気持ちが悪かった。

「大丈夫、だよね……。あれは、ただの夢。そう、ただの夢よ……」

まだ起きるには早い時刻だったが、二度寝をする気にはなれなかった。東の空が白みかけている時分、癒月は自分のベッドの中で、震えながら時が過ぎるのを待ち続けていた。

※　※　※　※　※　※　※

S川河川敷。

火乃澤町を流れる一級河川の畔は、普段は人もまばらな場所であった。遊歩道が作られている場所は早朝のランニングコースとして利用されているが、中には草も生え放題で放置されている場所もある。田舎町の河原など、得てしてそのようなものだ。

そんなS川の河川敷であったが、今日に限って人で溢れ返っていた。もっとも、一般の通行人や何かを見物しに来た客などではなく、その場にいたのは全員が警察の関係者だったのだが。

河原を吹き抜ける冷たい風に顔をしかめながらも、岡田肇は鑑識の男の話を聞きながら、現場の様子を油断なく探っていた。その後

ろからは、工藤が手帳を片手についてくる。

「岡田さん。また、死体が上がったんですか？」

「ああ、そうだ。今度は山の上じゃねえ。川の橋げたにひっかかっているやつを、早朝にやってきた釣人が見つけたんだ」

「平日の朝っぱらから釣りですか。呑気なもんですねぇ……」

「そんなことはどうでもいい。それよりも、問題なのは上がった死体だ」

的外れな工藤の返事を適当に流し、岡田は石の転がる河原を歩いて行く。少しばかり進むと、そこには青いシートにくるまれた二つの死体が置かれていた。

「一つ目のホトケさんは、例の如く女の物だ。舌が抜かれて、皮膚や内臓、それに指も持っていかれている。目ん玉は、今回は無事だったみたいだが……見るか、工藤？」

「うぇ……。いや、話だけで十分です……」

「まあ、そう言うだろうと思ってたぜ。もっとも、もう一つのホトケさんの方は、実際にその目で見る必要があるがな」

そう言って、岡田は死体がくるまれているであろう青いシートを剥ぎ取った。工藤の返事など聞く必要はないと言わんばかりに、手慣れた様子で覆いを外す。

シートの中から現れたのは、男の死体だった。それだけであれば、

刑事事件としては普通である。今回の死体は、その死に方と死んだ人間の双方に問題があった。

「お、岡田さん……。なんですか、これ？」

目の前の現実を受け入れられないのか、工藤が困惑した表情を浮かべた。まあ、無理もないだろう。

彼の前に現れたのは、完全にミイラ化した男の死体。骸骨のように変貌した頭部からは、元の人間の顔を想像することなどできはしない。どうやらS川から引き揚げられたものらしく、右手と左足は川に流されている間に失ってしまったようだった。

「なあ、工藤。こいつ、いったい誰だと思う？」

岡田が男のミイラを指して言った。そんなことを聞かれても、工藤にはさっぱり見当がつかない。ミイラになった知り合いなど、当然のことながら工藤の記憶の中には存在しない。

「驚くんじゃねえぞ、工藤。このミイラは……あの榛原直人のものだ」

一瞬、工藤は自分の耳を疑いたくなった。

榛原直人。死体愛好家として悪名の高い、ハイエナのように事件の臭いを嗅ぎつけることで有名な写真家だ。工藤自身、既に榛原とは二回程の面識がある。もっとも、そのどちらも決して良い印象のある物ではなかったが。

「あの……岡田さん。このミイラが榛原って……どういうことです

か？」

「そんなこたぁ、俺の方が聞きたいくらいだぜ。だが、ミイラの着ている服や、そのポケットから見つかった遺留品から、榛原本人だと見て間違いないそうだ」

「で、でも……先週に見た時、榛原は普通に歩いたり喋ったりしてましたよ。それがミイラになって発見されるなんて……そんな馬鹿なこと……」

「だから、俺にも理由は分かんねえって言ってるだろ。人間をミイラ化させる機械なんてのがありゃあ話は別なんだろうが、それこそ程度の低いＳＦ映画の世界だな」

岡田が吐き捨てるようにして言った。それは榛原に対するものというよりも、事件があまりに不可解な方向に動いていることに対しての苛立ちに思えた。

しかも、岡田の苛立ちの理由はそれだけではない。彼自身、榛原直人が今回の事件に関係しているのではないかと睨み、密かに他の刑事に尾行をさせていた。その尾行がまかれたのが先週の水曜。調度、一週間と少し前のことである。

その後も警察では榛原の行方を追っていたが、その間にも一件の殺人が起きてしまった。そして、少女の遺体の発見現場を探っている最中、現場に程近い近い場所で榛原のミイラが見つかったのである。

榛原直人がミイラ化して発見されたことにより、事件は再び振り出しに戻った。相次ぐ女性を狙った猟奇殺人に加え、今度は容疑者

の一人が変死体として発見される。

もう、何がなんだかわからない。ここ最近になって起きている事件は、あまりにも岡田の知る常識の範疇を越えていた。

犯人は、異常な嗜好を持った変質者か。はたまた、何か宗教的な妄執にとり憑かれた精神異常者か。それとも、岡田のまったく知らない、この世界の常識では測ることのできない存在なのか。

「おい、工藤。お前……あのガキの通っている高校を知っているか？」

岡田が工藤に背を向けたまま言った。

「あのガキって……もしかして、犬崎君のことですか？」

「そうだ。あの妙な術を使うガキだったら、今回の件について何かわかるかもしれねえ。お前、今から学校に行って、ちょっとあいつの話を聞いて来い」

「それだったら、既に先週の内に済ませてます。なんか、妙な術についての講釈を受けましたけど……それ以外は、特に役に立ちませんでしたよ」

「お前、いつの間に……。しっかし、そうなるとますます頭が痛いな。このミイラ、上にはどうやって報告すりゃいいんだ？」

岡田が再び榛原のミイラを見る。苦悶の表情のままに固まった骸骨のような顔は、その言葉に答えることはない。陥没し、ただの穴となった二つの目で、じっと岡田のことを睨み返していた。

※　※　※　※　※　※　※

夕刻の後者に響く予鈴が、学校の授業が終わったことを告げる。校門の前には早くも帰宅する生徒達の姿が見受けられ、校庭では野球部の面々が練習を始めていた。

通用口の前で、天倉癒月は靴を履き変えながら今朝のことを考えた。

自分が腐り、最後は元の姿さえも分からない程に朽ち果ててしまうという悪夢。今までの人殺しの夢も酷かったが、今日の悪夢はそれに輪をかけて気味が悪かった。

正直なところ、今日は学校の授業も頭に入らなかった。睡眠不足も相俟って何度も眠りそうになったのだが、明け方に見た悪夢を再び見るのではないかという恐怖から、眠ることも許されなかった。

靴を履き変え、癒月はとぼとぼと出口へ向かう。その後ろから自分の名を呼ぶ声に気がつき、彼女は静かに後ろを向いた。

「癒月じゃない。今、帰るところなの？」

声の主は照瑠だった。こちらの顔を見ると、心配そうにして近づいてくる。自分では分からなかったが、きっと、よほど酷い顔をしていたに違いない。

「ねえ、癒月。あなた、顔色が悪いみたいだけど、大丈夫？　どこ

か、まだ具合が悪いとか……」

「私なら平気だよ。いつもみたいに、ちょっと眠りが浅いだけだから」

そういう自分の声に、明らかに力が入っていなかった。数日前は風邪からも完全に回復したと思っていたのに、今日はすこぶる体調が悪い。

ふと、自分の手元に目をやると、掌に青黒い痣ができていた。今日はどこかに手をぶつけた覚えもないのに、いつの間にこんな痣ができたのだろう。

気持ち悪い。そう思って痣を隠そうとした時、なにやら腹の奥から物凄い吐き気が込み上げて来た。生臭い、生ゴミと流しの下の臭いを混ぜたような息が口いっぱいに広がり、それだけで涙が出そうになってくる。

思わず口に手を宛てて、癒月は一目散にトイレへ駆け込んだ。後ろから照瑠が何やら叫んでいたが、癒月には聞こえない。洗面台に顔を向けると、我慢できずに腹の中から上がって来たものを吐き出した。

どろりとした、どこか生温かく鉄の味のする液体が、彼女の口から大量に吐き出された。目の前に溢れ返ったその液体を目にして、癒月の顔に瞬く間に恐怖の色が浮かんで行く。

「や、やだ……。これって……血……」

洗面台は、どす黒い血でいっぱいに汚されていた。未だ口の中に

残る、腐臭のような匂いと鉄の味。口内に溢れる不快感が、目の前の物が幻覚でないということを物語る。

いったい、自分はどうなってしまったのか。何か悪い病気に感染し、取り返しのつかないところまで来てしまったのではないか。

考えても答えなど出ないことは分かっていた。癒月の父は医者だが、癒月自身に医学の知識があるわけではない。今、できることと言えば、目の前の洗面台で口の中の不快な物を洗い流すことくらいだ。

自分の口の中と、それから洗面台に溢れた血も洗い流し、癒月は肩で息をしながらその場にうずくまった。トイレの床に腰を下ろすなど普段では考えられなかったが、もう立っていることさえ辛く感じられた。

呼吸が落ち着いたところで、癒月は先ほどの手の痣を見る。痣は先ほどよりも膨らんでいるようで、今にもはち切れて鬱血した血液を吐き出しそうになっていた。

「痛っ！！」

突然、服の擦れた部分に痛みを感じ、癒月は制服の袖をまくりあげた。そこには手の甲にできていた物と同じ痣があり、やはり大きく膨らんで腫れていた。

「そんな……どうして……」

腕の痣を庇うようにして押さえながら、癒月はよろよろと立ち上がる。そういえば、先週もこんな痣が腕にできて、酷く痛んだ覚え

があった。あの時は痣が翌日になって消えていたが、それがどうして今になって再び姿を現したのだろうか。

わからない。自分の身体のことなのに、自分で自分がわからない。

否、それ以前に、自分は何かとても大切なことを忘れている気がする。決して忘れてはいけない、自分にとっては極めて重要なことであるにも関わらず、記憶の中に霞がかかったようになって思い出すことができない。

「あっ……」

失われた記憶の糸を手繰り寄せようとしたところで、癒月の頭を激しい頭痛が襲った。

まただ。この前も、何か大事なことを忘れていると思って考えていたら、酷い頭痛に襲われて邪魔をされた。そして今も、何かを忘れていることに気づいたところで、激しい頭痛が自分の頭を締め付ける。

あまりに酷い頭の痛みに、癒月は再びその場にへたり込んでしまった。髪の毛に指を絡ませるようにして頭を押さえるが、ふと妙な感触に気づいて指をどける。

「きゃっ……！！」

自分の指に絡まっている物を見て、癒月は頭の痛いのも忘れて悲鳴を上げた。

それは、癒月自身の髪の毛だった。一本、二本という程度のもの

ではなく、数十本もの髪の毛がまとめてごっそりと抜け落ちていた。

（もう嫌……。どうして……どうして、私ばっかりこんな目に遭うの……）

未だ胃の中に残る激しい不快感。腕を始めとして、全身のあちこちに感じる痛み。更に、追い打ちをかけるようにして頭を締め上げる原因不明の頭痛と、なによりも自分の身体に起きている異変に対する恐怖。

もう、平静を保っているのは限界だった。身体の痛み、頭の痛み、それに恐怖と不快感がごちゃ混ぜになり、癒月はただ泣き叫ぶしかなかった。

※　※　※　※　※　※　※

癒月が意識を取り戻した時、そこには照瑠の顔があった。未だ霞んで見える視界の向こう側で、照瑠が心配そうにこちらを見ているのが分かる。

頭が痛い。なんとか起き上がってみたが、先ほどの頭痛はまだ残っているようだった。

「えっと……。ここは……？」

辺りの様子を見回しながら、癒月は照瑠に尋ねた。自分はトイレにいたはずだが、今は何やら柔らかい物の上に寝かされている。

「気が付いたんだね、癒月。よかった……」

「照瑠……？　もしかして、あなたがここへ？」

「そうよ。もっとも、たまたま側にいた詩織にも手伝ってもらったけど。さすがに私一人で、あなたを保健室まで運ぶだけの力はないわよ」

そう言われてみると、この部屋には確かに見覚えがあった。先週、廊下で貧血を起こした際にも運ばれた、学校の保健室だった。

「それにしても、本当に大丈夫？　慌ててトイレに駆け込んだと思ったら、中から悲鳴が聞こえてきて……。それで、様子を見に行ったら倒れてるんだもの」

「うん、ごめんね……。心配ばっかりかけて……」

言えなかった。自分の身体に、何か妙な異変が起きていることなど。洗面台の前で吐血し、さらには髪がごっそりと抜けてしまったことなど。

友人に心配をかけたくない。その気持ちもあっただろう。しかし、それ以上に、今の癒月には恐怖の方が大きかった。

明け方近くに見た、あの奇妙な夢。自分の前で自分が腐り、朽ち果てて行くという悪夢。あれが正夢になってしまうことが、怖くてたまらない。

「ねえ、照瑠……」

身体を起こし、癒月は照瑠の服の袖を引くようにして彼女の手を取った。

「どうしたの、癒月？」

「私……怖いよ……」

言葉と一緒に、照瑠の手を握る癒月の手も震えていた。あの、洗面所での出来事を思い出しただけで、震えが止まらない。

「私ね……今朝、また夢を見たんだ……」

「夢？　それって、あの人を殺しちゃうってやつ？」

「違うの。今度は私が人を殺すんじゃなくて……私が死んじゃうの。鏡の前に立ったみたいに、もう一人の自分が目の前にいて……それが、どんどん腐って行くの……」

次第に声まで震えてきた。自分の身体を覆う得体の知れない恐怖に、癒月はただ怯えることしかできなかった。

「ねえ、照瑠。私、このまま死んじゃうのかな……。それとも、他の女の人と同じで、誰かに殺されちゃうのかな……」

「なに言ってるのよ。そんなこと、あるわけないじゃない」

「でも……もし、私の見ている夢が、正夢だったらどうするの？毎日毎日、変な夢にうなされて……それだけでも頭がおかしくなりそうなのに……」

「大丈夫よ。夢で死んだ人が現実で死ぬなんて……それこそ、ホラー映画の世界だけよ。心配しなくても、夢で死ぬことなんて絶対にないから」

「うん……。ありがとう……」

気がつくと、目には涙が溜まっていた。照瑠の言っていることは気休めかもしれなかったが、それでも癒月には照瑠の言葉が純粋に嬉しかった。

照瑠が「立てる？」と聞いて、手を差し出してきた。その手を握ったとき、なんだかとても温かいものが癒月の中に流れ込んできた。

（あれ……？）

ふと見ると、手にあったはずの痣が消えていた。つい先ほど、それこそ今の今まであったはずの大きな痣なのに、まるで魔法のように癒月の手からなくなっていた。

（やっぱり、考え過ぎなのかなぁ……）

照瑠に手を引かれ、癒月はそろそろとベッドから立ち上がった。気のせいか、さっきよりも身体が軽い気がする。洗面所で催した吐き気も、頭を締め付けるような頭痛も、今はまったく感じられない。

「それじゃあ、そろそろ帰ろっか。癒月、一人で歩ける？」

「うん。たぶん、平気だと思うけど……」

「なんだったら、私が一緒に帰ろうか？　途中の道端で倒れたりし

たら、それこそ大変だしね」

「そうしてくれると嬉しいな。なんだか、今日は一人だと不安だし……」

照瑠の申し出を断る理由は見当たらなかった。迷惑をかけていることは分かっていたが、それでも今は、誰かと一緒にいないと不安に心が押しつぶされそうだった。

※　※　※　※　※　※　※　※

天倉癒月の家は、学校から三十分程歩いた場所にある病院だった。住宅街の中に紛れこむ様にしてあるその病院は、看板さえなければ普通の家と言われてもおかしくない。

癒月の勧めもあって、照瑠は少しだけ家にお邪魔させてもらうことになった。家まで送るだけのつもりだったが、癒月はお茶くらい出させて欲しいと言って聞かなかった。

「なんか、悪いわね。送るだけのつもりが、お茶まで出してもらっちゃって」

「いいわよ、そんなの。照瑠には、ここのところ迷惑かけっぱなしだったからね。このくらいさせてもらわなかったら、こっちの方が申し訳なくなっちゃうわ」

自分でも紅茶を口にしながら、癒月は照瑠にもそれを勧めた。紅茶は癒月の父が入れたもので、色も香りもティーパックとは比べ物

にならないほどに良いものだった。

「ねえ、ところで……」

癒月に勧められるがままに、照瑠は紅茶を口にして言った。

「癒月のお父さんって、お医者さんだったの？」

「うん、そうだよ。本当は外科医なんだけど、内科医の代わりをすることもあるよ。こんな小さな病院じゃ、患者さんを選んだりできないしね」

「すごいわね、それ。外科も内科もって……大病院の先生顔負けの腕じゃない」

「そんな大したことじゃないよ。内科って言っても、近所のお年寄りに薬を飲ませるくらいだし。外科もやるけど、ほとんどが切り傷や骨折の治療ばっかりよ。たぶん、照瑠が思ってるような大手術は、お父さんにはできないんじゃないかなぁ……」

「でも、病院で患者さんを待っているだけじゃなくて、往診なんかもしているんでしょう？　やっぱり、誰にでも真似できることじゃないと思うけど……」

「やだ、あんまり持ち上げないでよ。人前ではしっかりしている風に見えるけど、いつもは単なる中年親父なんだから。この前の朝なんて、寝ぼけて自分のパジャマの裾を踏んで転んでたしね」

「うっ……。それは、確かにちょっとダサいかも……」

リビングで盛大に転ぶ癒月の父親の姿を思い浮かべ、照瑠は必死で笑いを堪えた。もっとも、自分の父親も似たようなところがあるため、人事のように思えない部分もあるのだが。

「紅茶、なくなっちゃたわね。お代り持って来るから、ちょっと待ってて」

開いたティーカップを皿ごと持ち上げ、癒月は部屋の奥に戻って行った。独り残されてしまった照瑠は、白い壁を見つめながらぼんやりと考える。

学校で癒月が倒れた時は一大事だと思ったが、実はそれほど酷くはなかったのか。少なくとも、今の癒月の姿から具合の悪そうな様子は見受けられない。

（私の取り越し苦労だったのかなぁ……）

ふと、そんな考えが頭をよぎる。だが、照瑠が安心したのも束の間、いくら待っても癒月が部屋に戻って来ない。

お茶を入れ替えて来るだけにしては、さすがに時間が長すぎる。まさか、台所で倒れているのではあるまいか。心配になって席を立とうとした照瑠だったが、立ち上がった瞬間に目の前の景色がぐらりと歪んだ。

（な、なに……！？）

自分の意思に関係なく、照瑠の足が崩れ落ちた。頭が物凄く重い。なんとか意識を集中させようとするが、恐ろしいまでの眠気が急激に襲ってくる。

（ど、どうして……）

何かを言おうにも、言葉さえ出なかった。全身を痺れるような感覚に支配され、照瑠の意識は深い闇の底へと飲み込まれていった。

※　※　※　※　※　※　※

九条神社。

社務所に鳴り響く電話の音に、九条穂高（くじょうほだか）は慌てて廊下を走った。秋も終わり、冬になろうとしている時分、裸足で廊下を走ると冷たさが直に伝わってくる。

「はい、九条です」

既に社務所も閉じ、来客なども見られない。時刻は七時にもなっていなかったが、冬の日没は思った以上に早かった。こんな時間に神社に電話をかけてくるなど、いったい誰だろう。

≪その声は、九条照瑠の父親だな≫

電話の向こうで、やけに無愛想な声がした。

「ああ、犬崎君ですか。うちの照瑠が、いつもお世話になっています」

≪俺の声を覚えていてくれたか。だったら話は早い≫

電話の相手は紅だった。なにやら急いでいる様子だが、また何か事件でもあったのだろうか。

≪あんたの娘に話がある。今、そっちにいるか？≫

「いや。照瑠からは夕方に連絡をもらってね。今日は、友達の家に寄って帰ると言われたよ。まだ、戻っていないみたいだけど……久しぶりに、羽目を外しているんじゃないかな」

≪友達だと……？　そいつの名前、あんたは聞いているか？≫

「勿論さ。なんでも、最近できた新しい友達で、天倉さんとか言っていたな」

≪天倉……。まさか、天倉癒月か！？≫

電話の向こうで、紅の舌打ちする音が聞こえた。いつもは冷静な紅にしては珍しいことだ。何かあったのかと思い尋ねようとした穂高だったが、紅は無情にも電話を切ってしまった。

「九条は天倉癒月の家か……。厄介なことになったな、これは……」

旧式の携帯電話を握り締めたまま、紅は苦い顔をして呟いた。

あの日、図書室で癒月の姿を見てから、紅は癒月に対して警戒心を抱いていた。何しろ、相手は生きながらにして死者の魂を持つ存在。その正体も不明である以上、迂闊に手を出すわけにもいかない。

結局、実家からの連絡待ちになってしまい、祖母から電話があっ

たのが今日のことである。笹団子の礼などを言っていたが、そんなものは紅の頭には入らなかった。

天倉癒月の正体と、その裏に潜む禁断の術。祖母の耳から術の詳細を聞いた時、さすがの紅も思わず体を震わせたほどだ。

（このままでは、九条の身に危険が及ぶな……）

迷っている暇などはなかった。紅はコートのポケットから一枚の名刺を取り出すと、そこに書かれた番号に電話をかける。名刺は、以前に甘味屋で工藤と話したときにもらった物だった。

数秒の後、電話の向こうから若い男の声が聞こえてくる。他人の力を借りることは本意ではなかったが、今の紅が頼れるのは工藤しかいない。

「刑事さんか……。悪いが、すぐにこっちに来てくれ。例の連続殺人事件の犯人……そいつの正体がわかったぞ」

刑事を釣るのには最高の餌だと紅は思った。もっとも、既に紅の方でも犯人の目星はついていたため、まったくの嘘ではないのだが。

宵の口の冷たい風が、紅の脇を駆け抜ける。焦る紅の心を煽るように、風は彼の白金色の髪を容赦なく揺らしていた。

※　※　※　※　※　※　※

照瑠が目を覚ましたとき、そこは見覚えのない場所だった。目の

前に見えるのは天井のようだが、部屋全体が薄暗く、どこにいるのかわからない。

背中に伝わる冷たい感触に、照瑠は初めて自分が台のような物の上に寝かされているのに気がついた。慌てて起き上がろうとするものの、何かが体に食い込んでいて体を起こす事ができない。固い、ベルトのような拘束具によって、照瑠の体はしっかりと縛り付けられていた。

いったい、自分は何をされているのか。叫ぼうとしたが、くぐもった声が喉の奥から漏れただけだった。口にはきつく猿轡が咬まされ、声を上げることさえもできなかった。

「やあ、お目覚めかね」

部屋のどこからか男の声がした。首だけを声のする方に向けると、そこには白衣を着た男が一人立っていた。

それは、癒月の父親だった。天倉啓輔。癒月の家に上がった際、照瑠に紅茶を入れてくれた男だ。

もっとも、今の啓輔からは、照瑠を迎え入れた時に見せた優しい雰囲気は微塵も感じられなかった。眼鏡の奥から覗く目には狂気の光を宿し、手にしたビーカーのような物の中で、何やら青白く濁った液体をかき混ぜている。

「君がここに来てくれたことは、実に幸運だったよ。何しろ、癒月を助けるための獲物が、自分から飛び込んできてくれたんだからね」

癒月を助ける。獲物。いったい、啓輔は何を言っているのだろう

か。

状況が飲み込めずに混乱する照瑠だったが、啓輔は構わずに話を続けた。

「君には話しておいてもいいだろう。もう、二カ月以上も前のことだ……」

薄暗い部屋の中で、啓輔がぼんやりと天井を仰ぐ。部屋の中に電灯の類はなく、代わりに壁際には所狭しと蝋燭が置かれていた。その数は、百は下らないだろう。黒布の上に置かれた燭台に刺さり、オレンジ色の明かりが薄暗い部屋を微かに照らしている。

「あの日、癒月は事故に遭った。夏休み、ボランティア活動の帰りに車に轢かれてね。私の病院に運ばれた時は、もう虫の息だったよ」

ビーカーの中の物をかき混ぜながら、啓輔は続ける。時折、カラカラというガラス棒がビーカーの壁を叩く音が部屋に響く。

「手術をしても助からない。目の前で娘が死にかけているというのに、私には手も足も出なかった。それに、なんでも相手の車は逃げてしまったらしく、未だに犯人も見つかっていない。どうして私が……私の癒月がこんな目に遭わねばならないのか……。そう思った時だったよ」

薬を混ぜ終えたのか、啓輔はそれを部屋の奥に置かれた祭壇のような場所に持って行った。そこには人間の頭蓋骨が置かれており、上にはやはり蝋燭が乗っていた。

「私のところに、救いの神が現れたんだ。その人は、私にある術を

教えてくれた。癒月の身体を生き長らえさせ、その魂を現世に留めるための方法をね」

頭蓋骨の上の蝋燭を消し、啓輔は骸骨の頭の部分をつかんで持ち上げた。頭頂部だけを切り離してあったらしく、それはすっぽりと外れて皿のようになった。

骸骨で作られた皿の上に、啓輔は先ほどの薬を注ぎ込む。その上で、今度は何やら香のような粉末を取り出すと、それも皿に乗せて混ぜ合わせた。

「癒月の肉体は、医学的には当に死んでいた。しかし、魂だけは、まだ辛うじてこの世に留まっていたんだよ。だから、私は癒月に代わりの肉体を与えることにしたんだ。事故で失った部分を他の人間からもらい、それを癒月に与えてやることで、魂が抜け出てしまうのを防ごうとした……」

皿の上の薬を混ぜ合わせ、啓輔はそれを刷毛のような物につけた。薬は粘性の高い物に変わっており、タールのように皿の上で細い糸を引いていた。

「初めは出会い系サイトを使って獲物を集めたよ。だが、所詮は金次第で身体を売るような女どもだ。癒月の身体には完全に適合せず、徐々に拒絶反応が出始めた」

人の身体を癒月に与えるという行為。そして、啓輔の口から出た拒絶反応という言葉。まさか、それが癒月の見ていた悪夢や、彼女の体調不良の原因だったのか。あれこれと考えてみたが、照瑠には啓輔の言っている術の詳細までは分からなかった。

「癒月の身体は日に日に限界を迎えて行ってね……。その度に、私は新しい身体の部品を用意してやったのだが、崩壊は早まる一方だった。殺してから移植したのが悪かったのかとも思い、最後の生贄は完全に殴り殺さず気絶させただけだったが……麻酔をかけた状態で目玉や舌を移植しても、やはり結果は同じだった……」

薬の調合を完全に終え、啓輔は刷毛で皿の上の物をかき混ぜながら照瑠に近づいてきた。その目には、やはり光はない。全てを飲み込む漆黒の闇のような瞳の中に、無数の蝋燭が揺れているのが映っているだけだ。

「だから、私は考えた。どこの馬の骨とも分からぬ女など、所詮は癒月の身体として相応しくない。ならば、癒月のことをより大切に思っている人間の身体を、新しく癒月に与えればよい。殺さず、余計な薬なども用いずに、生きたままの状態でね……」

啓輔の顔が、にやりと歪む。その言葉の意味を理解した照瑠はなんとか抗おうとしたが、身体を拘束するベルトが食い込むだけだった。

「見たまえ……」

啓輔が刷毛を動かす手を止めて指を刺した。そこには癒月が下着だけの姿で眠っており、照瑠と同じ手術台に寝かされている。

「癒月の身体は、今も崩壊を続けている。あの痣が、何よりの証拠だよ。事故で怪我をした部分が、再び傷つき始めているんだ……」

癒月の身体には、ところどころに青痣のようなものが見て取れた。その内のいくつかは大きく腫れ上がり、中には裂けてどす黒い血を

吐き出している物もあった。

「この薬は、癒月の身体と君の身体を一つにするための物だ。なあに、心配は要らないよ。最初は少し痛いだろうが、すぐに楽になる。君は癒月の一部となって、永遠に彼女と共に生きるんだ。それこそ、頭の先から爪の先まで一つになってね……」

緑色に変色した液体のついた刷毛を持ち、啓輔が再び薄笑いを浮かべた。目だけを下に向けて動かすと、照瑠は自分も癒月と同じように、下着だけの姿で縛られていることに気が付いた。

恥ずかしさよりも恐怖の方が大きかった。これから自分は、あの得体の知れない薬を全身に塗られ、生きたまま解体されるのだ。それを思うと、自然に涙が溢れて来た。

（誰か……誰か、助けて……！！）

声にならない悲鳴を上げて、照瑠は台の上で泣き叫んだ。だが、彼女の叫びは言葉にさえならず、啓輔の非情な足音だけが近付いてきた。

※　※　※　※　※　※　※　※

犬崎紅が工藤健吾を呼び出したのは、彼の通う火乃澤高校の前だった。待ち合わせの場所としては悪くはないが、これが昼間だったら豪い騒ぎになっていたはずだ。既に日が落ちていたことが唯一の幸いか。

「遅いぜ、刑事さん。俺が待っている間に、次の犠牲者が出たらどうするつもりだ」

「そんなこと言ったって、パトカー一台走らせるのでも許可がいるんだよ。一応、警察の持ち物だからね。僕が刑事でも、勝手に使っていいわけじゃないんだ」

「下らん説明は不要だ。それよりも、早く俺を車に乗せろ。犯人の場所まで案内してやる」

今日の紅はいつになく強引だ。工藤がそう思った時には、紅は既にパトカーの後部座席に入り込んだ後だった。

「ちょ、ちょっと、犬崎君!?」

慌てて止めようとした工藤だったが、時既に遅し。紅は後部座席に腕を組んだまま腰を下ろし、バックミラー越しに助手席の岡田のことを睨みつけていた。

「おい、オカルト小僧。お前、今日は随分と態度がデカイじゃねえか」

岡田が紅に言ってきたが、紅は取り合わなかった。工藤が運転席に戻ったことを知るや否や、二人の刑事に向かって話し出す。

「今から俺が、例の連続殺人事件の犯人のところへ案内してやる。俺の感が正しければ……犯人は、恐らく九条の友達の家にいるはずだ」

「だったら、早くその場所を教えな。そっから先は、俺達の仕事だ」

「悪いが、俺も詳しい場所までは知らない。だが……こうすれば、問題はない」

紅の赤い瞳が一瞬だけ妖しい光を帯びた。彼の全身から放たれた冷たい気に、岡田と工藤の二人は思わずぞっとして黙り込む。何やら車全体を、異様な物が包んでいる。そんな感覚に襲われたのだ。

「これでいい。後は、俺の黒影が九条の匂いを探る」

そう、紅が言った途端、パトカーのエンジンが唐突にかかった。ギアにもエンジンキーにも触れていなかっただけに、工藤は運転席で狐につままれたような顔をしている。

「け、犬崎君。これは……？」

「九十九（つくもがみ）神の術だ。道具に霊魂を宿らせて、そいつの意思で道具を操る」

「道具を操る？　ってことは、このパトカーに幽霊をとり憑かせたってことかい？」

「そうだ。黒影には、以前の事件で九条を見張らせたことがあるからな。その時の匂いを頼りに探らせれば、後は勝手に九条のいる場所まで案内してくれるはずだ」

「匂いを頼りにって……。そんなことができるなら、先に現場だけでも見つけさせることができたんじゃ……」

「残念だが、現場が歩いて行ける距離、行ける場所とは限らないん

でな。一刻を争う可能性もあるならば、車を足に使った方がいい」

紅の言葉が終わりきらない内に、パトカーがけたたましいサイレンを鳴らして走り出した。急に動き出したため、岡田と工藤がシートに叩きつけられて軽く唸った。

回転灯を光らせながら、パトカーが夜の火乃澤町を走る。工藤はブレーキにもハンドルにも触れていなかったが、それでも実に正確に、パトカーは夜の町を走り抜けて行った。

「す、すごいな、これ……。全自動操縦みたいだ……」

工藤が感心した様子で言った。横で見ている岡田は、未だに信じられないといった感じで勝手に動くハンドルやギアを見つめている。

「感心するのは後だ、刑事さん。それよりも、今回の事件……その犯人の正体を知りたくはないか？」

「えっ！？　あ、ああ、そうだね。できれば手短に頼みたいけど……」

「わかった。ならば、目的の場所に着くまでに話すぞ。もっとも、あんた達には理解できそうにない話かもしれないがな……」

先に念を押すようにして言う紅だったが、岡田も工藤も抗議するようなことはしなかった。紅が絡んだ時点で事件が常識で理解できる範疇を越えてしまったことは明白だったし、何よりも、九十九神の術などを目の前で見せつけられれば、否でも向こう側の世界の存在を信じざるを得ない。

「今回の事件は、禁術を使う何者かが動いている。以前、甘味屋で話した反魂の術の話、覚えているか？」

「ああ、勿論だよ。でも、あれは関係なかったんじゃないのかい？」

「そうだ。確かに、今回の事件に反魂の術は関係ない。だが、それとひじょうに良く似た……それも、もっと性質の悪い禁術が関わっていたとしたら、どうする？」

「性質の悪い禁術だって！？　なんだい、それは……」

「死者を蘇らせる術……。否、正確には、死者の魂に生者の肉体を与えるための術と言った方がいいな。本来は死んであの世へ行くはずの魂を、強引にこの世に縛り付ける。死んでしまった肉体の、代わりを与えてやることでな……」

「肉体の代わり……。ってことは、まさか！？」

工藤の頭の中で、点と点が次々に繋がり始めた。

死者を蘇らせる術。そして、生者に代わりの肉体を与えるという言葉。そこから導き出される回答は、ただ一つ。

「今回の事件の犯人は、術のために新しい肉体を必要としていた。術が不完全だったのか、それとも定期的に肉体を交換する必要があったのかは知らないが……とにかく、術のためには他人の肉体を犠牲にする必要があった」

「なるほど。それじゃあ、殺された女性達は、そのための生贄に……」

「そう考えて間違いはない。恐らく犯人は、術によって強制的にこの世に縛り付けられた者の身内ってところだろう。自分の親族を失いたくないがために、他人の命を犠牲にすることも厭わないような人間だ」

最後の言葉を、紅は複雑な表情をして締めくくった。

人を殺すのは罪である。それは変わらない。だが、自分の愛する者のために他人を犠牲にすることは、果たして悪なのだろうか。

殺人は罪だ。そして、禁術に手を出すことも罪である。が、罪を犯した本人は、それを罪と自覚していないだろう。

罪と悪。二つの言葉は似ているようで、まったくの同義ではない。罪は犯した本人の自覚がない以上、完全な悪とはならないのだ。少なくとも、罪人となってしまった本人の主観からは。

だが、それでも紅は、今回の事件の犯人に同情するつもりなどなかった。

彼にとって大切なのは、九条照瑠を守ること。そのためであれば警察でさえも利用し、立ち塞がる者は全て闇薙ぎの太刀で斬り捨てる。相手の理由が何であれ、照瑠の命を危険に晒す存在であれば、それは紅にとっての敵だ。

黒影の乗り移ったパトカーが、急に速度を上げ始めた。目的の場所が近いのか、形振り構わずに他の車を追い越して行く。

「ちょ、ちょっと、犬崎君!?　これ、飛ばし過ぎじゃ……」

「文句を言うな、刑事さん。別に、人を轢き殺したわけじゃない。今は黒影を信用しろ」

そう言った矢先、パトカーが大きく車体を揺らして急ブレーキをかけた。横薙ぎに倒されるような力を受け、工藤と岡田の身体も横に叩きつけられる。

「痛っ！　おい、クソガキ！　曲がるなら曲がると、先に言ってからにしろ！！」

「無理だな。運転に集中している以上、黒影は喋れない。それ以前に、あんた達に黒影の言葉はわからないだろう？」

「ったく、屁理屈を……。って、おい！　この道は車両進入禁止だぞ！　どこ走ってやがんだ、この馬鹿野郎！！」

気がつくと、パトカーは住宅街の中にある細い道に入り込んでいた。左右の壁は、車が通れるか通れないかというぎりぎりの幅しかない。時折、せり出した郵便ポストなどにぶつかって、早くもサイドミラーがポストごと吹っ飛んでいた。

「やめねえか、この幽霊小僧！　こんなところで事故ったら、マジで洒落になんねえぞ！！」

助手席で岡田が喚いたが、紅は気にも止めていなかった。ただ、「黒影は一番近い道を選んで走っているだけだ」と告げ、まるで取りあう様子はない。

そうこうしている間にも、横からはガリガリという嫌な音が響い

てきた。恐らく、車体が外壁と擦れる音だろう。進めば進む程に傷だらけになってゆくパトカーの姿を想像すると、それだけで頭が痛い。

ゴミバケツをひっくり返し、道に置かれた小さな植木鉢を轢き潰し、さらには数件の家の郵便ポストを破壊して、パトカーはようやく車両進入禁止区域を抜けた。

目の前の道が開け、ボロボロになったパトカーが姿を現す。左のドア部分をブロック塀に擦りつけながら、パトカーは強引に左折して道に出た。

これで、ようやく暴走運転から解放されたか。そう思った岡田と工藤だったが、彼らの考えは甘かった。

パトカーが左折を終えたその時、どこからか一匹の黒猫が飛び出して来たのだ。これには黒影も反応できなかったのか、慌てて急ブレーキをかける。が、ハンドルを切り損ねたのか、タイヤが地面を擦る嫌な音を立てながら、パトカーは物の見事に目の前にある電柱に激突した。

「い、いてて……。だ、大丈夫ですか、岡田さん……」

「なんとかな……。だが、俺はもう、こんな化け物のとり憑いた車に乗るなんてのは、まっぴらごめんだぜ」

幸いにして、岡田も工藤も首を痛めずに済んだようだった。それでも頭や首の後ろをさすりながら、二人は恐る恐る車の扉を開けて外にでる。

そこにあったのは、満身創痍になって力尽きたパトカーだった。ここまで酷く壊してしまっては、始末書の一枚や二枚では済みそうにない。

「あのガキめ……。まったく、なんてことしやがる……」

岡田の拳が怒りに震えていた。まあ、ここまで酷くパトカーを壊されれば無理もない。

「やい、クソガキ！　この始末、どうつけてくれるってんだ、おい！！」

岡田が紅を捕まえて怒鳴る。が、紅はやはり意に介さず、そのまま岡田の手を押さえて前に出た。

「ここだ。この建物の中に、九条と犯人がいる……」

閑静な住宅街の中に、ぽつんと佇むようにしてある診療所。その看板には緑色の字で『天倉医院』と書かれていた。

〜 終ノ刻　闇喰 〜

闇の中、天倉癒月は逃げていた。いつもは追う側だったが、今日は追われる側。ここが夢の世界だと分かっていても、口から漏れる吐息は本物だ。

肩で息をしながら辺りを見回すと、そこには誰もいなかった。

もう、相手は諦めたのだろうか。それとも、こちらを見失って闇の中を彷徨っているのだろうか。

溜息と共に、癒月はその場に腰を下ろす。ずっと走り続けていたせいか、足が酷く痛んでいた。

「ここまで来れば、大丈夫かな……」

誰に言うともなく、闇の中でそう呟く。が、そんな彼女の言葉をあざ笑うかのようにして、地面の中から二本の腕が突き出した。

「ひっ……」

短い悲鳴を上げ、癒月は腰を下ろしたまま後ろへ下がる。腕は徐々に天をつかむようにして伸び、やがてその全身を現した。

癒月の目の前に現れた者。それは癒月自身だった。髪は抜け、肌は醜く変色し、左目は既に失っている。まさに生ける屍、ゾンビのような姿となった自分自身が、口から血を垂らしながらこちらに向かってくる。

「来ないで！！」

自分に向かってくるもう一人の自分に対し、癒月は精一杯の力を込めて叫んだ。他にどうすることもできなかったが、それでも相手は少しだけ怯んだようだった。

「あなたなんか……あなたなんか、私じゃない！　だから、こっちに来ないで！！」

完全なる拒絶。それが、目の前の化け物に対して最も効果的な言葉だった。既に元の姿の面影さえ失ったもう一人の自分は、拒絶をされる度に酷く苦痛に歪んだ表情をして呻いた。

「消えちゃえ！　あんたなんか、私の夢から消えちゃえ！！」

癒月の口から放たれた決定的な一言。それを告げられると同時に、怪物と化したもう一人の自分が光に包まれる。光は癒月も包み込み、その眩しさに目が眩んだ。

（うっ……）

目元を庇うようにしてかざした手をどかすと、そこは奇妙な部屋の中だった。先ほどと同じく薄暗い場所だが、完全なる闇ではない。それに、自分の身体も妙に軽く、なにやら宙に浮いているような感じがした。

ここはいったいどこなのか。その答えを出すより先に、癒月は目の前の光景に己の目を疑った。

部屋の壁際に並べられた無数の蝋燭。そして、下着姿で台に拘束

された照瑠と、同じく台の上に寝かされている自分自身。その横では父である啓輔が、なにやら妖しげな薬品をかき混ぜている。

≪あの日、癒月は事故に遭った。夏休み、ボランティア活動の帰りに車に轢かれてね≫

蝋燭に照らしだされた部屋の中に、啓輔の声だけが不気味に響く。それを聞いた瞬間、癒月の頭の中に様々な記憶が走馬灯のように駆け抜けた。

夏休みも終わりに近づいた八月の終わり。その日、自分は青年ボランティアの手伝いに出ていたはずだ。河原で子ども達とバーベキューを楽しみ、夜には打ち上げ花火も行った。

その帰り道、癒月は不幸にも事故に遭った。自分が轢かれた時は痛みとショックで直ぐに意識を失ってしまったが、今ならばはっきりと思いだせる。

青い車体をしたスポーツカーのような車が、癒月を撥ねて走り去る。後に残されたのは、地面に転がる血まみれの自分の身体。

轢き逃げだということは直ぐに分かった。が、癒月自身にはどうすることもできない。薄れゆく意識の中、遠くから響く救急車の音を聞きながら、ひたすら声にならない助けを呼ぶだけだ。

≪癒月の肉体は、医学的には当に死んでいた。しかし、魂だけは、まだ辛うじてこの世に留まっていたんだよ。だから、私は癒月に代わりの肉体を与えることにしたんだ≫

記憶が蘇っている間にも、父は照瑠に話を続けているようだった。

それを聞く毎に、癒月自身も己が何をされたのか、父が何をしていたのかを理解した。

（そっか……。そういうことだったんだ……）

夢で殺した人間が、現実世界でも殺されているという奇妙な事件。そして、自分の身体を襲った数々の異変。

全ての点が一直線に繋がった。

殺された女性が夢に出てきたのは、恐らく彼女達の断末魔の記憶。それが肉体の移植を通して、自分の夢に現れたもの。

痣や吐血は、自分の身体が限界を迎えようとしていた兆候だ。父の話を信じるならば、そう考えて間違いない。

そして、最近になって夢に現れた、ゾンビのように腐敗した自分。これは、癒月自身の身体がもう長くないということを暗示していたのだろう。

どれほど禁術によって肉体を取り変えようとも、既に癒月の魂は現世に留まることができないところまで来てしまった。死者はあるべき場所に帰る。そんな普遍とも言える自然の摂理に逆らった結果、最後は己の崩壊する様さえも見せつけられることになった。

（私、もう死んでたんだね……。なぁんだ……。私、死んでたんだ……）

不思議と恐怖は感じられなかった。それよりも、他人を犠牲にしてまで自分を生き長らえさせた父に対し、怒りにも似た感情が湧い

てきた。

薬の調合を終えた父、啓輔が、身動きの取れない照瑠に迫る。このままでは、次に犠牲になるのは照瑠だ。

照瑠は自分を助けてくれた。悪夢にうなされて苦しんでいた時も相談に乗ってくれたし、今日もトイレで倒れたところを、友達と一緒に保健室まで運んでくれた。まだ、知り合って二週間ほどしか経っていなかったが、それでも癒月にとって照瑠は大切な友人だった。

（照瑠は、私のことをいっぱい助けてくれたよね……。だから、今度は私が助ける番だよ……）

台の上に寝かされている自分自身に、癒月は倒れ込む様にして身体を重ねた。一瞬、意識がどんよりと濁るが、すぐに全身に激しい痛みを覚えて目が覚めた。

事故の怪我が蘇り、徐々に崩壊を始めている自分の肉体。そんなところに舞い戻れば、当然のことながら直に苦痛を感じることになる。

だが、癒月に躊躇いはなかった。痛みを堪えて起き上がると、目の前の父を鋭い目つきで睨みつける。

「ゆ、癒月……」

照瑠の身体に薬を塗ろうとしていた啓輔の動きが止まった。癒月が目覚めたことに対し、予想以上に驚いているようだった。

「馬鹿な……。術の最中に癒月が起きるはずがない。あの男に教わ

った通りにやったというのに……なぜ、癒月が目覚める！？」

予想外の事態に、父は激しく困惑しているようだった。それは照瑠も同様で、目の前で起きていることを見ていることしかできなかった。

じりじりと、癒月は無言のまま父との距離を縮めて行く。ただ事ではないと悟ったのだろう。父も薬を手に後ずさったが、癒月はやはり何も言わずに父親に迫って行った。

「どうして……」

辛うじて聞きとれるくらい小さな声で、癒月がぽつりと呟いた。その声に啓輔の意識が一瞬だけ逸れる。その隙を逃さず、癒月は父親の手から薬の乗った皿と刷毛を叩き落とした。

「どうして、こんなことをしたの……お父さん……」

声を出すのも辛く、歩くだけで全身に痛みが走った。立っているだけでも精一杯のはずだったが、それでも癒月は怯まない。父親の腕を取ると、それを自分の方に引き寄せるようにして激しく引っ張る。

既に死にかけの身体であるにも関わらず、癒月の力は人間のそれをはるかに凌駕していた。もとより半分は死んだ魂。その力を解放すれば、死霊が憑依した人間と同じく凄まじい力を発揮する。もっとも、その反動として、癒月の肉体は崩壊への階段を恐ろしいまでの速度で転げ落ちて行くことになるのだが。

「照瑠……。今、助けてあげるからね……」

倒れた父のことを蹴り飛ばし、癒月は照瑠の方へ向き直って言った。その間にも、癒月の髪が次々と抜け落ちて行く。が、癒月は全く意に介さず、照瑠を縛り付けている拘束を外した。

「ゆ、癒月……」

口の戒めを解かれ、照瑠が癒月の名を呼んだ。

「ごめんね、照瑠。私のせいで、照瑠にまで怖い思いをさせちゃった……」

「何を言ってるのよ、癒月！　あなたは何も悪くないよ。だって、何も知らなかったんでしょ！？」

「うん。でも……今、全部思いだしたの。だから、今度は私が照瑠を助けてあげるね。照瑠が私を助けてくれたみたいに……」

未だ床に倒れている父の腕を取り、癒月は再びその身体を放り投げた。「ぐぇっ……」という声がして、啓輔の身体が壁に叩きつけられる。壁際にあった蝋燭が次々に倒れ、燭台の下に敷かれていた黒布に火が付いた。

「逃がさんぞ……。折角……折角見つけた獲物なのだ……。癒月のための……癒月の新しい身体を……」

頭に蝋燭から零れ落ちた蝋を被りながらも、啓輔はなおも照瑠に追いすがろうとする。そんな父の姿を冷ややかな目で見つめながら、癒月はその首に手をかけて締め上げた。

「逃げて、照瑠。お父さんは、私が押さえておくから……。だから、早く逃げて……」

「で、でも……」

「早くして！　もう、どうせ私は持たないもの……。だったら最後くらい、照瑠のために何かさせてよ……」

「そんな……」

それ以上は、何も言えなかった。

天倉癒月は死ぬつもりだ。いや、癒月の父の話を信じるならば、既に死んでいるのだが。

倒れた蝋燭の火が黒布に燃え移り、火の手は瞬く間に広がっていった。無数に立てられた蝋燭の本体にまで火が移り、癒月と啓輔の回りを炎が取り囲む。

このままでは、癒月が死んでしまう。しかし、炎の前に投げ出された照瑠にできることなど何もない。今は癒月の言う通り、ここから逃げ出す事しかできないのだ。

自分の無力さが悔しかった。なにが神社の巫女だ。これまでも奇妙な事件、不思議な事件に関わってきたが、いつも自分は助けられるばかり。目の前で死を覚悟している友達一人助ける力はない。

こんな時、今は亡き母だったらどうしただろう。もしくは、あの犬崎紅だったら。

照瑠がそう思った時、部屋の扉が唐突に開け放たれた。後ろを振り向くと、そこには岡田と工藤を連れた紅の姿があった。

「大丈夫か、九条」

炎と煙を物ともせず、紅は真っ先に照瑠に駆け寄った。そして、直ぐに自分の着ていたコートを脱ぐと、それで照瑠の身体を隠すように包む。

「行くぞ、九条。このままだと、俺達も火に包まれる」

「で、でも……。癒月はどうするの！？」

照瑠の問いに紅は答えなかった。言葉にして告げずとも、結果は既に分かりきっている。

紅が部屋を開けたことで、外の空気が流れ込んだからだろう。癒月と啓輔を包む炎はさらに激しさを増し、照瑠や紅をも飲み込まんと迫っていた。

このままでは全員が焼け死ぬ。選択の余地など、既にない。

決して後ろを振り向かないこと。それだけを告げ、紅は照瑠の肩を抱えて部屋を出た。岡田と工藤の二人と共に、病院の出口を目指して走る。

外に出ると、冬の冷たい空気が紅達の肌を刺激した。

病院から少し離れた場所で、工藤が消防に連絡を入れる。岡田も警察署の人間に応援を頼んだ。その横では、紅と照瑠が寄り添うよ

うにして、炎に飲み込まれてゆく天倉医院の姿を見つめている。

火が、全てを飲み込むまでの時間は早かった。冬の乾いた風に煽られて、闇夜を照らす炎が激しさを増してゆく。

紅蓮の光に包まれて、徐々に崩れ落ちて行く天倉医院。その光景は、さながら地獄の業火に焼かれる罪人そのものである。窓から黒い煙を噴き出しながら、病院はなおも燃えることを止めようとはしない。

そんな中、紅と照瑠が見つめる先で、炎上する天倉医院の扉が唐突に開け放たれた。その中から現れたのは、火達磨になった一人の男。焼け焦げた白衣から、それが天倉啓輔の変わり果てた姿であることは容易に想像できた。

「あっ……あぁぁぁぁっ！！」

全身を焼かれる痛み、苦しみに、啓輔は咆えた。が、直ぐにその身体は炎の中に引きずり込まれ、絶叫だけが辺りに響く。

「あれは……」

燃え盛る炎の向こう側に、照瑠は一人の少女の姿を見た。火の手から逃れようとした啓輔を、再び炎の中に引き戻した者だ。

「癒月……」

天倉啓輔を、再び地獄の業火の中へと放り込んだ者。それは、彼の娘である天倉癒月に他ならなかった。まるで、父親の罪を自ら共に償わんとするかのように、癒月はその場から逃げ出そうとはしな

かった。

赤々と燃える炎の中で、癒月がゆっくりとこちらを向く。その顔は既に半分が崩れ落ち、片腕も千切り取られたように失っていた。

「見るな！　見るんじゃない！！」

炎の中の癒月がこちらに目を向けた瞬間、紅は照瑠の頭を抱えて抱き締めた。

短い間だったが、天倉癒月は照瑠の友人だった。そんな彼女のあまりに醜い最後の姿を、わざわざ頭に焼き付けさせる必要もないだろう。

なおも勢いを増す炎に包まれながら、癒月の身体が徐々に崩れ落ちて行く。指が抜け、目玉が落ち、顔の半分は皮が剥がれ、その奥にある頭骸骨がむき出しになる。そして、首がその付け根から転がり落ちると同時に、癒月の胴体もまた炎の中に倒れ込んだ。

魄繋ぎ（はくつな）。本来であれば冥府に行くべき魂を、仮初の肉体を与えることで生き長らえさせる禁断の術。反魂の術を更に醜く歪んだ形に発展させたそれは、紅も実家の祖母から連絡をもらうまで知らなかった。

天倉啓輔の犯した罪は、決して許されるものではない。だが、自分の親しい人が亡くなった時、仮にその人を蘇らせる術があるとすれば、どうだろうか。自分の大切な者を失った辛さや悲しみに負けた時、人間は悪魔の囁きに耳を貸してしまうのかもしれない。

「どうして……。ねえ、癒月……。どうしてよ……」

自分の胸で泣く照瑠に対し、紅はかけてやる言葉が見つからなかった。

悪いのは癒月ではない。それなのに、なぜ癒月が死なねばならないのか。そんな照瑠の気持ちは、紅にも分からないではない。

だが、それ以上に、紅は今回の事件の裏に潜む存在に、言い様のない不安を抱いていた。

事件の犯人は天倉啓輔だ。これは揺るぎない事実だろう。

では、啓輔に魄繋ぎの術を教えたのは誰なのか。何しろ、紅の祖母や祖父でさえ、実家の蔵に封じられた禁術の書に目を遠さねば分からなかったような術なのだ。田舎町の開業医が、見よう見まねでできるものではない。

闇の死揮者（コンダクター）。かつて、退魔具師である鳴澤皐月（なるさわさつき）から聞いた者の存在が紅の脳裏を掠めた。

自ら相手を呪うようなことはせず、呪具を与えたり禁術を教えたりすることで人を闇に堕とす者。自分からは決して動かず、裏で人の死を操るが故に、自ら死のコンダクターを名乗る者。

確証はなかったが、今回の事件に闇の死揮者が関わっている可能性は高かった。盆を過ぎた頃に起きた『君島邸事件』に次ぎ、また も出所不明の術に関係する不可解な事件。これでは、死揮者の存在を疑わない方が嘘になる。

（闇の死揮者か……。だが、仮に今回の事件が奴の仕業だとして…

…なぜ、奴は闇を広めるようなことをする……？）

考えたところで答えは出ない。分かってはいたが、考えずにはいられなかった。

遠くの方から、パトカーや消防車のサイレンが聞こえて来る。岡田と工藤の呼んだ警察や消防が、ようやく駆けつけてきたのだろう。

宵の闇と静寂を破るようにして燃え続ける天倉医院。それを見つめるのは紅達だけではない。

電柱の影になっているブロック塀の上で、全身を墨で染めたかのような黒猫が、金色の目を光らせている。その首に巻かれた首輪には、髑髏の鈴が鈍い輝きを放っている。

――――チリン、チリン……。

鈴の音がして、黒猫が塀から飛び降りた。だが、その音を気付いた者はおらず、猫は夜の闇に溶け込む様にして颯爽と姿を消してしまった。

※　※　※　※　※　※　※　※

N県警火乃澤署。

昨日の天倉医院での火災騒動は、消防隊の活躍もあって被害を最

小限に食い止めることができた。それでも病院は全焼してしまったのだが、近隣の家屋にそこまで大きな被害を出さなかったのは不幸中の幸いだった。

「しっかしなぁ……。毎度のことながら、この報告書をどうしようか……」

椅子の背もたれに体重を預けながら、工藤健吾は頭の後ろに手を組んでぼやいた。

火災の被害が少なかったことは良い。事件の犯人も見つけ、これ以上の惨劇を食い止められたところまでは、何の問題もない。

問題なのは、やはり事件の真相部分だった。真犯人である天倉啓輔が、娘のために死者蘇生の儀式の生贄を探していたこと。そんなことは、間違っても報告書に載せるわけにはいかないのだ。

その上、今回は不祥事も多かった。犬崎紅の仕掛けた九十九神の術のせいで、岡田と工藤の乗っていたパトカーは大破。おまけに犯人も家ごと焼け死んでしまい、証拠と思しき物は全て灰になってしまった。

喧嘩に勝って、勝負に負ける。どこの誰が言っていたのかは忘れたが、工藤はふとそんな言葉を思い出した。

確かに、事件は解決した。町を襲った猟奇殺人事件の犯人は死亡し、これ以上の被害者が出ることもないだろう。

だが、警察官としては、こんな解決の仕方はあまりに不本意なものだった。おまけに暴走運転でパトカーまで大破させてしまったの

だから、今日の仕事は報告書一枚では済みそうにない。それこそ、徹夜で始末書の山と格闘する覚悟が必要だ。

「やっぱり、岡田さんや初美さんの言っていた通り、カルト宗教に心酔した医者が殺人を行っていたってことにするしかないかなぁ……。本当の事を書いても、どうせ信じてくれそうにないし……」

毎度のことながら、向こう側の世界の関係した事件の報告書を出すのは難儀だ。下手に霊だの祟りだの禁術だのと言った話は書けないし、かといって、詳細不明のまま未解決事件にしてしまうわけにもいかない。

一昔前に流行ったＳＦ物の海外ドラマの主人公を思い出し、工藤は思わずその姿を今の自分と重ね合わせた。

そういえば、彼も周囲からは変人扱いされながら、現代科学では考えられないような奇妙な連中を相手に捜査を続けていたっけ。もっとも、フィクションの世界とはいえ、向こうは天下のＦＢＩ。こちとら田舎町の警察署に務める一刑事であるが。

報告書の内容に行き詰まったまま、工藤は自分の携帯電話が鳴っているのに気がついた。見ると、何やらメールが届いているようだ。中身を確認してみると、メールの送り主は初美だった。

「なになに……。『今日は、久しぶりに実習が早く終わりそうなの。よかったら、岡田さんと一緒に焼肉でもどう？』か……」

これが初美以外の相手なら、工藤も素直に誘いにのっただろう。だが、初美は県警お抱えの法医学者。その上、あの性格である。きっと、肉を焼いている最中にも、その日の解剖実習の話をするに違

いない。それも、ホルモンやユッケばかり頼んでは、工藤の反応を楽しみながら。

「初美さんと焼肉か……。今日ばっかりは、報告書と始末書に救われたかもな……」

焼肉とビールが遠のいて行くことよりも、死体の話を聞きながら食事をしなくて済んだことに対する安堵の方が大きかった。

心霊絡みの事件に巻き込まれたり、検死解剖の話を聞かされながら食事をしたり。向こう側の世界の住人達が事件を起こす限り、工藤に安息が訪れることはなさそうである。

初美に断りのメールを返信しながらも、工藤はこれからも続くであろう自分の不幸を呪いながら、大きく項垂れて溜息をついた。

※　※　※　※　※　※　※

深夜の県道を、一台の車が走っていた。青い車体をした、いかにも走り屋が好みそうなスポーツカータイプの車だ。

山に囲まれた夜の県道は人気がなく、二つのライトから放たれる明かりだけが道を照らしていた。人のいない町はずれの県道は、車を運転する男にとっては都合のよい場所だった。

夜とはいえ、町中では警察の目が厳しすぎる。スピードを求める男にとって、町の道路は窮屈すぎた。

カーブの多い道であるにも関わらず、男は更にアクセルを踏んで車を加速させた。タイヤが地面を擦るような音がしたが、お構いなしである。ガードレール擦れ擦れに車を走らせて、束の間のスリルを楽しんでいる。

そもそも、スポーツカーと呼ばれる類の車は、そのどれもが極めて高いスピードを出せるように設計されている。が、その本領を発揮できるような場所は、日本の国道には存在しない。有料の高速道路でさえ、大型車は時速八十キロまで、それ以外の車でも時速百キロまでという速度制限がある。

所詮は宝の持ち腐れなのだ。交通ルールなどに縛られている限り、スポーツカーは己の真の力を発揮することもなく一生を終えることになってしまう。

だが、車を運転している男は、そんな現状に屈しようとは思わなかった。車として生まれたからには、きっとこいつも限界までスピードを上げて走りたいと思っている。そんな勝手な思い込みから、夜の道を駆けまわっていた。

右へ、左へ、まるでレーシングカーのような動きをしながら、男は車を走らせる。この時間ならば、対向車が現れる心配も殆どない。今はこの県道全てが、自分と愛車のためだけに存在するサーキットなのだ。

そんなことを考えて、ふと他所見をしたのが悪かった。

車を飛ばす男の目の前に、いきなり一人の少女が現れたのだ。ドンッ、という鈍い音がした時には既に遅く、男の車は少女を跳ね飛ばした後だった。

「やっべぇ……。やっちまった……」

口ではそう言いながらも、さして悪びれた顔もせずに男は車を降りた。後ろを見たが、轢いてしまったはずの少女が見当たらない。そのまま跳ね飛ばされて、がけ下にでも落ちてしまったのだろうか。

訝しげに思いながらも、男は車の前方部分を確認した。そこには大きなへこみができており、先ほどの少女とぶつかった際にできたことは明白だった。

「畜生め！　あのクソガキ、俺の前にいきなり飛び出してきやがって……。お陰で、俺のランサーに傷がついちまったじゃねえか！！」

愛車が傷つけられたことが分かった瞬間、男の顔に怒りが浮かんだ。跳ね飛ばした少女のことなど気にもせず、自分の愛車のことだけを気にかける。他の人間が見たら、まず不快に思うこと間違いない態度だ。

辺りに誰もいないことを確認し、男はぶつぶつと文句を言いながら運転席へ戻った。

自分が人を轢いたのは、実はこれが初めてではない。以前、夏に町中で車を飛ばしていた時も、はずみで誰かを轢いた記憶がある。

だが、そんなことは、男にとっては些細なことでしかなかった。現に、今も自分は警察に捕まることもなく、こうして夜の山道を走り回れている。人を一人轢いた程度では、男の心に罪悪感など生まれることもなかった。

車のギアを入れ直し、男はふとバックミラーに目をやった。その瞬間、今まで不満そうにしていた男の顔に、瞬く間に恐怖の色が現れた。

「あっ……」

そこにいたのは、先ほど男が轢いたはずの少女だった。団子のようにまとめた髪も、赤い中華風の服にも見覚えがある。

間違いない。今しがた、男が跳ね飛ばしたはずの少女である。

あれだけのスピードで跳ねられたにも関わらず、少女の身体には傷一つなかった。いや、実際には動くこともできないくらいに重傷を負っていたのかもしれないが、少女は苦しむような素振りを一切見せなかったのだ。

「な、なんだ、おま……」

言葉を全て言い終わる前に、男の首筋に何かが刺さった。冷たく鋭い金属質の棒が神経節に刺し込まれ、男の五感が一瞬にして失われてゆく。

峨眉刺(がびし)。指輪に金属棒を取り付けたような、古代中国で使われていた暗器の一つ。無論、そんなことは男には分からない。分かるのは、全身の感覚を一瞬にして奪われたという事実のみ。

「あ……あが……」

何かを叫ぼうにも、口が震えて声にならなかった。浜辺に打ち上げられた魚のように、パクパクと口を動かして震えるだけだ。

突然、男の乗っていた車のドアが開かれた。開けられたのは助手席の扉で、その向こうには見知らぬ青年の姿があった。

「う……あぁ……」

苦し紛れに、男は目だけで青年に助けを求めた。が、すぐに後悔することになる。

扉を開けた青年が、するりと滑り込むようにして車の中に入ってきたのだ。その顔に、酷く歪で邪悪な笑みを浮かべながら、男の顔をまじまじと見る。獲物を品定めする獣のような目で、男の頭から足の先までを舐め回すようにして眺めた。

「なるほど。どうやらあなたが、天倉癒月さんを殺した轢き逃げ犯というわけですね」

天倉癒月。その名前に男は聞き覚えがなかったが、自分が以前に轢き逃げしたであろう少女のことを言っているのは察しがついた。

「残念ですが、天倉医院は焼け落ちてしまいましたからね。もう少し闇が醸成されるのを待とうと思ったのですが……まことに勿体ないことをしたものです」

わざとらしく首を横に振りながら、青年は大きく溜息をつく。

この青年は、いったい何者なのだろう。見たところ、警察の関係者ではないようだ。いや、それ以前に、こんな時間に山の中の県道を歩いている方が不思議である。それも、不審者のような妖しげな身なりではなく、小奇麗なスーツなどに身をつつんでいるのだから。

「まあ、手ぶらで帰るのも癪ですからね。今日は、あなたの闇を頂いて満足するとしましょうか……」

青年の顔が、再びにやりと歪んだ。その瞬間、男は全身を虫が這いずり回るような悪寒を覚え、擦れた声で悲鳴を上げた。五感など当に奪われていたにも関わらず、背中に冷たい物が走るのがはっきりと分かった。

月が雲に覆われ、辺りを包む闇が一層に深さを増す。それに呼応するかのようにして、青年の身体から何かが溢れた。

それは、一言で言えば闇そのものだった。影と言うにはあまりにも暗く、煙というにはあまりにも濃い代物。深淵よりも深く、決して明けることのない夜の闇を思わせる、邪悪で貪欲な負の化身。

粘性の高い液体のように、青年の背後から湧きだした闇が男を包む。触手のように枝分かれした闇が、蛇かミミズのように蠢いて絡みついてくる。

「あ……あがぁ……」

耳、鼻、そして口。顔面の至るところから、闇は男の中に侵入した。その度に、男は自分の身体から何かが吸い出されてゆくような感覚に陥った。

恨み、妬み、嫉み、そして我欲。あらゆる負の感情が、次々に吸い出されてゆく。初めは痛みや苦しみを伴ったが、すぐにそれは快楽へと変わった。

ずるずると、何かを引きずり出すようにして、闇が男の身体から離れていった。それは青年の背中に納まると、小さくしぼんで見えなくなってゆく。

「ネエ、紫苑(しおん)……」

先ほどから、後部座席で事の成り行きを眺めていた少女が口を開いた。どこか妙な訛りのある、少し不自然な日本語だった。

「食事、終ワッタノ？」

「ええ、終わりましたよ。でも、この男の闇は、大して美味しくはありませんでしたね。あるのは我欲の塊ばかりで、少々大味な感じは否めません」

「ソウ……。デモ、私ニハ関係ナイカナ……」

待ちくたびれたと言わんばかりの表情で、少女が後部座席から首を伸ばす。横から男の顔を覗き込むと、男は既に正気を失って笑っていた。

「あ……あはは……。あはははは……」

悲しみも、苦しみも、そして痛みもない。全ての負の感情を吸い出された男に残されたのは、麻薬の見せる幻覚にも似た多幸感。

既に男には感情らしい感情も残されていなかったが、少女にとってはどうでも良いことだった。

目の前の男は餌でしかない。壊れていようといまいと、これから

自分が男の魂を喰らうことに変わりはないのだから。

「サッキノハ、カナリ痛カッタヨ。ダカラ……今日ハ、イッパイ食ベサセテモラウカラネ」

そう言って、少女は男の首筋に噛みついた。鋭い牙を突き立てて、男の身体に流れている気を吸い出して行く。

青年が人の魂の負の部分を喰らうのだとすれば、少女が喰らうのは魂そのものだった。正も負も、陰も陽も関係ない。少女にとっては、この世に生きる者全ての魂が餌なのだ。

少女が男の中身を吸い出すに連れて、男の身体は徐々に萎んでいった。顔には深い皺が刻まれ、肌が変色して目玉が抜け落ちる。頭髪が一瞬にして白髪になり、皮膚は乾燥し、最後は萎んだ風船のようになってミイラと化した。

「食事は終わりましたか、マオ？」

車の外から先ほどの青年、紫苑が尋ねた。その声に、マオと呼ばれた少女は無言のままミイラから口を離す。

「しかし……今度は食べ残しの処理にも気を使って下さいよ。契約者へのアフターサービスも大切ですが、証拠を残すようでは困ります。警察に食べ残しを見つけられれば、こちらも動きにくくなりますからね」

「没問題。今度ハ、チャント山ノ中ニ埋メルカラ……」

中国語を交えながら、マオは紫苑に言葉を返す。紫苑はそれ以上

は何も言わず、県道から眼下に広がる火乃澤町の街並みを見つめていた。

「ここは良い町です。陰の気が程良く流れ込み、闇を育てるのに苦労しない……」

夜風に吹かれながら、紫苑は山の冷たい空気を思い切り肺に取り込んだ。冷気と同時に流れ込んで来る陰の気が、彼の身体に心地よい刺激となって浸み渡る。

彼にとって、闇は最高のディナーである。病みを闇として醸成した人間の魂、純粋な想いが転じて生まれた負の感情こそが、彼にとっての嗜好の食べ物。人間の魂の闇の部分だけを喰らうことによって、彼の身体の飢えと渇きは満たされる。

「今回は失敗でしたが……しばらくは、様子を見ることにしましょう。どうやら、僕の敵になりそうな者も動いているみたいですしね。その分、育てがいのある闇に出会えると良いのですが……」

風が吹き、木々の梢を乱暴に揺らした。なびく髪を押さえながら、紫苑は後ろに振り返る。

「ねえ。そう思いませんか、マオ？」

車の中から返事はなかった。代わりに聞こえて来たのは、夜の山に響く鈴の音。

――――チリン、チリン……。

髑髏の鈴を鳴らしながら、紫苑の足元に一匹の黒猫が現れる。その猫を胸に抱きかかえると、紫苑は再び夜の火乃澤町を見下ろしながら、その顔にうっすらとした笑みを浮かべていた。

あとがき

ハロウィンに便乗してモンスター物を書こうと考えた、猟闇師シリーズ第五弾。

初めに謝っておきます。

色々と試行錯誤した結果、今回はバトル、アクションなどといった属性が皆無の作品になりました。

冒頭にフランケンシュタインからの引用を載せておきながら、知能の低い人造人間が暴れ回るような要素は微塵もありません。

どちらかと言えば、スティーブン・キング氏の小説、ペットセマタリー（映画版はペットセメタリー）に受けた影響の方が強いです。

また、警察が登場する頻度が今まで以上に高いですが、彼らがまったく役に立っていません。

推理物として書くつもりもなかったので、黒幕当てるだけなら素人でもできます。

恐らく、冒頭部分を読んだだけで、殺人事件の犯人には目星がついてしまうのではないかと思います。

バトルでもアクションでも推理でもない。

では、本作でやりたかったことは何なのか。

それは……ズバリ、何気ない日常の突然の崩壊です。

サスペンス・ホラーの好きな方であれば、『ひぐらしのなく頃に』というサウンドノベルを御存じの方は多いと思われます。

もともとは単なる同人ゲームの一つでしかなかった作品のようで

すが、今では様々な媒体で作品が販売され、映画化やアニメ化もされました。

単なる同人ゲームでしかなかった作品が、なぜここまで大きな反響を生んだのか。

過激なグロ描写が多いこと。

その裏に秘められた、絆というテーマが人々に感動を与えたこと。

理由は様々なものが挙げられていますが、私はあえて、何気ない日常が徐々に狂った方向に崩壊して行く様を描いたことを挙げます。

ホラーゲームの多くは、既に事件が発生している状態から始まります。

お化け屋敷に侵入したり、合宿所に到着したその日に殺人が起きたり、訪れた町が既にゾンビの巣窟になっていたり……。

しかし、ひぐらしは冒頭部分だけ見れば、単なるギャルゲーにしか思えないような展開しかありません。

漫画的な演出や、随所に挿入されたオタク的なネタなど、ホラーの要素は欠片もないのです。

それが、中盤辺りから一気に雲行きが怪しくなり、最後はとんでもない惨劇へと発展してしまう。

こうした日常の崩壊過程を細かく描いたことが、プレイヤーに親近感を持たせたのではないかと考えています。

話の内容を知らないオタクな人が、「萌アニメだと思って見たら酷い目に遭った……」などと言っていることが、作者の思惑通りに事が運んでいる証拠ではないかと……。

第五弾である魄繋ぎでは、無謀にもそれらの演出と同じ効果を狙

った描写が多々あります。
あまりにも馬鹿馬鹿しい、九条照瑠達の日常シーン。
警察無線をいともたやすく傍受してしまう、漫画的な演出（本当は、傍受しても暗号化されているため、トランク一個分に納まる機械で翻訳までするなんて無理です）。
ともすればリアリティを損ないかねない程に、和むような場面や突拍子もない描写を随所に挿入しています。

それもこれも、全ては終盤の鬱展開を引き立てるため。
今まで何気なく過ごしていた日常が、一度に音を立てて崩れさる恐怖。
そんな物を書いてみたいと思い、今までの作風を無視するようなこともしました。

本当はフランケンシュタイン物を書くつもりだったのに、気がつけば前作同様のバッドエンド展開。
なんだか、悪い意味で読者の皆様を裏切ってしまったような気もしないではないですが……これも新しい挑戦の一つと受け止めていただければ幸いです。

また、最後に登場した謎の青年と猫娘のコンビ。
この二人に関しても、後々の作品の中で徐々に正体を明かして行くつもりです。

闇を用いて闇を喰らう、闇の死揮者（コンダクター）。
紅と照瑠の二人とは別の、邪悪で危険な魅力を持たせて行ければと思っています。

２０１０年　１１月　５日

雷紋寺　音弥

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6173o/

猟闇師　～ 魄繋ぎ ～

2011年1月30日17時09分発行